

高知県香美郡土佐山田町

KAMI TOSAYAMADA

ひびのきサウジ遺跡
発掘調査報告書

(土佐山田町埋蔵文化財調査報告書第8集)

土佐山田町教育委員会

1990

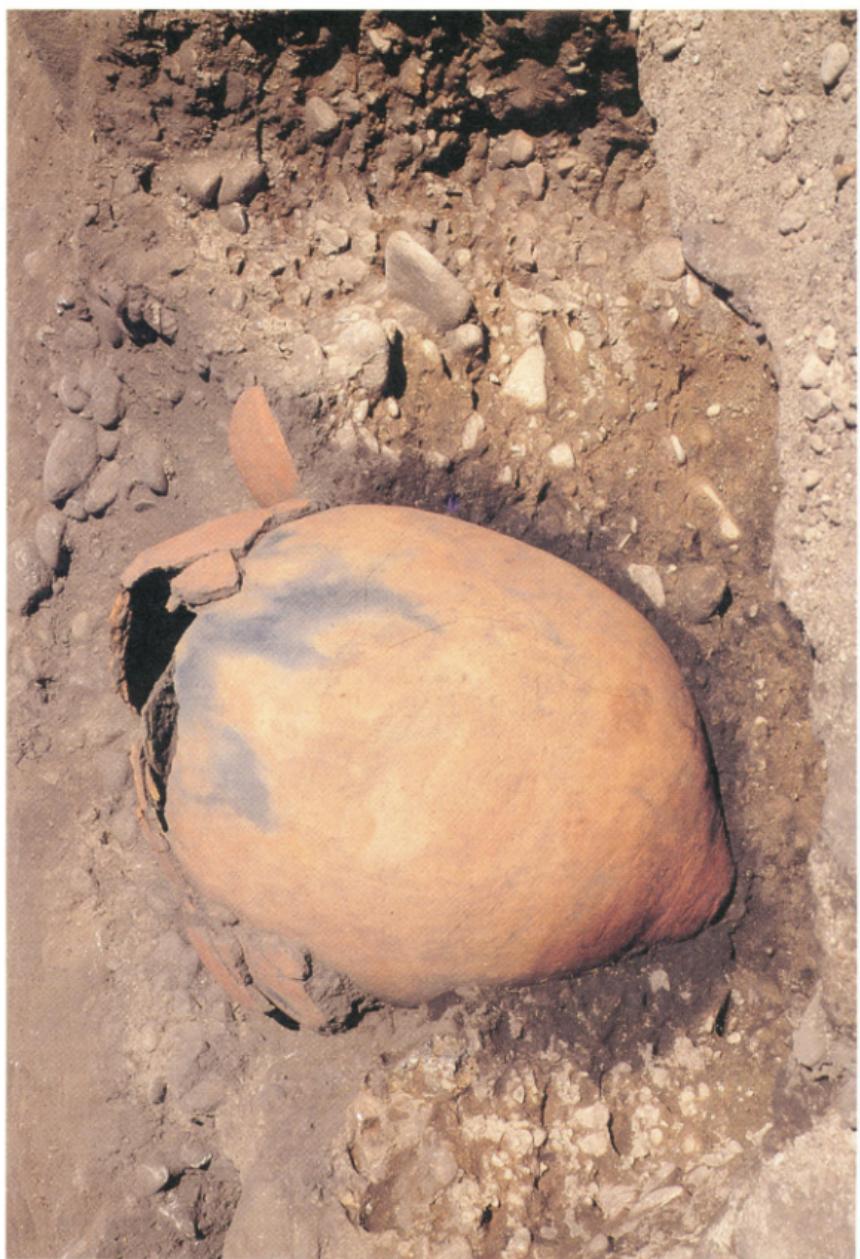
ひびのきサウジ遺跡 発掘調査報告書

(土佐山田町埋蔵文化財調査報告書第8集)











序

土佐山田町には、縄文時代から近世に至るまでの数多くの遺跡が分布しておりますが、中でも今まで調査した「ひびのき遺跡」「林田遺跡」などに代表されます弥生時代後期から古墳時代にかけての遺跡は、高知県下でも有数の分布密度の高さを示しています。

埋蔵文化財は、古代住民の生活様式を解く鍵として貴重なものであります。各種開発事業により一朝にして破壊される恐れがあり、まことに憂慮すべき事態が、しばしば発生しております。今回の「ひびのきサウジ遺跡」の発掘調査もその例に洩れず住宅地造成によって影響を受ける範囲について、貴重な埋蔵文化財の保護と、記録保存に万全を期すため実施したものであります。

今次の本発掘調査によって当遺跡は、弥生時代から中・近世にかけての複合遺跡であることが、明らかになりました。竪穴住居や壺棺墓群と共に県内最古の井戸が検出され、平安時代の土器が多く発見され、今後の研究に新たな資料を得ることができたのは最大の成果がありました。

終りに本調査で御指導をいただきました県教育委員会高橋啓明氏、暖かいご理解と、ご協力を載きました地権者の四国電力株式会社、炎熱酷暑の中で作業に従事されました皆様や、本調査にあたって何かとご協力いただいた関係者及び地域住民の方々に衷心より厚く御礼を申し上げます。

平成2年3月

土佐山田町教育委員会教育長 岡本 章博

例　　言

1. 本書は、四国電力株式会社山田寮新築事業にかかる「ひびのきサウジ遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 遺跡は、高知県香美郡土佐山田町百石町2丁目に所在する。ひびのき遺跡群に所在することから小字の「サウジ」をとって「ひびのきサウジ遺跡」と呼称することとする。
3. 調査対象面積は、約2,600m²であり、第1次調査1,400m²終了後引き続いて第2次調査1,200m²の調査を実施した。
4. 調査は、土佐山田町教育委員会の依頼により、高知県教育委員会が行った。
　　調査顧問　岡本　健児　（高知県文化財保護審議会会長）
　　調査員　高橋 啓明　（高知県教育委員会・文化振興課・社会教育主事）
　　事務担当　吉村 泰典　（土佐山田町教育委員会・社会教育課・係長）
5. 本書の執筆・編集は高橋が行った。執筆に際しては、調査顧問の岡本健児氏の御指導を得た。
6. 遺構については、S T（堅穴住居）、S B（掘立柱建物）、S K（土坑）、S E（井戸）、S D（溝）、S A（欄列）、P（柱穴）で標示した。
7. 出土遺物の図版番号については、実測図の番号と一致している。
8. 調査にあたっては、四国電力株式会社、土佐山田町農業協同組合、付近の住民の方々等の協力を得た。また吉原達生氏の協力を得た。記して深く謝意を表したい。
9. 測量では、小松幹典氏の協力を得た。記して深く謝意を表したい。
10. 測量補助及び資料整理では、吉成承三・小松幹明・大原喜子・山中美代子・吉本謙子・谷相祐子・矢野雅・山本裕美子・浜田雅代・竹村延子・山本利恵・松木富子等各氏の協力を得た。記して深く謝意を表したい。
11. 火山灰分析については、株式会社京都フィション・トラックに依頼した。
12. 遺物は、土佐山田町教育委員会及び高知県教育委員会で保管している。

本文目次

第Ⅰ章 発掘調査に至る経過	2
第Ⅱ章 周辺の地理的・歴史的環境	4
第Ⅲ章 調査の方法と調査区の概要	5
1. 調査の方法	5
2. 調査区の概要	5
第Ⅳ章 基本層序と包含層出土の遺物	7
1. 基本層序	7
2. 包含層出土の遺物	7
第Ⅴ章 遺構と遺物	12
1. 弥生時代	12
2. 古墳時代	47
3. 平安時代	60
4. 中世～近世	78
第Ⅵ章 総括	97
1. 遺物について	97
2. 遺構について	102
火山灰分析結果報告書	130

図 版 目 次

Fig 1	周辺の遺跡分布図	1
Fig 2	遺跡周辺地名図	3
Fig 3	発掘調査位置図	6
Fig 4	トレンド・グリッド・セクション位置図	8
Fig 5	基本層序	9
Fig 6	包含層出土遺物	11
Fig 7	S T 1 実測図	13
Fig 8	S T 3 実測図	14
Fig 9	S T 6 実測図	15
Fig 10	S T 8 実測図	17
Fig 11	S T 9 実測図	19
Fig 12	S K 3・33・37, S D 2・6・7・10-A・12・13・15・23実測図	20
Fig 13	壺棺墓群位置図	23
Fig 14	S K 8-壺棺墓 1 実測図と出土遺物	25
Fig 15	S K 12-壺棺墓 2, S K 19-壺棺墓 3 実測図と出土遺物	26
Fig 16	S K 20-壺棺墓 6 実測図と出土遺物	28
Fig 17	S K 21-壺棺墓 4 実測図と出土遺物	29
Fig 18	S K 21-壺棺墓 4 出土遺物	30
Fig 19	S K 22-壺棺墓 5 実測図と出土遺物	32
Fig 20	S K 23-壺棺墓 7, S K 24-壺棺墓 8, S K 32-壺棺墓 9 実測図と出土遺物	34
Fig 21	S T 1 出土遺物	35
Fig 22	S T 3・6 出土遺物	36
Fig 23	S T 6 出土遺物	37
Fig 24	S T 8 出土遺物	38
Fig 25	タ	39
Fig 26	タ	40
Fig 27	タ	41
Fig 28	タ	42
Fig 29	タ	43
Fig 30	タ	44
Fig 31	タ	45
Fig 32	S T 9, S K 3・33, S D 12, P 213・832・1021・1166・1500出土遺物	46

Fig 33	S T 2 実測図	48
Fig 34	S T 4 実測図	49
Fig 35	S T 5 実測図	50
Fig 36	S T 7 実測図	51
Fig 37	S T 10 実測図	53
Fig 38	S K 7・13・14・27・28・30・35・38, S D 3・4・8・14・20 実測図	54
Fig 39	S T 2・4・5・7 出土遺物	58
Fig 40	S T 7・10, SK14, SD 4, P1803 出土遺物	59
Fig 41	S B 1 実測図	61
Fig 42	S B 2, SA 1 実測図	62
Fig 43	S B 3・4 実測図	63
Fig 44	S K 5・6・17・29, SD 1・10-B・11 実測図	64
Fig 45	S E 1 実測図	66
Fig 46	S E 1 出土遺物	71
Fig 47	夕	72
Fig 48	夕	73
Fig 49	夕	74
Fig 50	夕	75
Fig 51	夕	76
Fig 52	S E 1, SD, P 出土遺物	77
Fig 53	S B 5・7 実測図	79
Fig 54	S B 6 実測図	80
Fig 55	S B 8 実測図	81
Fig 56	S B 9 実測図	83
Fig 57	S B 10・12 実測図	84
Fig 58	S B 11 実測図	85
Fig 59	S K 1・2・4・9～11・15・16・18・25・26・31・34・36 実測図	88
Fig 60	SD 5・9・10-A・16～19・21・22・24 実測図	91
Fig 61	S B, SK, SD, P 出土遺物	95
Fig 62	SK, SD, P 出土遺物	96
Fig 63	全体図 (別添)	

表 目 次

第1表	周辺の遺跡分布表	
第2表	S E 1出土・黒色土器碗法量表	99
第3表	タ　皿法量表	99
第4表	タ　杯法量表	99
第5表	タ　碗法量表	99
第6表	綠釉陶器・二彩陶器県内出土地	104
第7表	古代「墨書・刻書き」県内出土地	104
第8表	遺物観察表(包含層出土遺物)	107
第9表	タ　(　タ　)	108
第10表	タ　(S T 1・3出土遺物)	109
第11表	タ　(S T 3・6出土遺物)	110
第12表	タ　(S T 6・8出土遺物)	111
第13表	タ　(S T 8出土遺物)	112
第14表	タ　(　タ　)	113
第15表	タ　(　タ　)	114
第16表	タ　(　タ　)	115
第17表	タ　(　タ　)	116
第18表	計測表　(　タ　)	116
第19表	遺物観察表(S T 9, S K 3・33, S D 12, P 213・832・1021・1166・1500)	117
第20表	タ　(S T 2・4・5・7出土遺物)	118
第21表	タ　(S T 7・10, S K 14, S D 4, P 1803出土遺物)	119
第22表	タ　(S E 1出土遺物)	120
第23表	タ　(　タ　)	121
第24表	タ　(　タ　)	122
第25表	タ　(　タ　)	123
第26表	タ　(　タ　)	124
第27表	タ　(　タ　)	125
第28表	タ　(　タ　)	126
第29表	タ　(S E 1, S D 1・11, P 586・683・1649・588・ 591・500・116出土遺物)	127
第30表	遺物観察表(S B 9・11, S K 15・18・36, S D 10-A・17~19, P 103出土遺物)	128

第31表 遺物観察表 (P 105・746・778・1135・1494・1544・1802・1804出土遺物)	129
第32表 土錘・釘・砥石計測表 (S B 9・S K 4・S D 5・10, P 409・1711・ 1135出土遺物)	129

写 真 目 次

P L 1 A区完掘状態	
P L 2 B区完掘状態	
P L 3 調査前全景	135
P L 4 S T 1 検出状態, 完掘状態	136
P L 5 S T 2 検出状態, 完掘状態	137
P L 6 S T 3 検出状態, 完掘状態	138
P L 7 S T 4・5 検出状態	139
P L 8 S T 6 検出状態, 遺物出土状態	140
P L 9 S T 7 完掘状態, S T 8 検出状態	141
P L 10 S T 8 バンク	142
P L 11 S T 8・9 完掘状態	143
P L 12 S T 10 完掘状態, 北壁セクション	144
P L 13 S B 1・2 検出状態, 完掘状態	145
P L 14 S K 3・4 検出状態, S K 11 完掘状態	146
P L 15 S K 15 遺物出土状態, S D 1 セクション	147
P L 16 S E 1 遺物出土状態, 完掘状態	148
P L 17 S D 10-A・B 検出状態, S D 10-A バンク	149
P L 18 S T 1・2, 包含層遺物出土状態	150
P L 19 S T 3・4, 包含層遺物出土状態	151
P L 20 S T 4・5 遺物出土状態	152
P L 21 S T 6・9・10 遺物出土状態	153
P L 22 S T 8 遺物出土状態	154
P L 23 S T 8 遺物出土状態	155
P L 24 S K 3・37 完掘状態, S K 3・36・S D 11・18 遺物出土状態	156
P L 25 S K 8-壺棺1, S K 21-壺棺4 遺物出土状態	157

P L 26	S K 8-壺棺 1, S K 12-壺棺 2, S K 21-壺棺 4, S K 22-壺棺 5, S K 20-壺棺 6 遺物出土狀態	158
P L 27	S K 23-壺棺 7, S K 24-壺棺 8, S K 32-壺棺 9, P 遺物出土狀態	159
P L 28	S E 1 遺物出土狀態	160
P L 29	S E 1, P, S B 1 遺物出土狀態	161
P L 30	包含層出土遺物	162
P L 31	壺棺出土遺物	163
P L 32	壺棺, S T 1 · 3 出土遺物	164
P L 33	S T 3 出土遺物	165
P L 34	S T 8 出土遺物	166
P L 35	タ	167
P L 36	タ	168
P L 37	タ	169
P L 38	タ	170
P L 39	タ	171
P L 40	タ	172
P L 41	S T 5 · 8 出土遺物	173
P L 42	S T 7 · 9, S K 3 · 33, P 213 · 1021 · 1500 出土遺物	174
P L 43	S T 2 · 4 · 5 · 7 · 10 出土遺物	175
P L 44	S E 1 出土遺物	176
P L 45	タ	177
P L 46	タ	178
P L 47	タ	179
P L 48	タ	180
P L 49	タ	181
P L 50	タ	182
P L 51	タ	183
P L 52	タ	184
P L 53	タ	185
P L 54	タ	186
P L 55	タ	187
P L 56	S E 1, S K 15, S D 19, P 116 · 591 出土遺物	188
P L 57	S K 36, S D 10-A · 18, S T 3 · 5 出土遺物	189
P L 58	S T 4 ~ 6 · 8, S B 9, P 58 出土遺物	190

P L 59	S T 10, 包含層出土遺物	191
P L 60	S E 1 出土遺物	192
P L 61	S E 1 出土遺物, 鐵器	193
P L 62	土錘・砾石	194
P L 63	壺棺 3, P 1166, S T 1 ~ 3, S D 13, 表探出土遺物	195

★ひびのきサウジ遺跡

No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	西佐古遺跡	平安～中世	13	松原丸遺跡	奈良～平安	25	タンガン古窯址	古墳
2	大領遺跡	古墳～中世	14	東臼井遺跡	古墳	26	楠カドタ遺跡	弥生～古墳
3	高柳遺跡	弥生～中世	15	山田三ツ又遺跡	古墳～平安	27	須江上段遺跡	古墳～平安
4	原遺跡	弥生～近世	16	伏原遺跡	弥生～平安	28	須江北遺跡	古墳～平安
5	古町西遺跡	弥生～平安	17	大塚遺跡	弥生～近世	29	ワラハラ神社遺跡	奈良～中世
6	稻荷前遺跡	弥生～近世	18	大塚古墳	古墳	30	南ヶ内遺跡	弥生～古墳
7	楠目遺跡	弥生～近世	19	楠目城跡	中世	31	新改古墳群	古墳
8	大西土居遺跡	弥生	20	予岳古窯址群	古墳～平安	32	新改古窯址群	古墳～平安
9	前の芝遺跡	弥生～平安	21	前行古墳群	古墳	33	大谷古窯址群	奈良～平安
10	下タ野童跡	古墳～中世	22	モジリカワ遺跡	弥生～近世	34	三反山田古窯址	平安
11	野々下遺跡	古墳～平安	23	西クレドリ遺跡	弥生～古墳	35	大法寺古窯址群	古墳～平安
12	坂西遺跡	古墳～中世	24	植村城跡	中世	36	ひびのき遺跡	弥生～近世

第1表 周辺の遺跡分布表

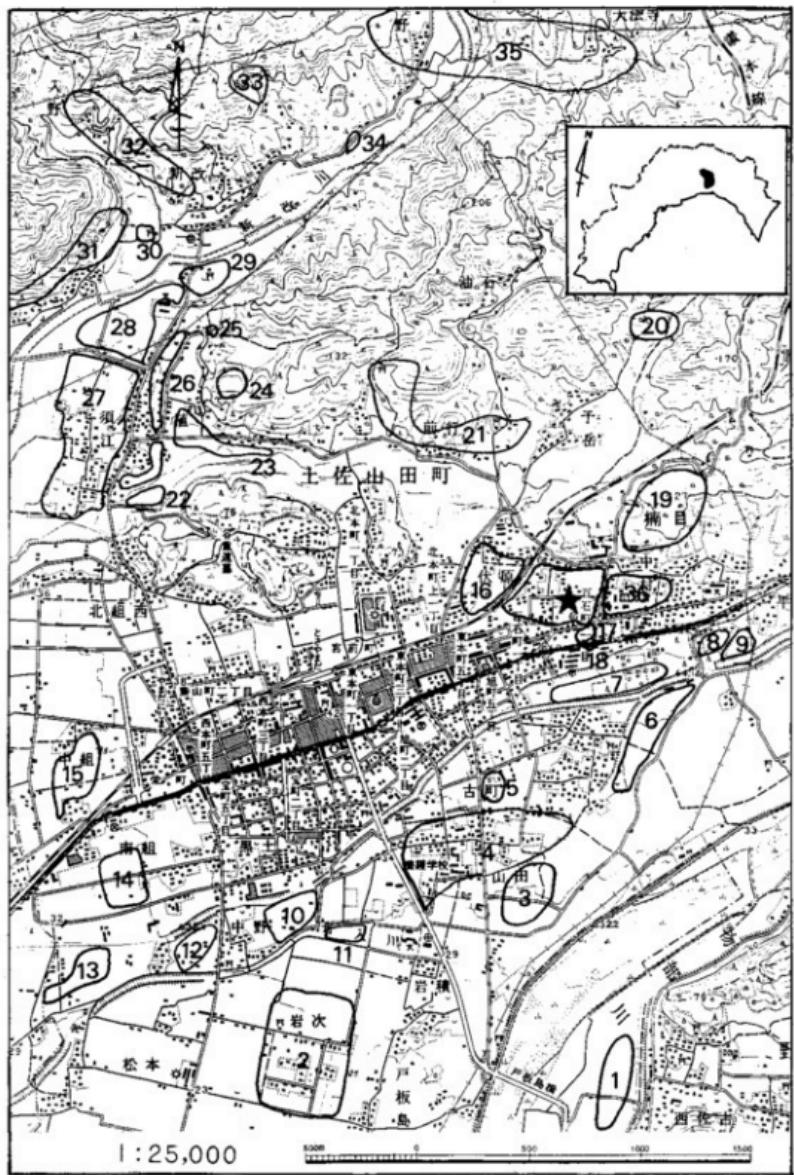


Fig 1 周辺の遺跡分布図

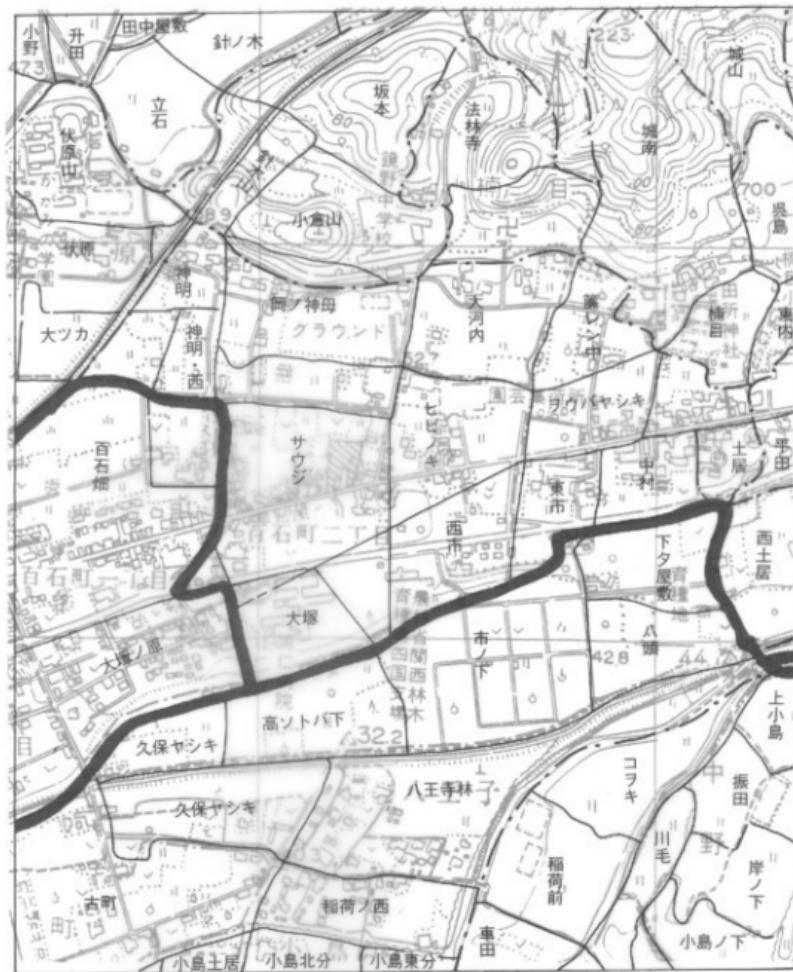
第Ⅰ章 発掘調査に至る経過

四国電力株式会社山田寮新築事業は、独身社員の福利厚生を目的として計画された。

一方、当事業対象地区は昭和57年に土佐山田農業協同組合本部建設に伴い緊急発掘調査の行なわれた「ひびのき遺跡」⁽¹⁾に隣接し、「ひびのき遺跡群」のほぼ中央に位置する。現況は、畝及び「うばめがし」の苗木床となっており、弥生土器、土師器、須恵器等、弥生時代から中・近世にかけての遺物の散布がみられる。いわば古代より今日の土佐山田町を築き上げた祖先の営みの足跡ともいるべき埋蔵文化財が確認されており、当事業が施行せられれば、現状は大きく変更され、地下の埋蔵文化財は極めて甚大な影響を受けることは必定である。かかる意味において、以下の如き試掘調査を実施することになった。

遺跡の性格、範囲、遺物、遺構の深度や残存の状況を把握する目的で平成元年4月26日から5月10日まで試掘調査を実施した。調査はA（2×32m）、B（2×27m）、C（2×40m）の3本のトレンチ及び2×2mのグリッド2箇所、2×3mのグリッド1箇所を設定し一部拡張して、遺構及び遺物等の確認を行った。その結果、遺構として竪穴住居3棟、土坑5基、溝5条、柱穴多数が検出され、また遺物として弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器等が出土した。これらのことにより同遺跡は、弥生時代後期から中・近世の集落跡所在の可能性があることが確認された。

こうして、工事によって影響を受ける範囲について、四国電力株式会社の全面的協力によつて、平成元年7月14日から10月30日まで緊急発掘調査を実施した。



1:10,000

Fig. 2 通跡周辺地名図



1:10,000

Fig. 2 遺跡周辺地名図

第Ⅱ章 周辺の地理的、歴史的環境

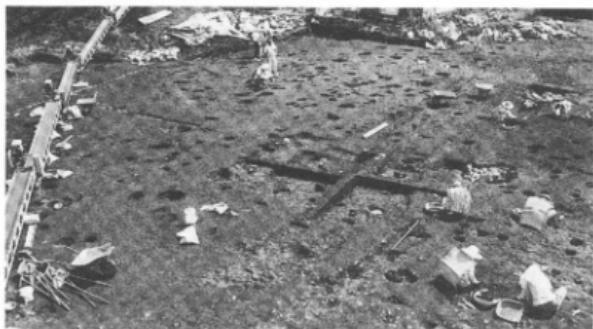
「ひびのきサウジ遺跡」は、県下三大河川の1つである全長70.5kmの物部川の西岸の河岸段丘上に位置し、北部は山、東部は急激に下降、西部は緩やかに下降する台地状を呈する。高知市から東へ約15kmの弥生土器が水汲みの途中で忘れ去られた「神の壺」で有名な龍河洞のある土佐山田町の市街地の東端部に所在する。土佐山田町は、東西に弧状の長い海岸線を有する高知県のはば中央部にあり、県下最大の平野である高知平野の東部に位置する。高知平野の中でも南国市・土佐山田町・野市町及びその周辺の平野部は、香美郡と長岡郡に属していたことから香長平野とも呼ばれており、本県最大の穀倉地帯を誇っている。

土佐山田町では、その上限を「飼古屋岩陰遺跡⁽²⁾」の遺物から縄文時代早期に求めることができる。弥生時代中期の「稻荷前遺跡⁽³⁾」「龍河洞遺跡⁽⁴⁾」、弥生時代後期には「林田遺跡⁽⁵⁾」、弥生時代後期の土器型式、ひびのきI式、同II式の標準遺跡である「ひびのき遺跡⁽⁶⁾」等が営まれるようになる。

古墳時代になると「ひびのき遺跡」をはじめとして、本遺跡の南側20mに隣接する県下で唯一現存する前方後円墳の「大塚古墳⁽⁷⁾」や北側約200mの山手にある小倉山古墳、鏡野学園古墳、「前行古墳群」などが所在し、又須恵部の里として知られる「須江遺跡群」等がみられるようになる。

律令体制下においては、土佐最古の寺院跡である比江庵寺跡の瓦を焼いた植タンガン窯跡、香美郡衙推定地である「大瀬遺跡」「須江遺跡群」に入る推定「駅跡」等が所在するようになり、要所となる。

室町時代には、本遺跡の東北側約300mに山田城跡が所在し、西側に西ノ市、東ノ市の小字が残る等、当地域における継続的な発展を示している。



A区の調査

第三章 調査の方法と調査区の概要

1. 調査の方法

凹状の調査区全域に遺構がみられるため全面発掘を実施したが、廃土置場確保のため便宜上 A区（第1次調査）とB区（第2次調査）とに分けて実施した。A区は「うばめ櫻」の植木床があり、深く根を降していたため、いわゆる包含層は擾乱を受けており、調査区の中央より北側等に第Ⅱ～Ⅲ層が部分的に残存するにすぎなかった。又B区は畑地であったが、遺物はあまり見られず包含層の様相を呈しておらず、わずかに残存する第Ⅲ層のみが包含層としてとらえることが出来る。遺構検出面は削平を受けており、竪穴住居の壁高は数センチを測るものが多く、中世以前の生活面は現地表とほぼ同じ程度の標高を有していたことが考えられる。

発掘調査の実施にあたっては、第Ⅲ層上面まで除去した後、遺構検出を行った。包含層の遺物取り上げや遺構検出は、地積測量図の境界点（10）X=43.081, Y=11.012を発掘調査基準点（X=100.000, Y=100.000）とし、磁北方向を基準線（0°—0'—0")とする任意座標で、4×4mを最小単位とするグリッドを設定して記録を取った。標高については、二等水準点（N 1889）G H = 49.736mを基準とした。

なお調査中は、雨の多い異状気象と好景気に伴う作業員不足に悩まされた。

2. 調査区の概要

今回の発掘調査によって検出された遺構は、竪穴住居10棟、掘立柱建物12棟、土坑38基（壺棺墓9基を含む）、溝24条、井戸1基、欄列1条、及び柱穴群である。出土遺物は、約7,000点で、弥生土器、土師器が大半を占めており須恵器等は少ない。遺物は包含層に少なく、遺構から多く検出された。遺構では、弥生時代の竪穴住居（S T 8）、平安時代の井戸（S E 1）からまとまって遺物が検出されている。また掘立柱建物（S B 1～3）、欄列（S A 1）は、時期は不明といわざるを得ないが、説明は平安時代の頃で行なった。

遺構は、発掘区の全域から検出されたが、標高のやや高い中程から北部に集中していた。当遺跡の地形は、北部及び東部から南部へ緩やかに下降傾斜する。

当遺跡の遺構・遺物は、弥生時代後期から中世にかけてのものが大半を占める。

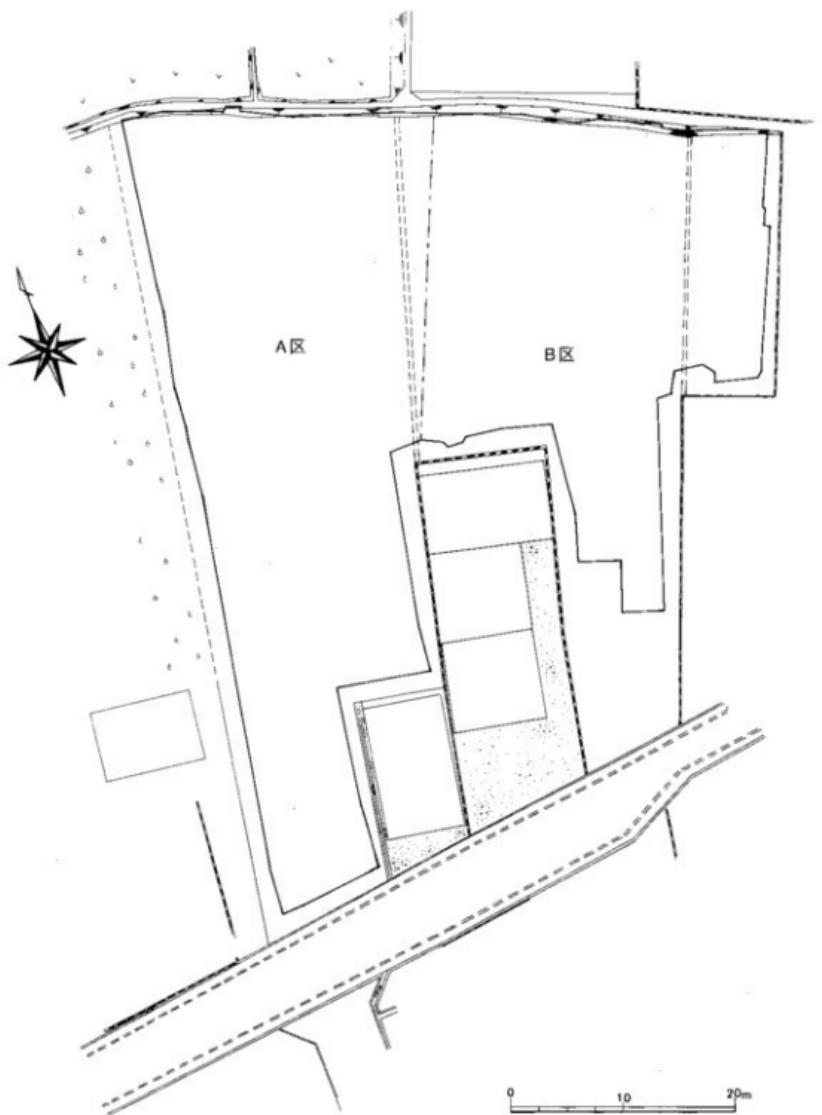


Fig. 3 発掘調査位置図

第Ⅳ章 基本層序と包含層出土の遺物

1. 基本層序 (Fig 5)

基本層序は、Ⅰ層：耕作土、Ⅱ層：暗茶灰色粘質土、Ⅱ'層：淡茶灰色粘質土、Ⅲ層：黒色土（黒ボク⁽⁵⁾）、Ⅳ層：暗黄茶色粘質土（地山）（1～15cmの疊混り）である。Ⅲ層とⅣ層との間には部分的に焼土の混る所がある。又、Ⅳ層地山は、調査区の中央部分に疊は少ないので、北部及び南部は3～20cm大の河原石が混り、弥生時代以前には氾濫原であったことを考えさせる。

Ⅲ層は、弥生時代から中世の遺物を含むが、北部には比較的残存し、他は部分的に残るのみである。又セクションではとらえられていないが、西南端部付近では部分的にⅢ層の下に黄茶色の火山灰である音地⁽⁹⁾が20～30cmの厚さで残る。Ⅳ層地山は東部から西部へ、北部から南部へ緩やかに下降傾斜する。

2. 包含層出土の遺物

遺物の大半はⅢ層で出土した。出土遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、縄釉陶器、黒色土器、瓦質土器、青磁等である。以下Ⅱ・Ⅲ層出土の遺物について述べる。

(1) Ⅱ層出土の遺物 (Fig 6-1～3)

1は縦釉陶器皿でありSB4とSK8との中間付近で出土した、貼付輪高台を有す。平底から内湾気味に立ちあがる。底部内面に凹線を施す。底部外面はヘラ切り後ナデ調整を施す。全面施釉。釉は黄緑色で緑色の斑点を認める。2は土師器碗である。平底から内湾気味に立ちあがる。3は土師器羽釜である。

(2) Ⅲ層出土の遺物 (Fig 6-4～32)

4～5は須恵器蓋である。4は内傾して直線的に立ちあがり稜をなして頂部に至る。口唇部は丸くおさめる。7～9は須恵器杯である。7は外反気味に立ちあがり端部は丸くおさめる。たちあがりは短く内傾して端部は丸くおさめる。10は土師器皿である。平底から僅かに段をもって直線的に立ちあがり口縁部に至る。11～14は土師器杯である。11はベタ高台気味の平底から斜上外方へ直線的に立ちあがる。12は平底から内湾気味に立ちあがり口縁部は僅かに外反する。底部外面は回転ヘラ切り。13はベタ高台気味の平底から内湾気味に立ちあがる。底部外面は回転糸切り。15は土師器皿である。中央が僅かに凹む底部から外反気味に立ちあがる。底部外面はヘラ切り。16～19は土師器皿である。内湾気味に立ちあがり口唇部は丸くおさめる。内外面共に指頭圧痕が顕著で手捏ねである。20は須恵器高杯脚である。脚部に長方形の透かしが穿たれる。21は弥生土器鉢である。僅かに突出気味の平底から内湾して立ちあがる。22～25は弥生土器甕である。22は平底から直線的に立ちあがる。副部外面下半は縦方向のハケ調整を施す。23は平底から内湾気味に立ちあがる。24の口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部は下方に肥厚して口唇部は

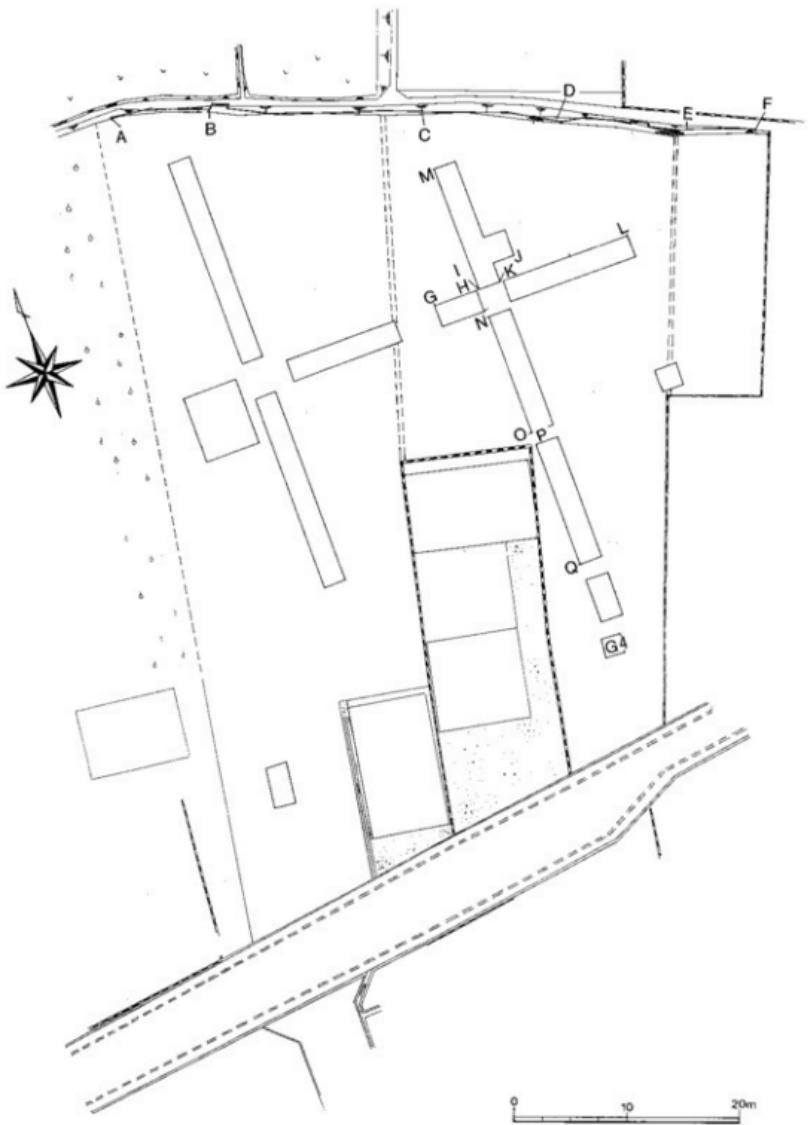


Fig. 4 トレンチ・グリッド・セクション位置図

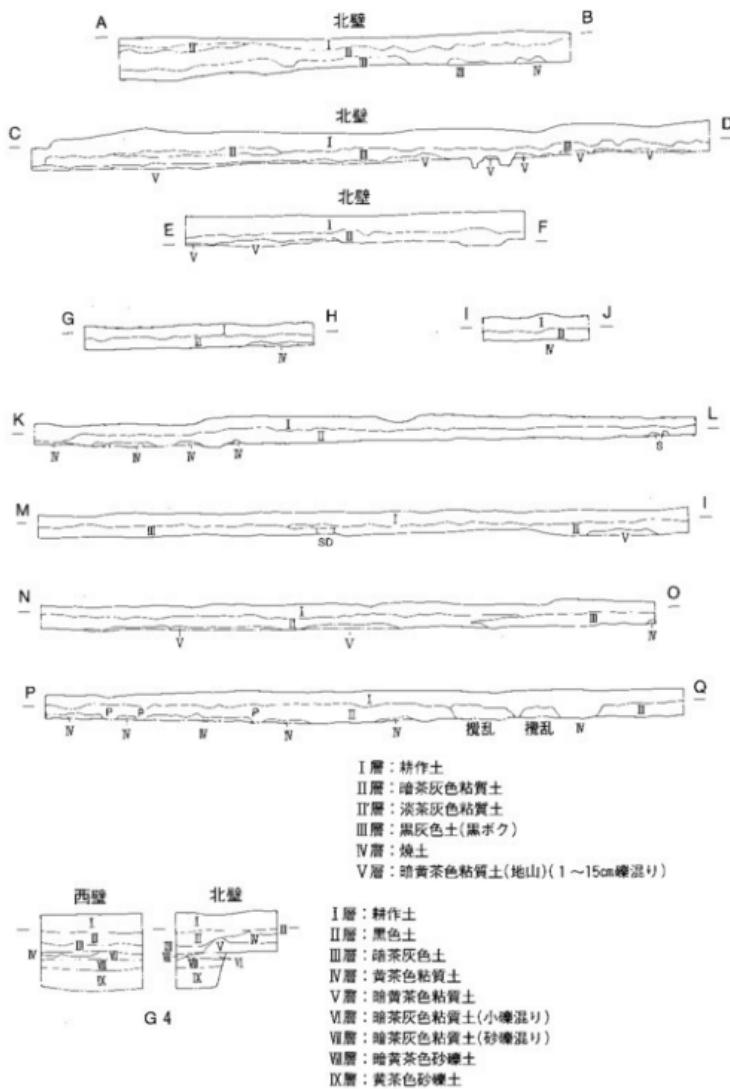


Fig 5 基本層序

丸くおさめる。25は内湾して立ちあがり屈曲して口縁部に至る。口縁部は外反して、口唇部は面をなす。胴部外面は横方向及び右下りの叩き調整を施す。26は土師器甌である。27は土師器甌である。単孔の甌である。外反気味に立ちあがり、その後内湾気味になり貼付把手に至る。貼付把手は欠損。28・29は平瓦である。凹面は細い布目、29の凸面は縄目の叩きを施す。30は弥生土器器台である。僅かに外反気味に垂直に立ちあがる。内面絞り目を認める。31は近世陶磁器下ろし皿である。32・33は円筒形の土錐である。なお33は表採である。



水没した調査区



雨の日の作業風景

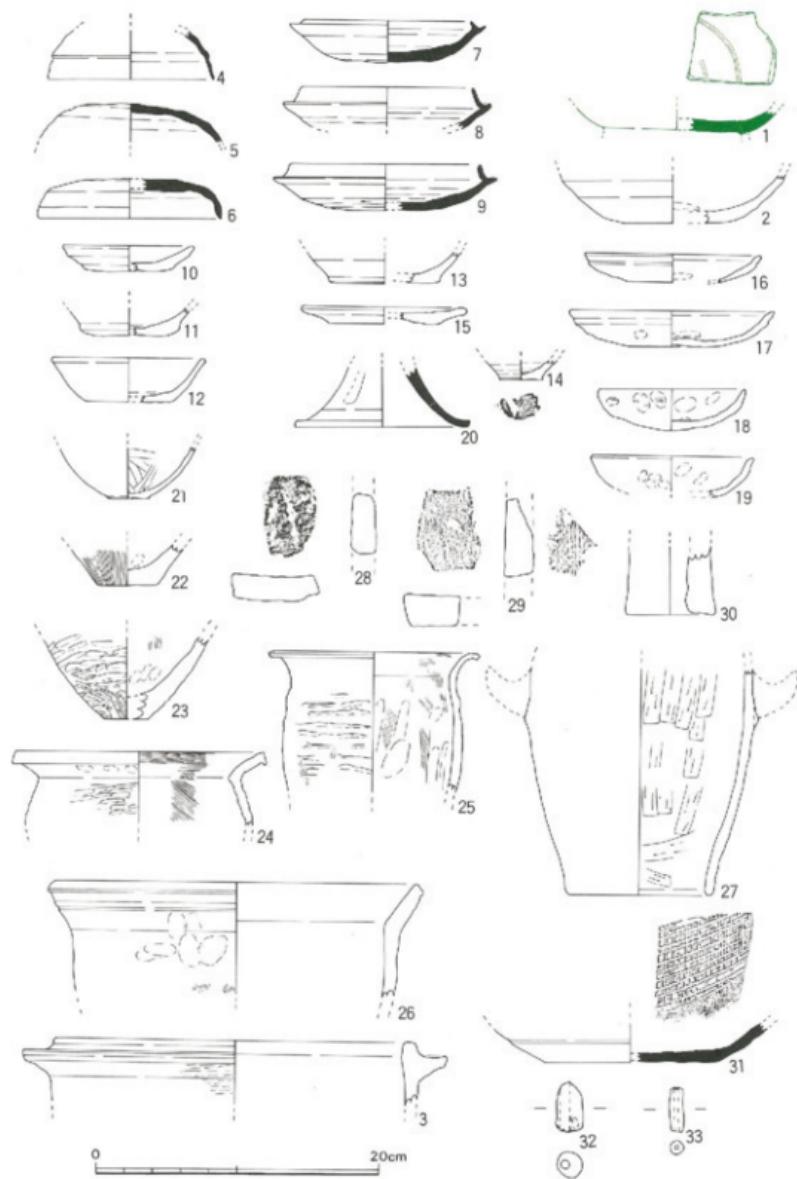


Fig. 6 包含層出土遺物(Ⅱ層1~3, Ⅲ層4~32, 表採33)

第V章 遺構と遺物

1. 弥生時代

弥生時代の遺構として竪穴住居5棟、土坑12基、溝6条、柱穴多数を検出した。遺構の組合せやその変遷等については、次章に譲る。

竪穴住居

S T 1 (Fig 7)

調査区の西南端部に位置し、西部は調査区外に出ている。平面プランは隅丸方形を呈し、ベッド状遺構を伴う。長径4.6m、短径3.0mまで確認できる。検出面からの深さ10.0~13.0cm、面積は13.8m²まで測れる。長軸方向は不明である。南側・東側にベッド状遺構を設けているが、全周するものと考えられる。ベッド状遺構は地山成形で、幅0.81~0.98m、検出面からの深さ4.0~6.0cmを測る。埋土はI~V層である。I層：黒色土（黒ボク）、II層：淡灰色粘質土（黒ボク混り）、III層：黄茶色粘質土、IV層：黄茶色砂礫土、V層：暗灰黑色土である。柱構造については不明である。P 3は中央ピットと考えられ径0.82m、深さ15.5cmを測る。他の柱穴は径18.5~48.0cm、検出面からの深さ8.1~25.3cmを測る。S D 4、S D 12、S D 13及び柱穴に切られる。

出土遺物 (Fig 21~34~47)

鉢（35~38）は埋土から出土した。35は丸底気味の底部から内湾して立ちあがり、36は平底から内湾して立ちあがる。37は内湾気味に立ちあがり、口縁部は薄くなり口唇部は面をなす。体部外面は指頭による強い横方向のナデ調整を施し、内面は縦方向のハケ調整を施す。38は平底から内湾して立ちあがり口縁縫部は上方に僅かに肥厚し、口唇部は丸くおさめる。鉢（34）はP 3から出土した。平底から内湾して立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。体部外面は右下りの叩き調整の後ナデ調整を施す。壺（39）は埋土から出土した。壺（40）は床面から出土した。口縁部は「く」の字状に屈曲して外反し、端部は下方に僅かに肥厚し口唇部は丸くおさめる。壺（41~46）は埋土から出土した。41・42・46の口縁部は「く」の字状に屈曲して外反し、口唇部は面をなす。47は砥石で、埋土から出土した。片面のみを使用する。

S T 3 (Fig 8)

調査区の西部に位置する。平面プランは隅丸方形を呈し、ベッド状遺構を伴う。長径5.74m、短径5.1m、検出面からの深さ18.0~29.0cm、面積は約29.27m²を測り、長軸方向はN~90.0°~Eとなっている。床面は平坦面をなし、P 1~P 14の14個の柱穴を検出したが、P 1~P 4を主柱穴とする4本柱構造が推測される。主柱穴の直径は25.0~50.0cm、深さ23.0~36.0cm、柱間距離は2.54~2.58mを測る。ベッド状遺構は四辺を全周し、地山成形であるが、東南端部で緩やかな傾斜で床面に下ることから出入口の可能性を有する。ベッド状遺構の幅は北側がやや狭いが0.66~1.10m、検出面からの深さは2.0~12.0cmを測る。中央ピットの平面プランは

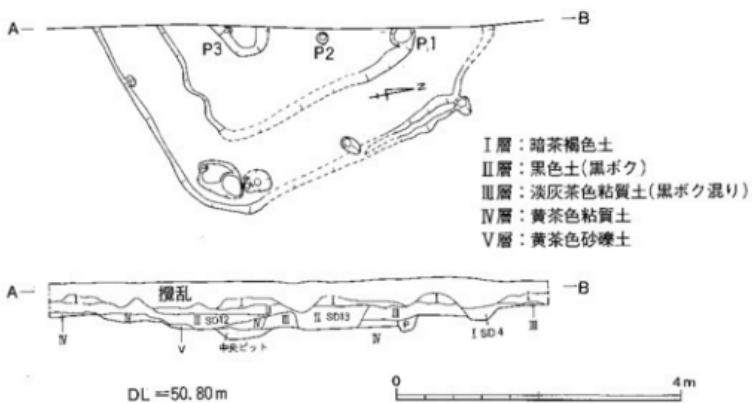
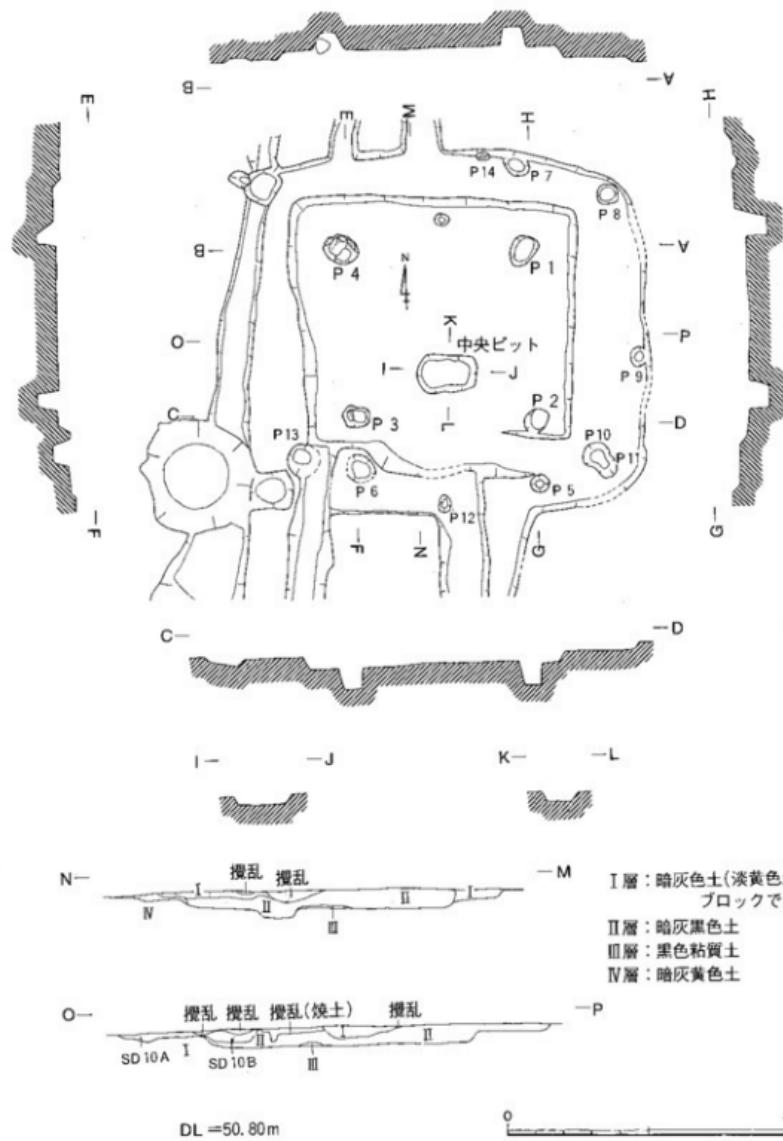


Fig. 7 ST 1 実測図

隅丸長方形を呈し、長径0.84m、短径0.49m、深さは12.0~14.0cmを測る。埋土はI~IV層である。I層：暗灰色粘質土（淡黄色土がブロックで入る）、II層：暗灰黑色土、III層：黒色粘質土、IV層：暗灰黄色土である。SA1, SE1, SD10-A, SD10-B, SD11及び柱穴に切られる。

出土遺物 (Fig. 22~48~63)

48~57は鉢である。49・53・54・57は東側のベッド状造構の床直上から、52は床面から出土した。49は平底から内湾して立ちあがり、口唇部は面をなす。体部外面は不定方向のナデ調整、内面は横方向のハケ調整を施すが部分的に不定方向のナデ調整を施す。51は突出気味の平底から内湾して立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。体部外面は横方向の叩き調整の後ナデ調整を施す。52は丸底気味の底部から僅かに内湾気味に立ちあがり、口唇部は面をなす。体部外面は左下りの叩き調整の後不定方向のナデ調整を施す。体部内面は上半は不定方向のハケ調整、下半は不定方向のナデ調整を施す。54は平底気味の底部から内湾して立ちあがり、口唇部は面をなす。体部外面はナデ調整を施し、多数の指頭圧痕を認める。体部内面は不定方向のハケ調整を施す。56は平底気味の底部から内湾して立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。体部内面上端は右下りのハケ調整を施すが他は内・外面共に丁寧なナデ調整を施す。58~60は壺である。59・60の口縁部は「く」の字状に屈曲して外半し、口唇部は面をなす。59の口縁部内面は不定方向のハケ調整、外面はナデ調整を施す。胴部外面は横方向の叩き調整を施す。60は叩き出し口縁である。外面は右下りの叩き調整を施す。61は碧石製の管玉である。埋土から出土した。62は鉄族で全長5.3cm、全幅1.8cm、全厚0.2cm、重量5.0gを測り、床面から出土した。63の鉢は



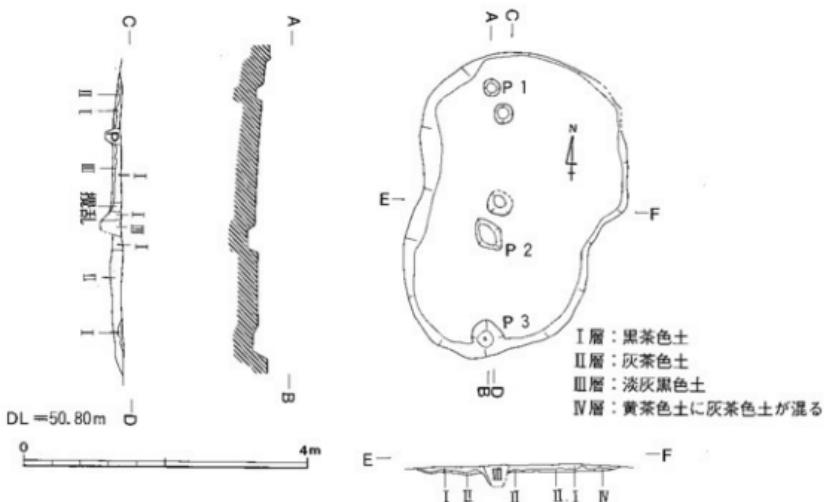


Fig 9 ST 6 実測図

中央ピットから出土した。内湾して立ちあがり、口縁端部は外側及び上に僅かに肥厚して口縁部は面をなす。

S T 6 (Fig 9)

調査区の西端部で S T 4 の南側に位置する。平面プランは瓢箪形を呈す。長径4.5m、短径2.5m、検出面からの深さ12.0~18.0cm、面積は約11.25m²を測る。長軸方向はN-13.9°-Eを示す。床面はほぼ平坦面をなす。P 1 ~ P 3 を主柱穴とする3本柱構造と推測される。主柱穴の径は24.0~54.0cm、深さ8.0~14.0cm、柱間距離は1.5~2.0mを測る。住居址としては規模が小さい、また床面の砥石(75)等から作業小屋的利用が考えられる。埋土は黒色土単純一層である。

出土遺物 (Fig 22-64~68・Fig 23-69~75)

73~74の支脚以外はすべて床面から出土した。64~68は鉢である。65は平底気味の底部から内湾して立ちあがり、口唇部は僅かに凹んで面をなす。体部外面は横及び左下りの叩き調整の後ナデ調整を施す。口縁部内面は横方向のハケ調整を施すが他は横方向のナデ調整を施す。66は突出した平底から内湾気味に立ちあがり、口縁端部は僅かに上方に肥厚して口唇部は外傾して面をなす。体部外面は横方向及び右下りの叩き調整の後ナデ調整を施す。67はP 1 の検出面で出土した完形品である。丸底から内湾して立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。体部外面は

左下りの叩き調整の後不定方向のナデ調整を施す。68は丸底気味の底部から外反気味に立ちあがり口唇部は丸くおさめる。体部外面は不定方向の叩き調整の後ナデ調整を施す。69~71は壺である。口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。70は口縁端部でさらに僅かに外反する。72は壺である。内湾して立ちあがり口縁部は屈曲して大きく立ちあがる。73・74は土製支脚であるが同一個体のものと考えられる。75は砥石である。四面共表面は滑らかであり、使用によって凹む。

S T 8 (Fig 10)

調査区の東北端部に位置する。平面プランは隅丸長方形を呈し、ベッド状遺構を伴う。長径5.32m、短径3.2m、検出面からの深さ42.0~52.0cm、面積は約17.02m²を測る。長軸方向はN-82.8°-Eを示す。床は平坦面をなしP 1~P 21の21個の柱穴を検出したが、P 1~P 5を主柱穴とする5本柱構造が推測される。主柱穴の径は35.0~47.0cm、深さ8.0~23.0cm、柱間距離は1.05~3.17mを測る。P 6は貯蔵穴と考えられ、長径50.6cm、短径50.0cm、深さ18.3cmを測る。またP 2は建替えが考えられるベッド状遺構は東壁側と西壁側の半分に造り出している。ベッドは地山成形で、ベッドの幅は1.25~1.35m、検出面からの深さ11.0~17.0cmを測る。ベッド内側及び南・北の壁の側に周溝が全周する。中央部に中央ピットを設けており若干の炭化物を検出した。長径1.53m、短径0.56m、深さ6.0~10.0cmを測り、断面逆台形を呈す。

埋土はI~II層である。I層：淡灰黒色粘質土（砂混り）……S D 17である。II層：黒色土（1.0~1.5cmの疊混り）である。なおS D 17に切られる。

出土遺物 (Fig 24-76~94・Fig 25-95~106・Fig 26-107~111・Fig 27-112~115・Fig 28-116~124・Fig 29-125~129・Fig 30-130~135・Fig 31-136~148)

遺物が集中廃棄されており、良好な一括資料としてとらえることができる。76~94は鉢である。76は平底から内湾して立ちあがり口縁部は外反する。口唇部は面をなす。口縁部外面は縱方向、内面は右下りのハケ調整を施す。体部外面は右下りの叩き調整の後縱方向のハケ調整を施す。体部内面は上半右下りのハケ調整、下半は指頭による不定方向のナデ調整を施す。77・79・81・90・92・93は突出気味の平底から内湾又は内湾気味に立ちあがる。90の体部外面は左下りの叩き調整の後、口縁端部外面は縱方向のハケ調整の後丁寧なナデ調整を施す。体部内面は不定方向のハケ調整を施す。底部外面は指頭による軽い押圧を施し、7つの突起状を形成する。78・80・83・85・87・89・94は平底から内湾して立ちあがる。83の体部外面は右下りの簡単なヘラ磨き、内面は指頭によるナデ調整を施す。87の体部外面は左下りの叩きの後ナデ調整を施し、体部内面は不定方向のハケ調整を施す。94の口縁部は僅かに肥厚して、口唇部は外傾して面をなす。体部外面不定方向のハケ調整の後上端は横方向、それ以外は不定方向のヘラ磨きを施す。体部内面は右下りのハケ調整の後不定方向のヘラ磨きを施す。84・86は平底から斜上外方に直線的に立ちあがる。84の体部外面は縱方向のハケ→ナデ→ヘラ磨きの順で仕上げる。体部内面は不定方向のハケ調整の後ナデ調整を施す。86の口縁部は僅かに内湾して、口唇部は

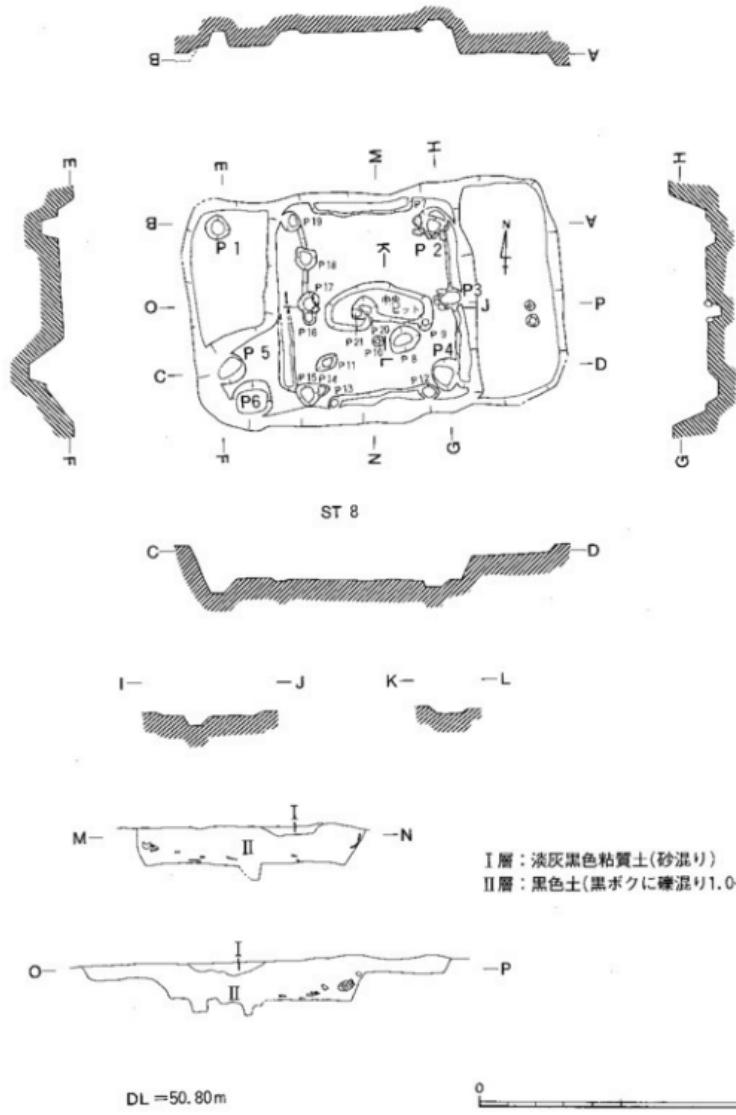


Fig 10 ST 8 実測図

内傾して面をなす。体部外面は叩き調整の後丁寧なナデ調整を施し、部分的にハケ調整を施す。体部内面は不定方向のハケ調整を施す。底部内面に稜状痕を認める。82・88・91は丸底から内湾して立ちあがる。95～97は高杯である。95の杯部は内湾気味に立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。脚部は「ハ」の字状に開き、4孔を穿つ。杯部の内・外表面及び脚部の外面は丁寧なヘラ磨きを施す。96の全表面及び脚部内面は不定方向のハケ調整、杯部内面は右下りのハケ調整の後横ナデ調整を施す。97は脚部に7孔を穿つと思われる。98は蓋である。外面は縦方向のハケ調整の後上半は縦方向のヘラ磨き、下半は横方向のヘラ磨きを施す。頂部は未調整である。99は甌である。内湾して立ちあがり、口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は外傾して面をなす。底部は焼成後1孔を穿つ。口唇部及び口縁端部外面はナデ調整を施す。それ以外の外面は右下りのハケ調整を施す。100・101・103～114は壺である。100は器高11.3cmの小さな壺である。104は二重口縁である。107の口縁部はラッパ状に大きく外反し、端部は下方に僅かに肥厚して口唇部は面をなす。108は球状の胴部から頸部は直立気味に立ちあがり、口縁部はラッパ状に大きく外反し、口唇部は面をなす。胴部外面は縦方向及び右下りのハケ調整の後、不定方向のナデ調整を施す。さらに胴部外面上端に放射状の暗的なヘラ磨きを施す。110は平底気味の底部を有する。口縁部はラッパ状に外反して端部は上・下に肥厚する。口唇部は面をなす。口唇部及び口縁部外面はナデ、内面は横方向の丁寧なハケ調整を施す。頸部は内・外表面共右下りのハケ調整を施す。胴部外面は縦及び右下りのハケ調整を施す。胴部内面は荒いハケ原体によるハケ調整の後指頭によるナデ調整を施す。112～114は平底から内湾して立ちあがり、口縁部は屈曲して外反する。口縁端部は上・下に僅かに肥厚して口唇部は面をなす。102・115～143は壺である。115は搬入土器である。平底から内湾して立ちがあり、口縁部は強く屈曲して外反する。口縁端部は僅かに上・下に肥厚する。口唇部は僅かに凹んで面をなす。口縁部は内・外表面共強い横方向のナデ調整を施す。下胴部外面は縦及び左下りの丁寧なヘラ磨き、それより上は縦方向ハケ調整を施すが、一部に下地の叩き調整を認める。下胴部内面は縦方向のヘラ削り、中位は右下り及び横方向のヘラ削り、上位は指頭によるナデ調整を施す。116～120・122は器高が20cm未満、121・123～129・131は20cm以上30cm未満の器高を有し、133・134は30cm以上の器高を有す。116・119～121・123・124・129・130は叩き出しが口縁である。144は土錘、145は鉄錘である。146は叩石、147・148は砥石である。

S T 9 (Fig 11)

調査区の東端部に位置する。南側は削平を受けており検出できなかったが平面プランは円形を呈すと考えられる。長径6.3m、短径5.32m、検出面からの深さ4.0～24.0cm、面積は約26.0m²を測る。床はほぼ平坦面をなす。P 2～P 7を主柱穴とする6本柱構造と推測される。P 2・P 4・P 7は柱穴の切り合い及び近接した柱穴を有することから建替えが考えられる。主柱穴の径17.0～52.0cm、深さ6.0～28.0cm、柱間距離1.70～2.18mを測る。埋土はⅠ～Ⅲ層である。Ⅰ層：暗灰黒色土、Ⅱ層：黄茶色粘質土（黒ボク混り）、Ⅲ層：黒色土（黒ボク）である。

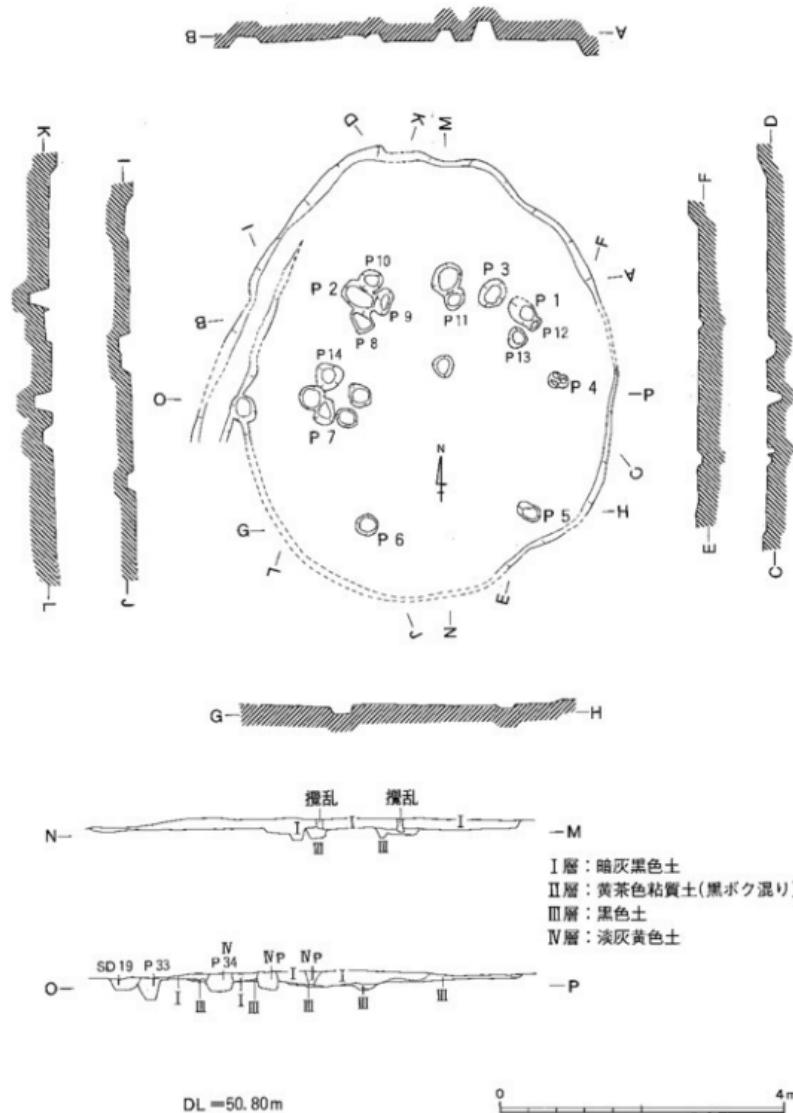


Fig 11 ST 9 実測図

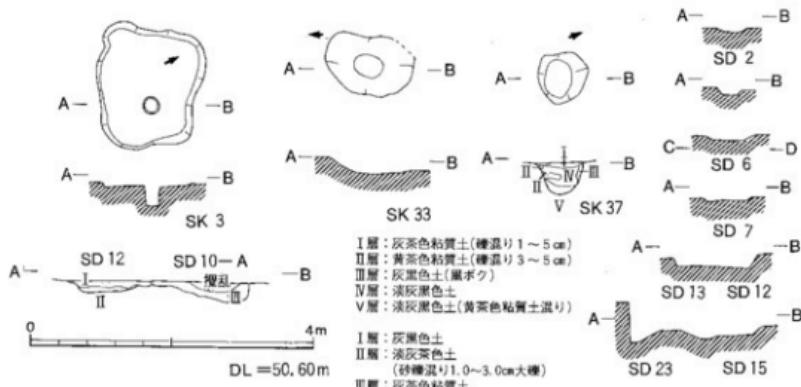


Fig 12 SK 3, 33, 37, SD 2, 6, 7, 10 A, 12, 13, 15, 23実測図

なおSK 33, SD 19及び多数の柱穴に切られる。又SB 9, SB 11と重複関係にあるが出土遺物からSB 9, SB 11がより新しいことが判明している。

出土遺物 (Fig 32-149-155)

壺 (149) は平底から外反して立ちあがる。堀 (150) と鉢 (155) は共にP 1から出土した。150は平底から斜上外方へ直線的に立ちあがる。外面は不定方向の叩き調整の後、縦方向のハケ調整を施す。甕 (151・152) は床面から出土した。151は平底から段をなして内湾気味に立ちあがる。胴部外面は右下りの荒い叩き調整の後、下端はナデ調整を施す。152の口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は丸くおさめる。153は鉢である。内湾して立ちあがり口唇部は面をなす。154は高杯である。杯部は内湾して立ちあがり、脚部は「ハ」の字状に大きく開く。杯部及び脚部外面はヘラ磨きを施す。

土 坑

SK 8・12・19~24・32は壺棺墓であり、次項で述べる。

SK 3 (Fig 12)

調査区の西部で、SK 4の南側に位置する。平面プランは南東部が僅かに突出した隅丸方形を呈す。長径1.72m、短径1.30mを測る。長軸方向はN-59.0°-Wとなっている。検出面からの深さ3.0~6.0cmを測り床面は南壁側が高く、北壁側が低い。壁は急傾斜で立ち上がる。ほぼ中央に直径20.0cm、深さ27.0cmを測る柱穴があり、SK 3に伴うと考えられる。埋土は暗灰黑色土単純一層である。

出土遺物 (Fig 32-156)

鉢 (156) は床面から出土した。平底から僅かに内湾して立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。体部外面はナデ調整を施し、口縁部は揃んで押圧して調整する。

S K 33 (Fig 12)

調査区の東端部に位置する。平面プランは橢円形を呈す。長径0.62m, 短径0.21mを測る。長軸方向はN-16.8°-Eとなっている。検出面からの深さ10.0cmを測り、断面形は船底状を呈す。埋土は黒色土単純一層である。なおS T 9を切る。

出土遺物 (Fig 32-157)

鉢 (157) のみが、完形に近い状態で出土した。僅かに残る平底気味の底部から内湾して立ちあがり口縁部に至る。口唇部は面をなす。体部外面は叩きの後ナデ調整を施す。

S K 37 (Fig 12)

中央よりやや西方北端部に位置する。平面プランは不整形を呈す。長径0.72m, 短径0.66mを測る。長軸方向はN-5.5°-Eとなっている。検出面からの深さ45.0cmを測る。断面形はU字形を呈す。埋土はI-V層である。I層：灰茶色粘質土（1~5cmの砂混り）、II層：黄茶色粘質土（3~5cmの砂混り）、III層：灰黑色土（黒ボク混り）、IV層：淡灰黑色土（黒ボク混り）、V層：淡灰黑色土に黄茶色粘質土混りである。出土遺物は弥生土器片が多く出土したが、いずれも細片で図示できるものはない。

溝

S D 2 (Fig 12)

調査区の西南端部に位置する。N-67.5°-Wで東西に2.57m延び、西は調査区外に出る。幅0.3~0.45m, 検出面からの深さ10.1cmを測る。床面の東端の標高は50.327m, 西端の標高は50.364mを測る。埋土は黒色土単純一層である。弥生時代の柱穴及びS K 2に切られる。出土遺物は弥生土器の細片が出土したが図示できるものはない。

S D 6 (Fig 12)

調査区の西南部に位置する。東から0.45m N-83.0°-Wで北西に延び、わずかに西に曲って1.5m延びる。幅0.26~0.57m, 検出面からの深さは7.0~9.0cmを測る。床面の東端の標高は50.369m, 西端の標高は50.40mを測る。埋土は灰黑色土単純一層である。なお、S D 10-Aに切られる。出土遺物は埋土中より弥生土器の細片が少量出土したが図示できるものはない。

S D 7 (Fig 12)

調査区の西南部に位置する。N-16.5°-Eで南北に3.45m延びる。幅0.60~0.90m, 検出面からの深さは3.0~7.0cmを測る。床面の北端の標高は50.244m, 南端の標高は50.384mを測る。断面形は中央部が僅かに高い逆台形を呈す。埋土は黒色土単純一層である。なお、S D 5に切られる。出土遺物は弥生土器細片が1点のみ出土しているが図示できるものではない。

S D 12 (Fig 12)

調査区の南西部に位置する。N-41.3°-Eで南北方向に11.15m延びた所で西にやや曲ってN-69.0°-Eの方向で4.0m延びる。西側は調査区外に出る。幅0.89~1.15m, 検出面からの深さは20.0cm, 床面の北端の標高は50.386m, 西南端の標高は50.261mを測る。埋土はI~II

層である。I層：淡灰色粘質土（黒ボク混り）II層：黄茶色砂礫土（1～3cmの砂礫を含む）である。SD 9・SD 10-A・SD 13に切られ、ST 1を切る。

出土遺物（Fig 32-158～160）

壺二重口縁（158）と甕（159）はI層から出土した。甕（160）はII層から出土した。二重口縁（158）は外反して立ちあがり稜をもって屈曲し内湾気味に立ちあがる。口唇部は外傾して面をなす。159の甕の口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は面をなす。胸部上端外面は右下りのハケ調整、内面ナデ調整を施す。口縁部外面はナデ調整、内面は右下りのハケ調整を施す。160は平底から外反して立ちあがる。摩耗が著しく観察不可能である。II層出土遺物はすべて摩耗している。

SD 15（Fig 12）

調査区の西北端部に位置し、N-81.5°-Wで東西方向に3.35m延びる。西側は調査区外に出るため断定はできないが東壁の緩やかな立ちあがり具合などから溝の端部であろうと考えられる。断面形は南が一段高い段状を呈す。幅11.4cm検出面からの深さは11.0～17.0cm、床面の東端の標高は50.317m、西端の標高は50.40mを測る。埋土は灰黒色土単純一層である。出土遺物は弥生土器細片が出土しているが図示できない。

SD 23（Fig 12）

調査区の西北端部に位置する。大部分は調査区外に出るため断定は出来ないが溝の端部であろうと考えられる。全長3.36mまで、幅0.20～0.53mまで、検出面からの深さは17.0cmまで確認できる。埋土は黒色土単純一層で埋土中より遺物はなかった。なお、古代の柱穴に切られる。

柱穴

P 213（Fig 63）

調査区の西端部、ST 6の南西側に位置する。平面プランは椭円形を呈す。直径60.0cm、短径45.0cm、検出面からの深さは20.3cmを測る。埋土は黒色土単純一層である。

出土遺物（Fig 32-161）

鉢（161）は丸底から内湾して立ちあがり、口唇部は僅かに凹んで面をなす。口縁端部は摘んでナデ調整を施す。

P 832（Fig 63）

調査区の西北端部、SK 8の東側に位置する。平面プランは円形を呈す。直径38.0cm、検出面からの深さは22.1cmを測る。埋土は黒色土単純一層である。

出土遺物（Fig 32-162）

甕（162）の口縁部は胸部上端から大きく外反する。口唇部は丸くおさめる。

P 1021（Fig 63）

調査区の中央北部、SK 17の東側に位置する。平面プランは椭円形を呈す。直径30.0cm、検出面からの深さは15.1cmを測る。埋土は黒色土単純一層である。

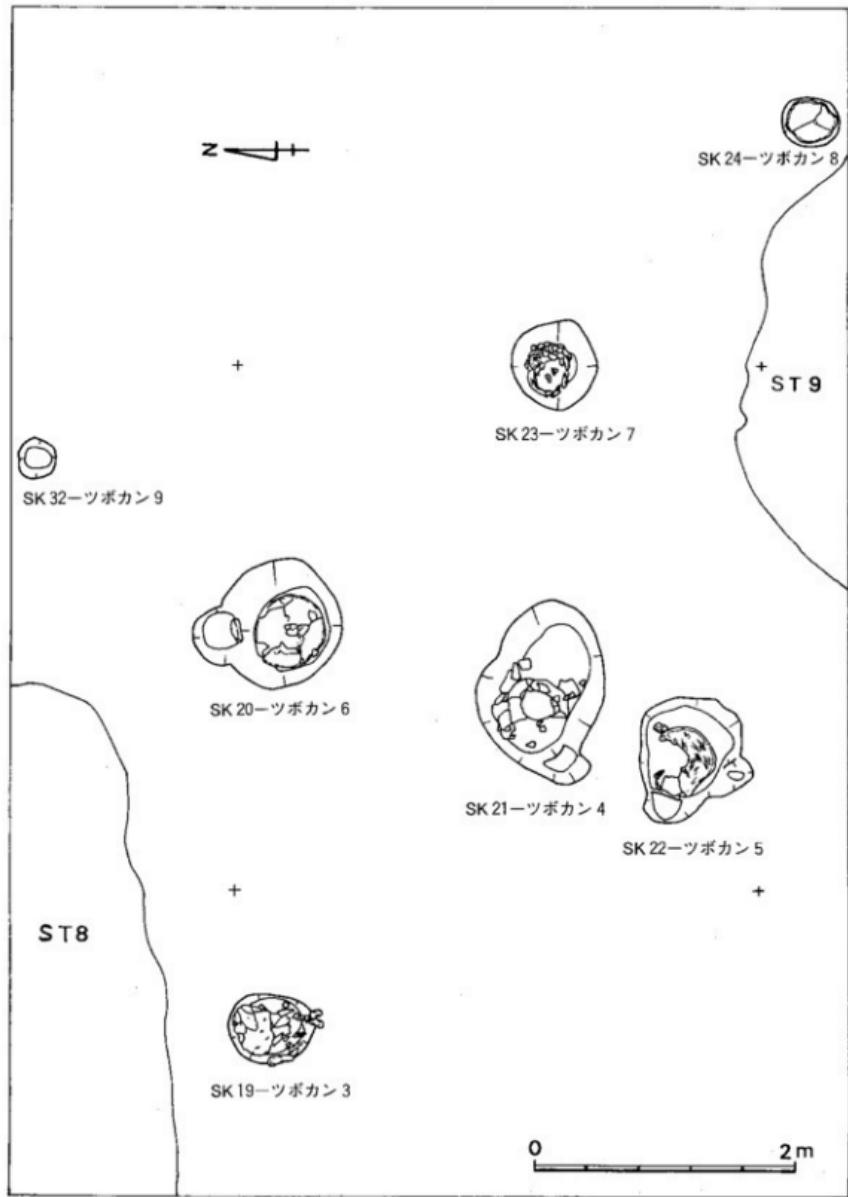


Fig 13 壺棺墓群位置図

出土遺物 (Fig 32-163)

甕 (163) は平底から内湾気味に立ちあがる。胴部外面は縱方向のハケ調整を施す。

P 1166 (Fig 63)

調査区の東北端部、SK 22の南東側に位置する。平面プランは円形を呈す。直径55.0cm、検出面からの深さは26.1cmを測る。埋土は黒色土單純一層である。

出土遺物 (Fig 32-164)

甕 (164) の口縁部は胴部上端部から斜上外方に外反し、端部は下方に僅かに肥厚する。

P 1500 (Fig 63)

調査区の東端部に位置する。平面プランは梢円形を呈す。直径28.0cm、検出面からの深さは22.0cmを測る。埋土は黒色土單純一層である。

出土遺物 (Fig 32-165)

鉢 (165) は完形で出土した。突出気味の僅かに残る底部から内湾気味に立ちあがり、口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。体部外面は縱方向のハケ調整の後ナデ調整を施す。

壺棺墓

壺棺墓は、9基検出したがSK 8 (壺棺墓1)、SK 12 (壺棺墓2) は調査区の中央部より西側で検出した。SK 19 (壺棺墓3)、SK 20 (壺棺墓6)、SK 21 (壺棺墓4)、SK 22 (壺棺墓5)、SK 23 (壺棺墓7)、SK 24 (壺棺墓8)、SK 32 (壺棺墓9) は、調査区の東北部でいずれも検出し、壺棺墓群といえよう。壺棺墓の埋土はすべて黒色土單純一層である。

SK 8 - 壺棺墓1 (Fig 14)

調査区の西部北端に位置する。壺棺は複棺(覆口式)であるが削平を受けており残存状況は不良であった。墓壙の平面プランは梢円形を呈し、長径1.1m、短径0.81mを測る。長軸方向はN-84.0°-Eとなっている。検出面からの深さは20.0-31.5cmを測る。墓壙の立ち上がりは東は緩やかに、西は急傾斜で立ちあがる。床面は東から西へやや下る。埋置方位は、ほぼ東向きで掘置角度は67.0°傾斜をもっている。なお、SD 16に切られる。

壺棺 (Fig 14-166・167)

166は下壺である。底部外面中央が凹む平底から大きく内湾して立ちあがる。胴部外面叩きの後右下りのハケ調整を全面に施す。胴部内面は右下りのハケ調整を全面に施す。167は166の上壺と考えられる。平底から斜上外方に直線的に立ちあがり、胴下端で内湾して立ちあがる。胴部外面は叩き→ハケ→ヘラ磨きの順で仕上げる。底部外面ナデ調整を施す。内面は指頭による不定方向の強いナデ調整を施す。

SK 12 - 壺棺墓2 (Fig 15)

調査区の中央よりやや西の北端付近に位置する。壺棺は削平を受けており残存状況は不良であった。墓壙の平面プランは梢円形を呈し、長径0.93m、短径0.82mを測る。長軸方向はN-

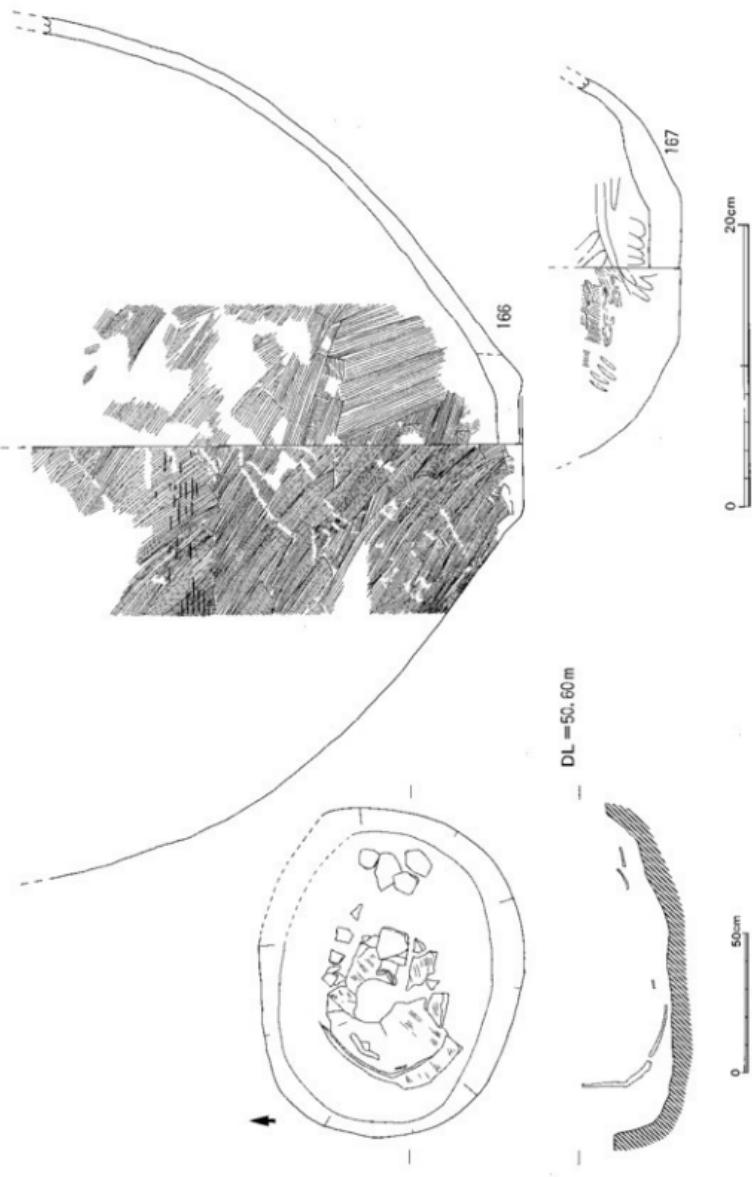


Fig 14 SK 8 (壺棺墓 1)実測図と出土遺物(166・167)

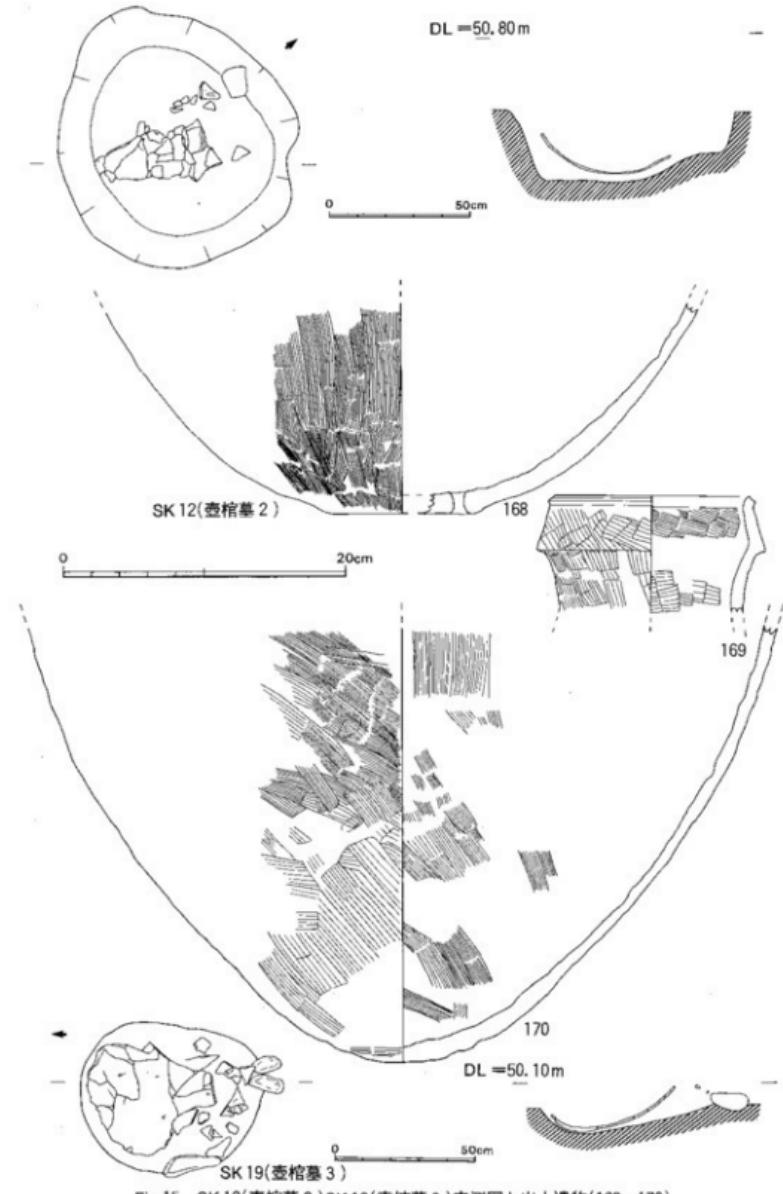


Fig 15 SK 12(壺棺墓 2)SK 19(壺棺墓 3)実測図と出土遺物(168~170)

90.0°—E となっている。検出面からの深さは14.5~24.5cmを測る。墓壙の立ち上がりは急傾斜で、床面は北が高く低い段状を呈す。埋置方位は北向きの可能性がある。据置角度は不明である。

壺棺 (Fig 15-168)

168は平底から内湾して立ちあがる。底部は1孔を焼成後穿つ。胴部外面は丁寧な縦方向のハケ調整を施す。胴部内面は摩耗が著しく観察不可能である。

S K 19—壺棺墓 3 (Fig 15)

調査区の東北部でS T 8の南側に位置する。壺棺は削平を受けており残存状況は不良であった。墓壙の平面プランは梢円形を呈し、長径0.65m、短径0.53mを測る。長軸方向はN-2.5°—W となっている。検出面からの深さは9.0cmを測り、断面形は北側がやや下がった凸レンズ状呈す。埋置方位は、ほぼ南向きで据置角度は31.50°傾斜をもっている。なお、柱穴に切られる。壺口縁 (169) が出土したが壺棺に伴うかどうかは不明である。

壺棺 (Fig 15-170)

170は僅かに残る平底気味の底部から内湾して立ちあがる。胴部外面は叩き→ハケ調整の順で仕上げていき、胴部下端外面はさらにナデ調整を加えて仕上げる。胴部下端と底部の境外面に叩き目が歪んで残る。内面は摩耗しているが、ハケ調整を施す。169は壺口縁で、二重口縁である。外反して立ちあがり稜をもって内傾し、口縁端部は外反する。口唇部は外傾して面をなし僅かに凹む。口縁端部は横方向のナデ調整、他は荒いハケ原体によるハケ調整を施す。内面右下りのハケ調整、稜の内面は横方向のナデ調整を施す。169はS K 32 (壺棺墓 9) 出土のものと接合できた。

S K 20—壺棺墓 6 (Fig 19)

調査区の東北部でS K 21—壺棺墓 4 の北側に位置する。壺棺は複棺 (覆口式) であり削平のため程度の残存状態で残存状況は不良である。下壺の中に上壺片が埋土と共に入っていた。墓壙の平面プランは梢円形を呈し、長径0.92m、短径0.79mを測る。長軸方向はN-72.5°—W となっている。検出面からの深さ30.0cmを測る。墓壙の断面形は柱穴に切られているがU字状を呈すと考えられる。埋置方向はほぼ垂直で据置方向は4°傾斜をもっている。なお、壺棺の埋土の中から鉢が出土しているが伴うものかどうかは不明である。

壺棺 (Fig 19-175・176)

176は下壺である。底部外面中央が僅かに凹む平底から直線的に斜上外方に立ちあがり胴部中位よりやや下で内湾して立ちあがる。胴部中位よりやや下に最大径を有す。胴部外面中位より上半は右下りのハケ調整の後縦方向の荒いヘラ磨きを施し、下半は不定方向のハケ調整を施す。胴部内面中位より上半は指頭による強い横方向のナデ調整、他はハケ調整の後ナデ調整を施す。175は176の上壺と考えられ176の埋土から出土した。平底から斜上外方に内湾気味に立ちあがる。外面はハケ調整の後丁寧なヘラ磨きを施す。内面は摩耗が著しく観察不可能である。

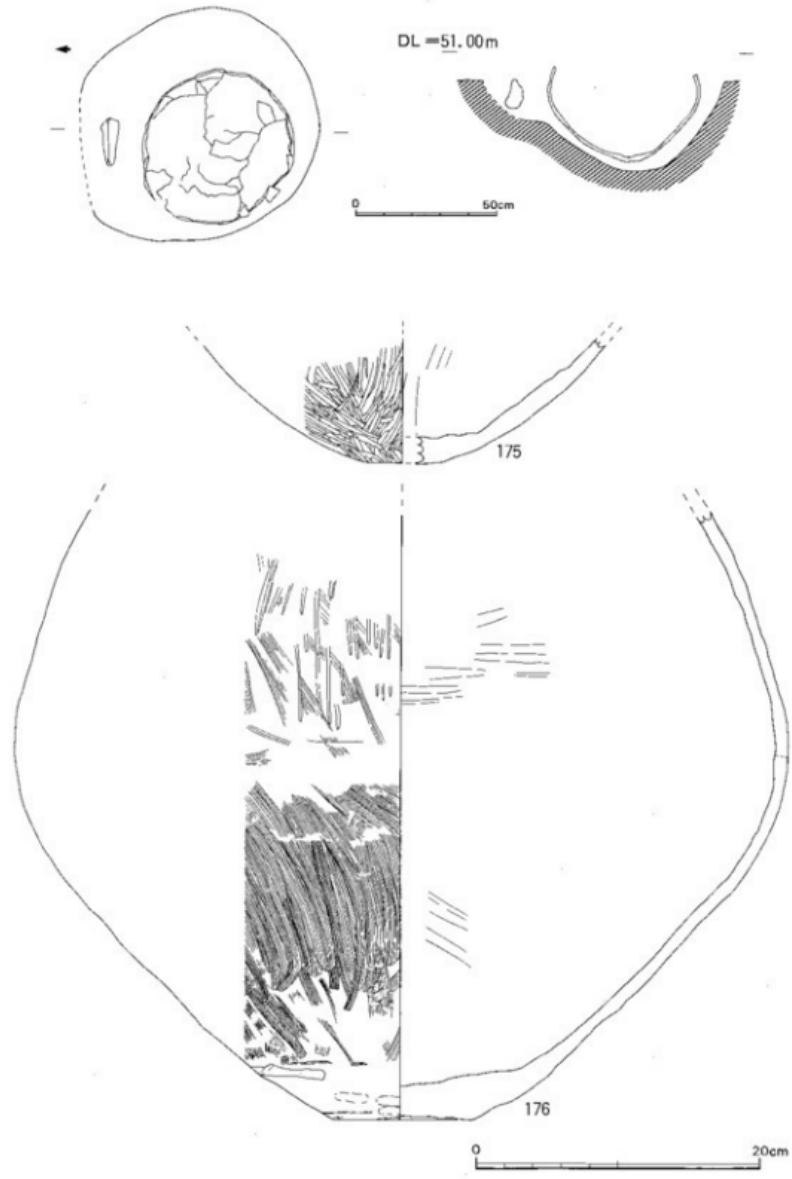


Fig 16 SK 20(壹棺墓 6)実測図と出土造物(175・176)

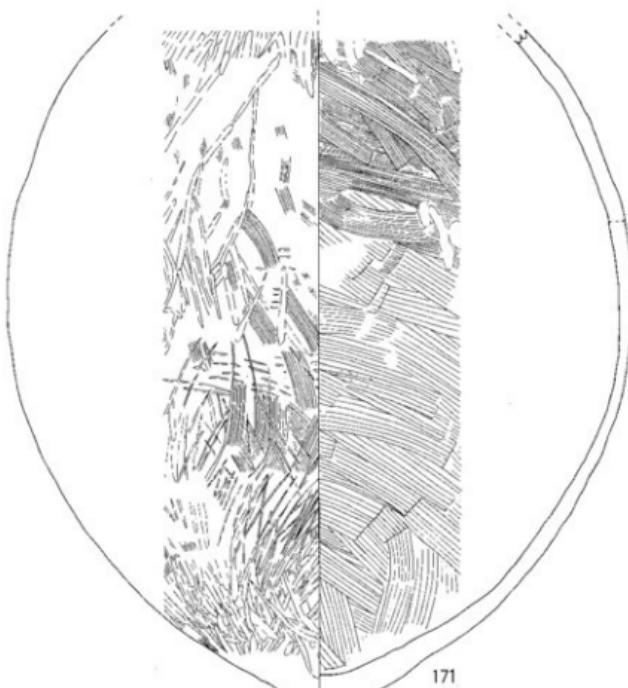
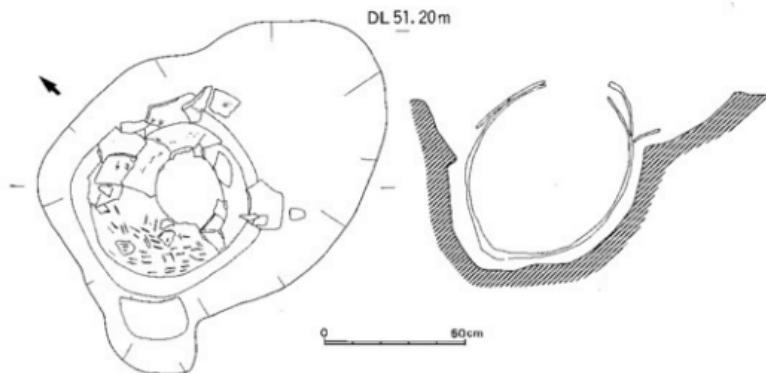


Fig 17 SK 21(塚棺墓 4)実測図と出土遺物(171)

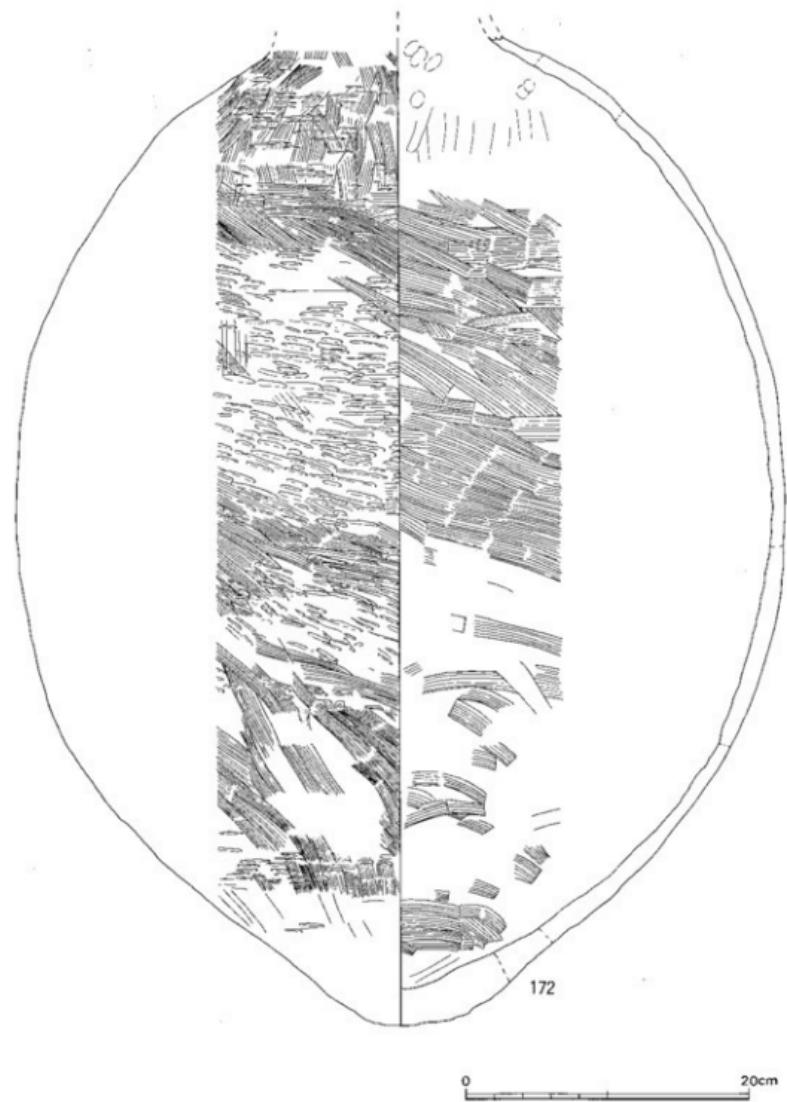


Fig 18 SK 21(壹棺墓 4)出土遺物(172)

S K 21—壺棺墓 4 (Fig 16)

調査区の東北部で S K 20—壺棺墓 6 の南側に位置する。壺棺は複棺（覆口式）であり残存状況は良好で、下壺を上壺が覆う状態で検出した。下壺の内部底に径0.3cm程の玉状の灰黒色土が厚さ5cm程度留まっているのみで空洞の状態であった。墓壙の平面プランは不整形を呈し、長径1.27m、短径0.93mを測る。長軸方向はN-77.0°-Wとなっている。検出面からの深さ61.0cmを測る。墓壙の立ちあがりは下壺とほぼ同じ傾斜をもち、検出面から18cmの深さから広がりをもって急傾斜で立ちあがる。埋置方向はほぼ東向きで据置方向は32.7°傾斜をもっている。下壺は頸部及び口縁部を他の場所で意識的に打ち欠いで持ってきたと考えられ、又、胴上端部は打ち欠いで壺に貼りつけるように置いてある。又、上壺も同様に埋葬時に打ち欠きながら下壺と合わせていったと考えられ、破片は下壺に貼りつけるように置いてあった。

壺棺 (Fig 16-171, Fig 17-172)

172は下壺である。平底気味の底部から内湾して立ちあがり頸部に至る。胴部中位に最大径を有す。卵型のプロポーションを有す。胴部外面は平行及び右下りの叩き調整の後ハケ調整を施す。胴部外面端部から下は横方向のナデ調整を施す。胴部外面中位よりやや下で部分的に粘土を補い上を指頭による強いナデ調整を施す。胴部上端部内面は指頭による強いナデ調整、他は不定方向のハケ調整を施す。底部内面は指頭による強いナデ調整を施す。胴部は6ヶ所の粘土接合帯を認める。171は上壺である。平底から内湾して立ちあがる。胴部外面は叩き→ハケ→ヘラ磨き調整の順で仕上げる。胴部内面中位より上は細いハケ原体で、下は荒いハケ原体で不定方向のハケ調整を施す。中位より上は部分的に指頭による強いナデ調整を施す。

S K 22—壺棺墓 5 (Fig 18)

調査区の東北部で S K 21—壺棺墓 4 の南側に位置する。壺棺は削平を受けており残存状況は不良であった。墓壙の平面プランは不整形を呈し、長径0.78mまで確認でき、短径0.755mを測る。長軸方向はN-38.0°-Wとなっている。検出面からの深さ22.0cmを測る。墓壙の立ちあがりは緩やかな傾斜をもつ。埋置方向はほぼ東向きで据置方向は46.7°傾斜をもっている。なお、柱穴と S B 9 に切られる。又、鉄器(174)が壺棺の埋土から出土しているが、壺棺に伴うものかどうかは不明である。

壺棺 (Fig 18-173・174)

173は僅かに残る平底気味の底部から内湾して立ちあがる。胴部中位よりやや上で最大径を測る。胴部外面の上3分の2は叩き→荒いハケ原体によるハケ→ナデ→ヘラ磨き調整の順で、下3分の1は叩き→荒いハケ原体によるハケ調整の順で、下壺はハケ→ナデ調整の順で仕上げている。胴部上端内面は指頭による強いナデ調整を施し他は荒いハケ原体によるハケ調整を施す。底部内面はナデ調整及び指頭圧痕を認める。底部と胴部下端の境に粘土接合帯を認める。174は鉄製鏹の可能性を有す。幅2.6cm、長さ3.0cm、厚さ0.35mmである。

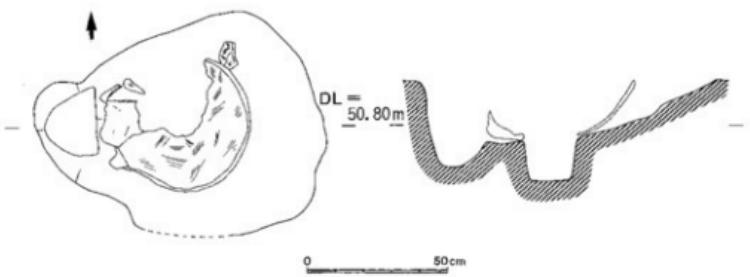


Fig 19 SK 22(壹棺墓 5)実測図と出土遺物(173・174)

S K 23—壺棺墓 7 (Fig 20)

調査区の東北部でS K 21—壺棺墓 4 の東側に位置する小さい壺棺である。壺棺は複棺（覆口式）であり削平のため残存状況は不良である。墓壙は東北側が柱穴に切られているが、平面プランは円形を呈すと考えられる。長径は0.675mまで確認できる。短径は0.575mを測る。長軸方向はN-72.0°-Wとなっている。検出面からの深さ38.5cmを測り、断面形はU字形で東北方向は西南方向に比べやや緩やかに立ちあがる。埋置方位はほぼ東北向きで据置角度は62.5°傾斜をもっている。

壺棺 (Fig 20-178)

178は僅かに残る平底気味の底部から内湾して立ちあがる。胴部中位で最大径を測る。胴部下端外面は叩き→ハケ→縱方向及び右下りの丁寧なヘラ磨きの順で仕上げる。胴部上端内面は、ハケ調整の後指頭による強いナデ調整を施し、他は不定方向のハケ調整の後ナデ調整を部分的に施す。胴部外面に黒斑を認める。

S K 24—壺棺墓 8 (Fig 20)

調査区の東北部に位置し、S T 9 の北側に隣接する。壺棺は削平を受けており残存状況は不良であった。墓壙の平面プランは円形を呈し、長径0.43m、短径0.38mを測る。長軸方向はN-10.2°-Eとなっている。検出面からの深さ8.5cmを測り、断面形は舟底状を呈す。埋置方位はほぼ東向きで据置角度は8.5°傾斜をもっている。

壺棺 (Fig 20-177)

177は平底から内湾気味に立ちあがる。胴部は叩きの後不定方向のハケ調整を施す。底部外面はナデ調整を施す。内面はハケ調整の後指頭による強いナデ調整を施す。

S K 32—壺棺墓 9 (P L 27)

調査区の東北部でS T 8 の東側に位置する。壺棺は削平を受けており残存状況は壺棺の中でも最も不良で僅かに一部が残るのみである。墓壙の平面プランは円形状であったと考えられる。長径0.28m、短径0.25mを測る。長軸方向は不明である。深さ2.0cmを測り墓壙の基底部のみの残存である。埋置方位はほぼ北向きで据置角度は不明である。



住居址の検出

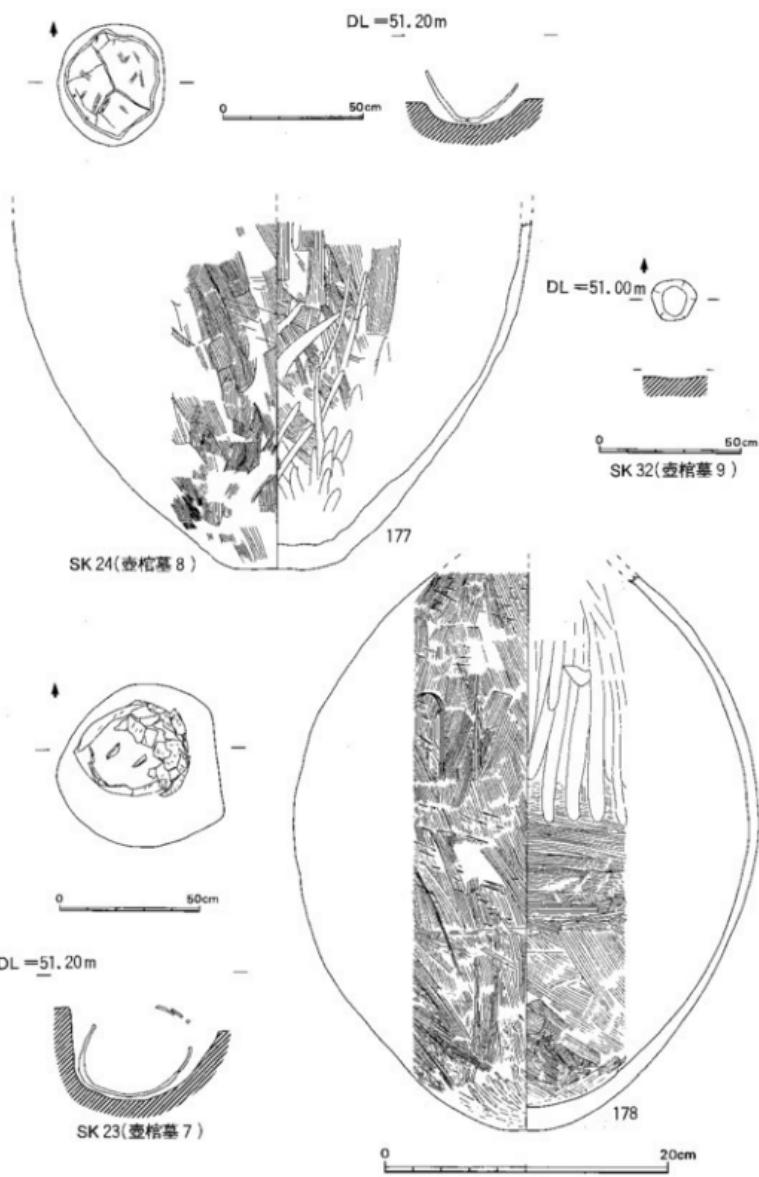


Fig 20 SK 23・24・32(壺棺墓 7～9)実測図と出土遺物(177・178)

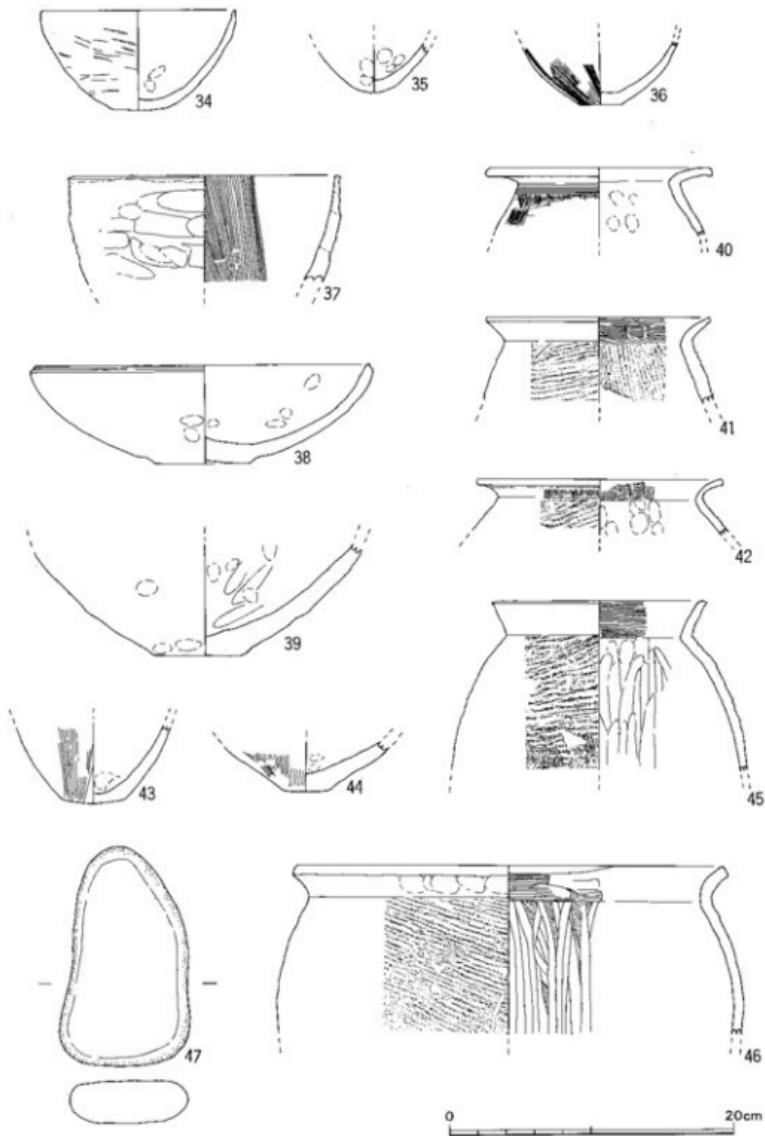


Fig 21 ST 1 (34~47)出土遺物

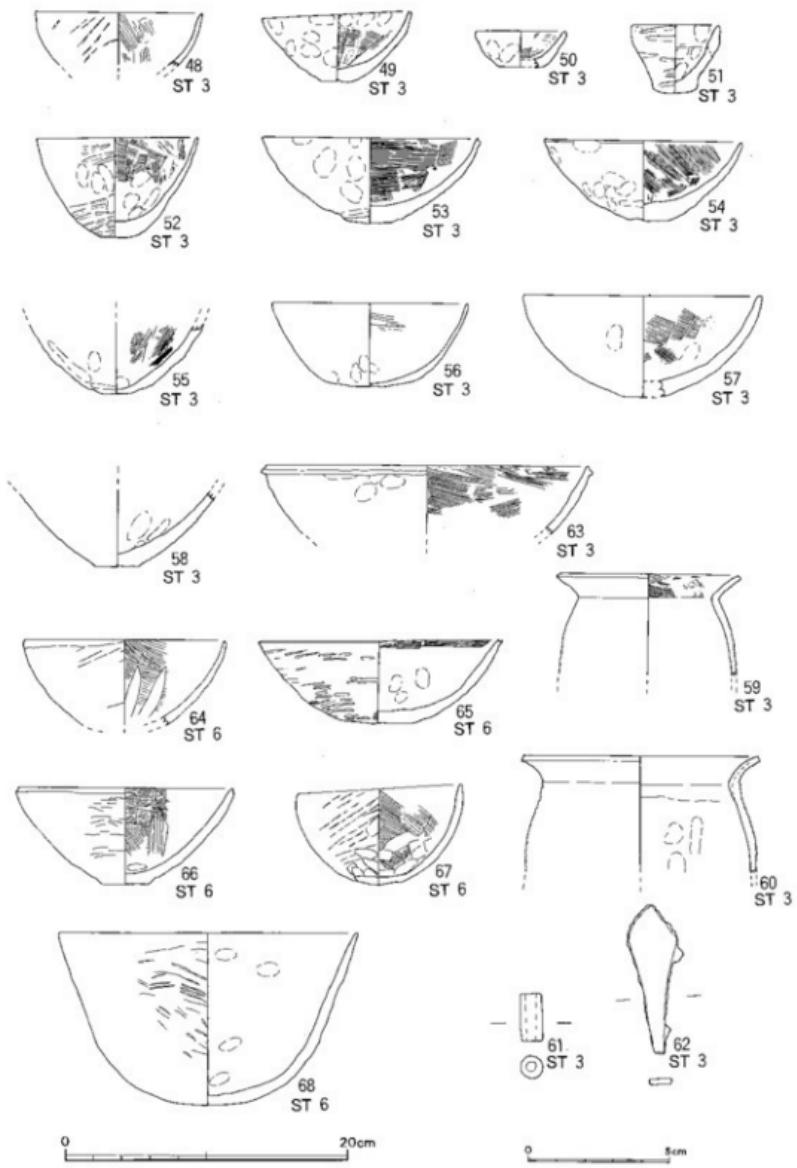


Fig 22 ST 3 (48~63) • ST 6 (64~68) 出土遺物

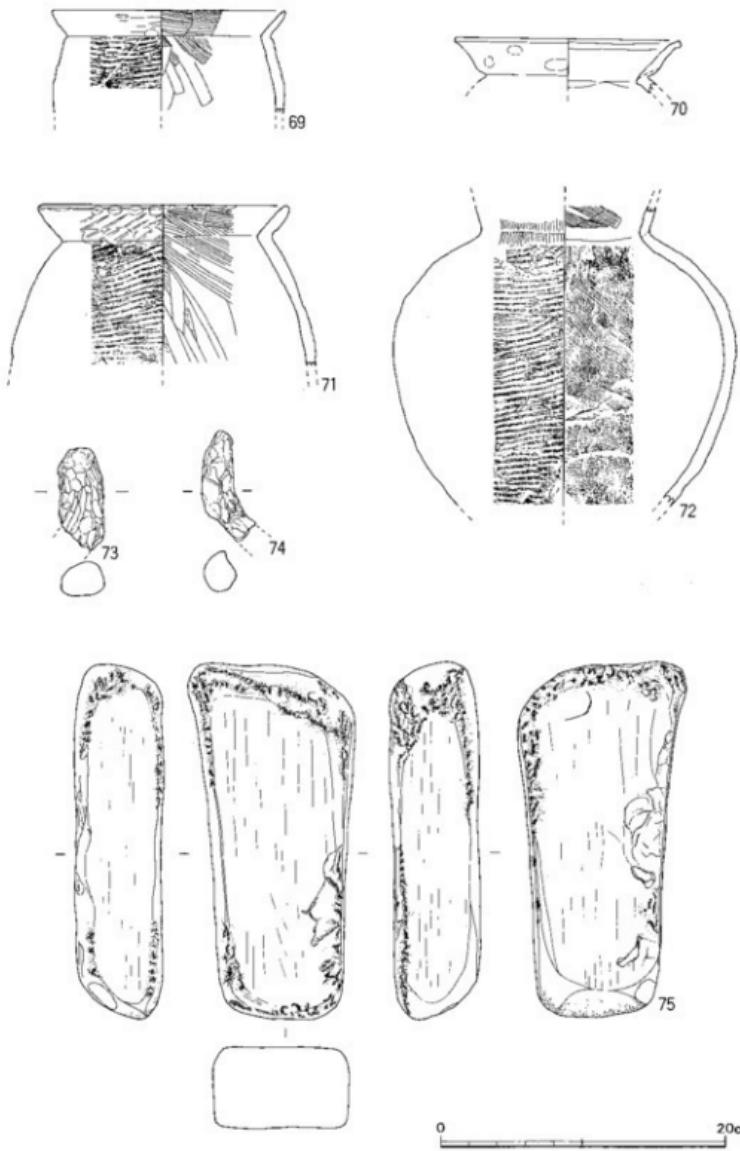


Fig 23 ST 6 (69~75)出土遺物

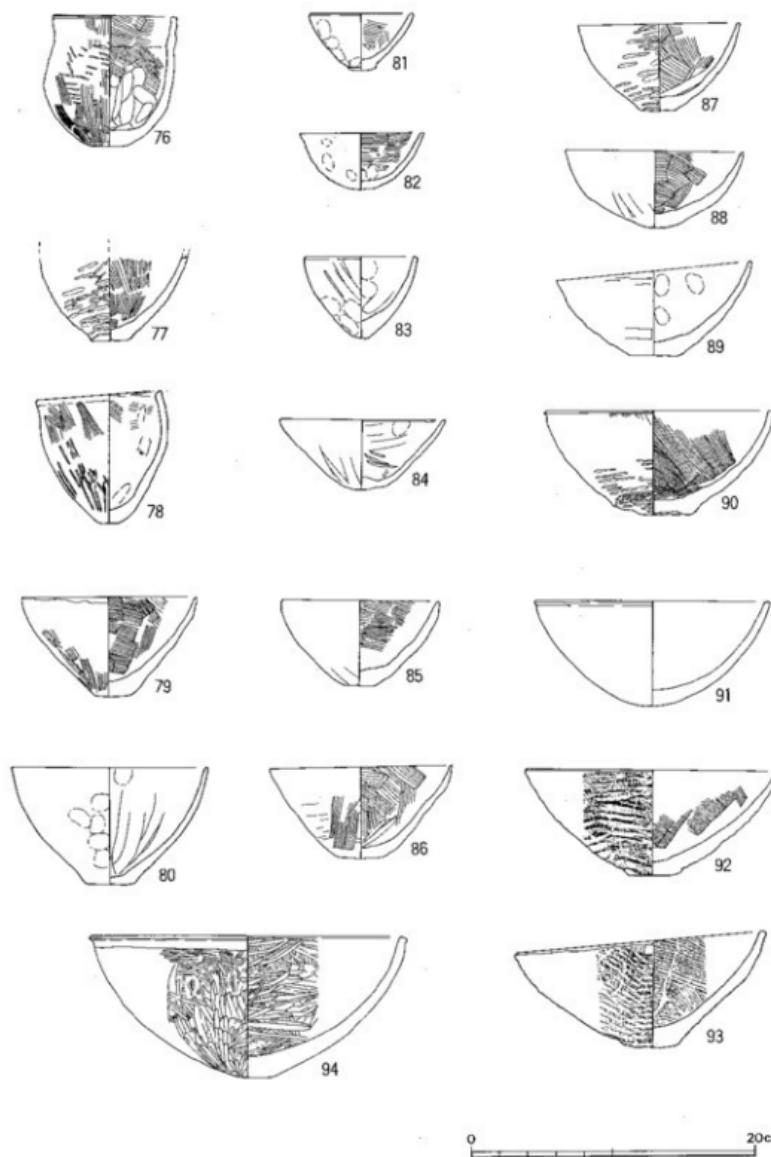


Fig 24 ST 8 (76~94)出土遺物

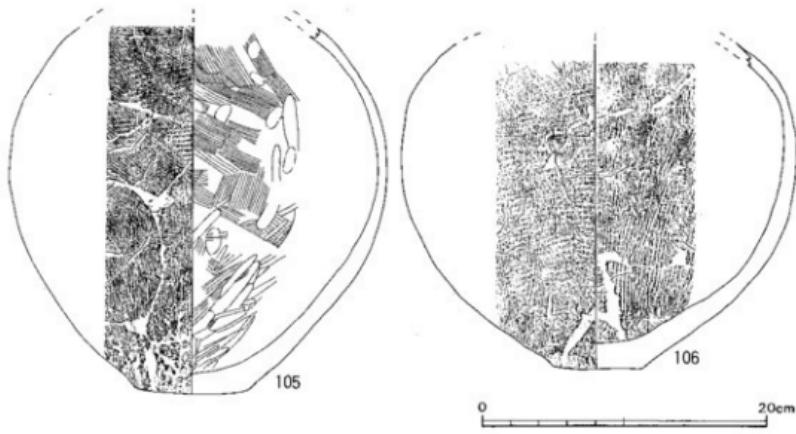
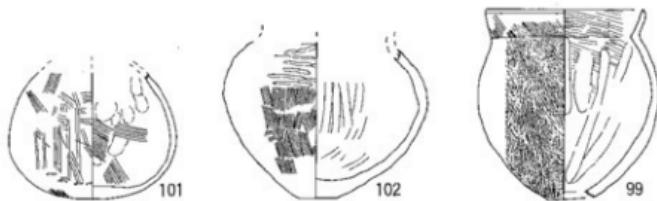
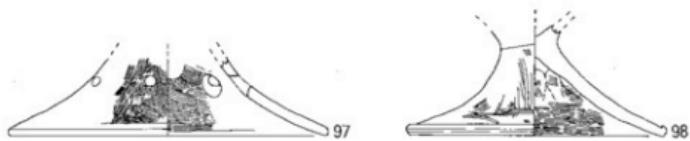


Fig 25 ST 8 (95~106)出土遺物

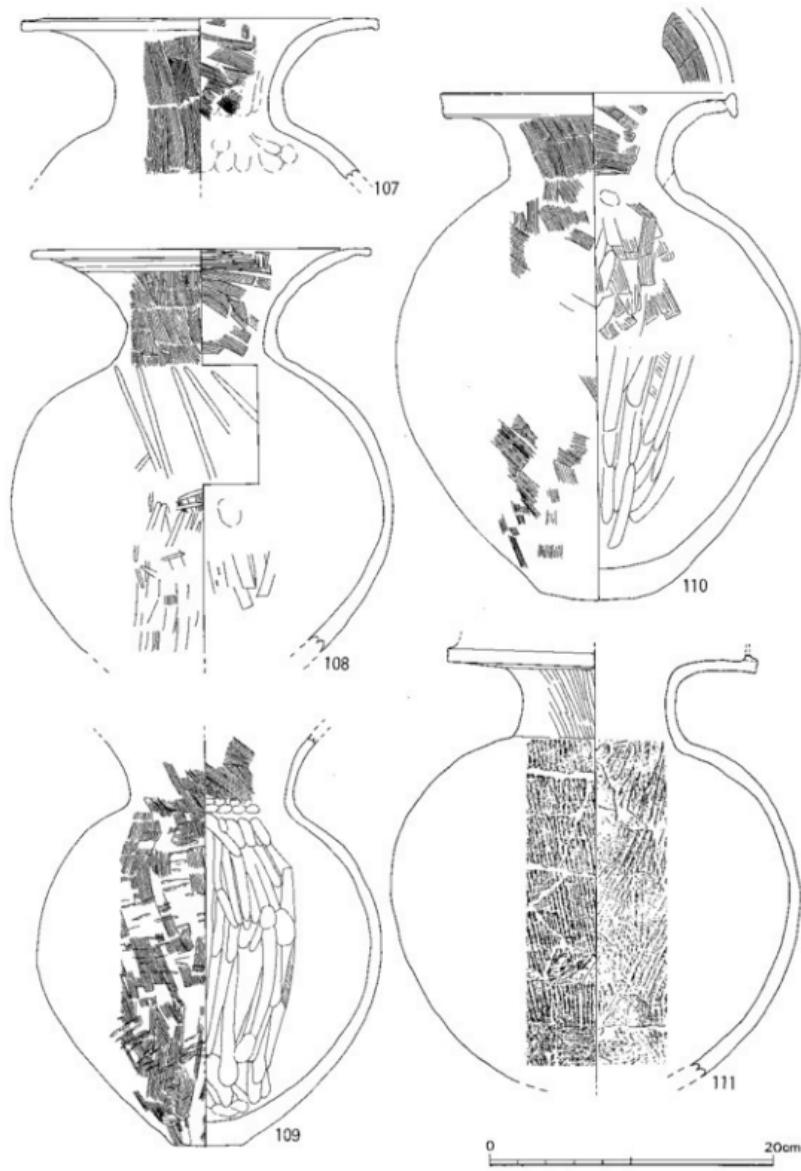


Fig 26 ST 8 (107~111)出土遺物

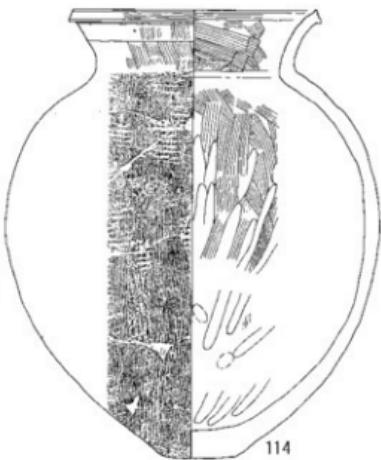
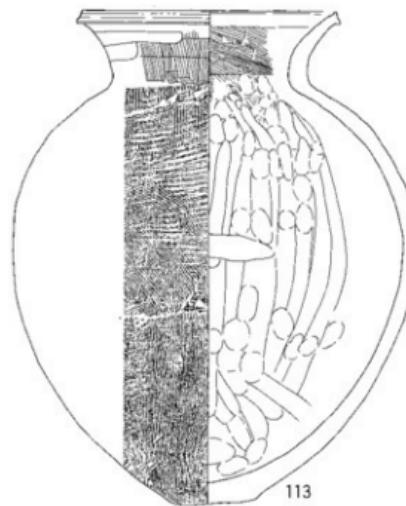
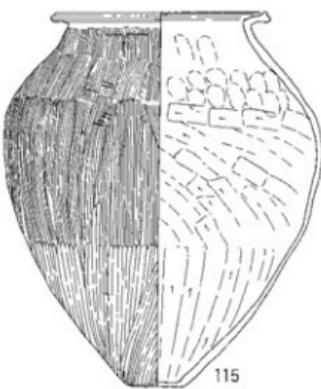
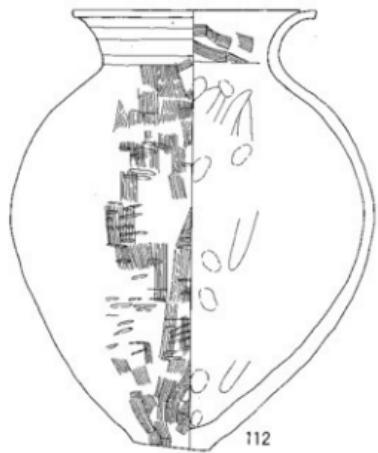
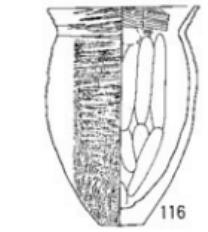
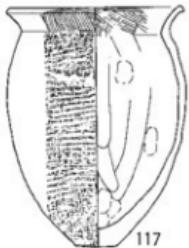


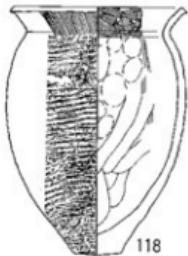
Fig 27 ST 8 (112~115)出土遺物



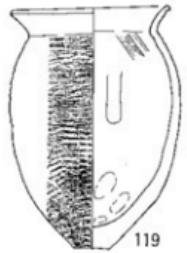
116



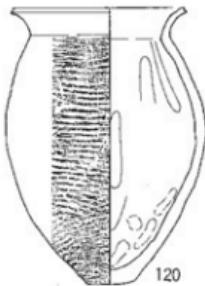
117



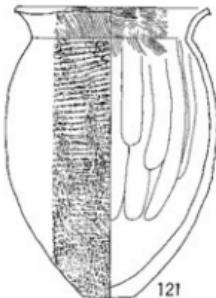
118



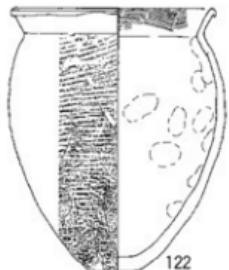
119



120



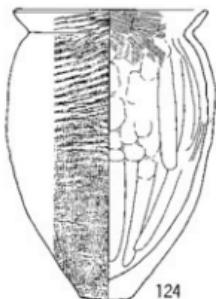
121



122



123



124



Fig 28 ST 8 (116~124)出土遺物

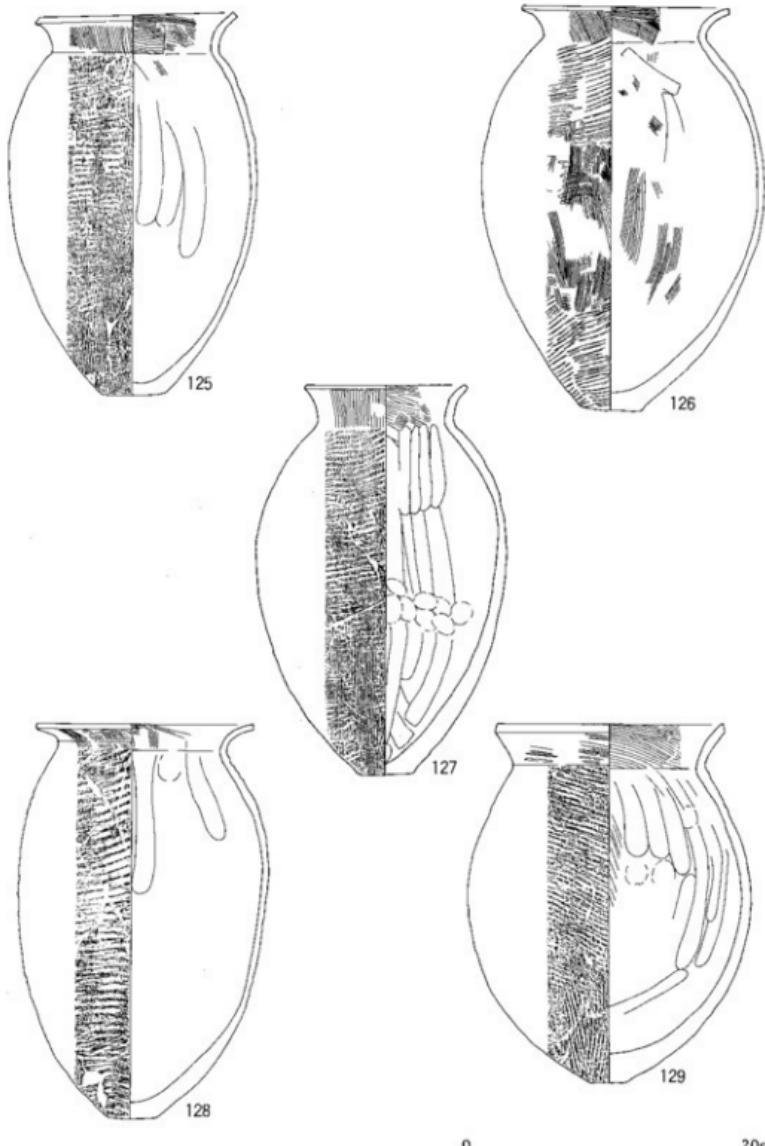


Fig 29 ST 8 (125~129)出土遺物

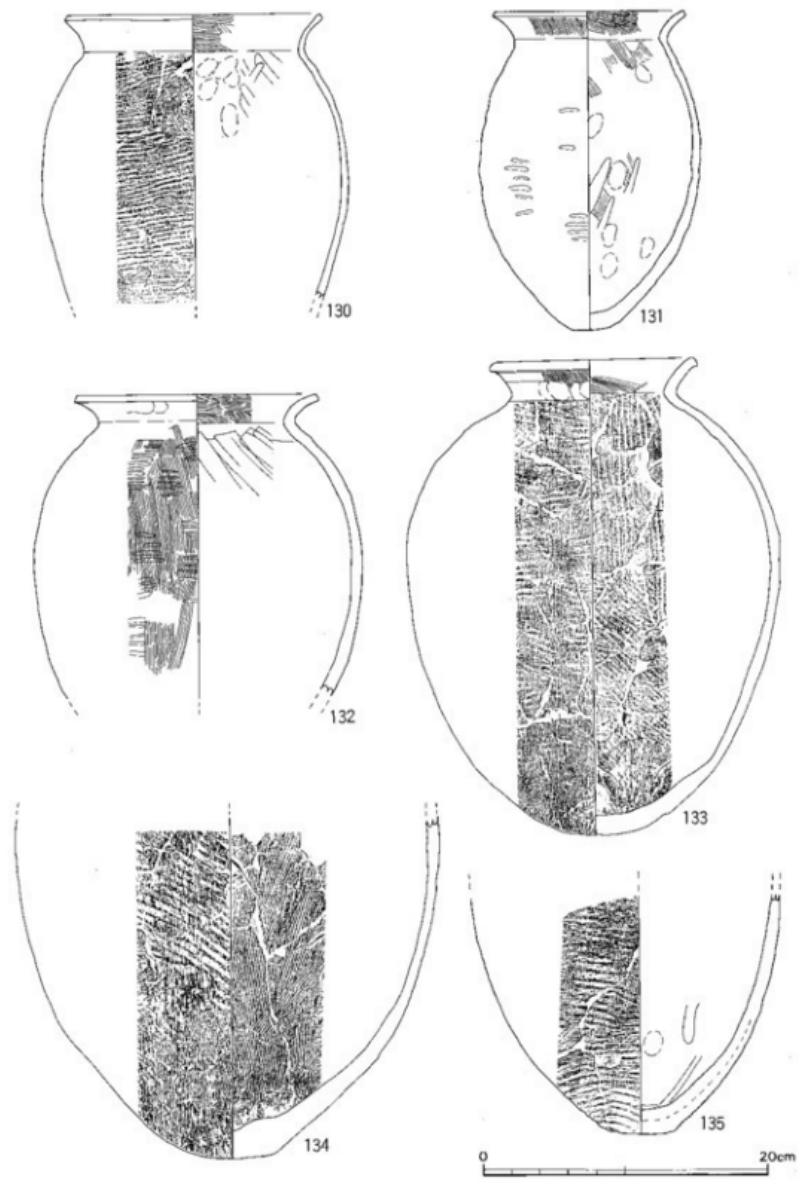


Fig 30 ST 8 (130~135)出土遺物

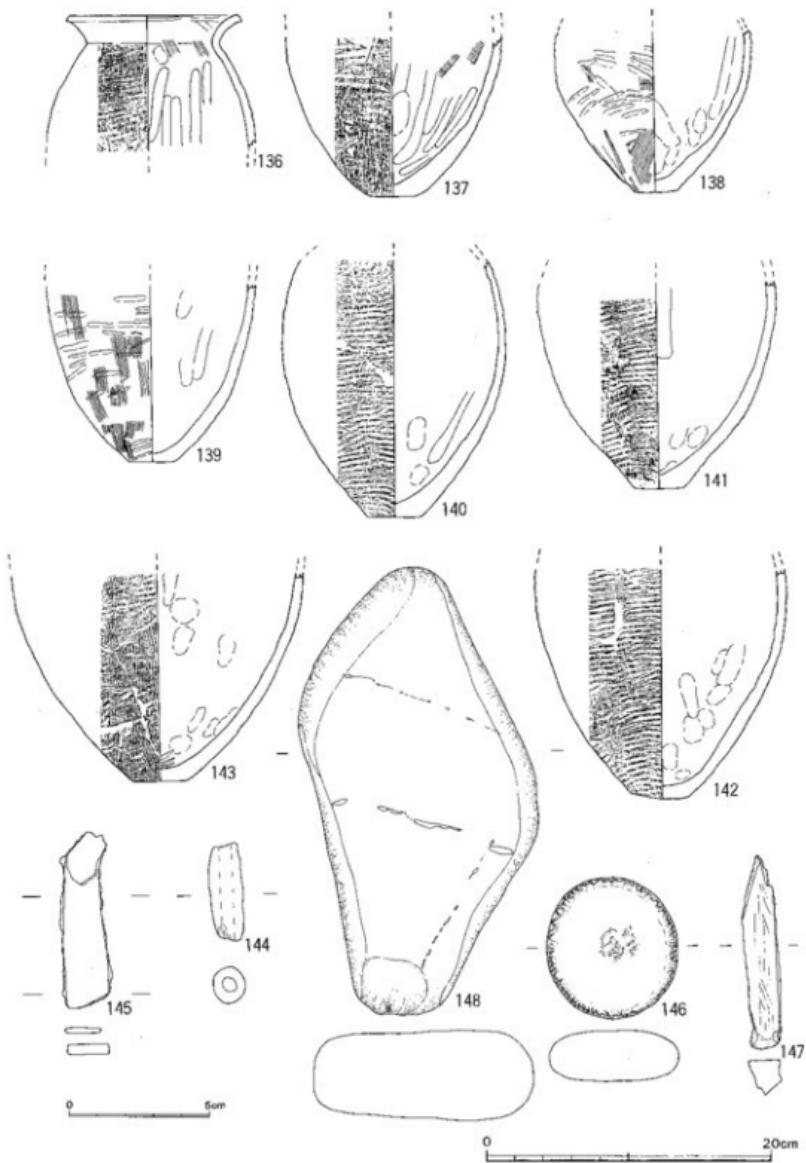


Fig 31 ST 8 (136~148)出土遺物

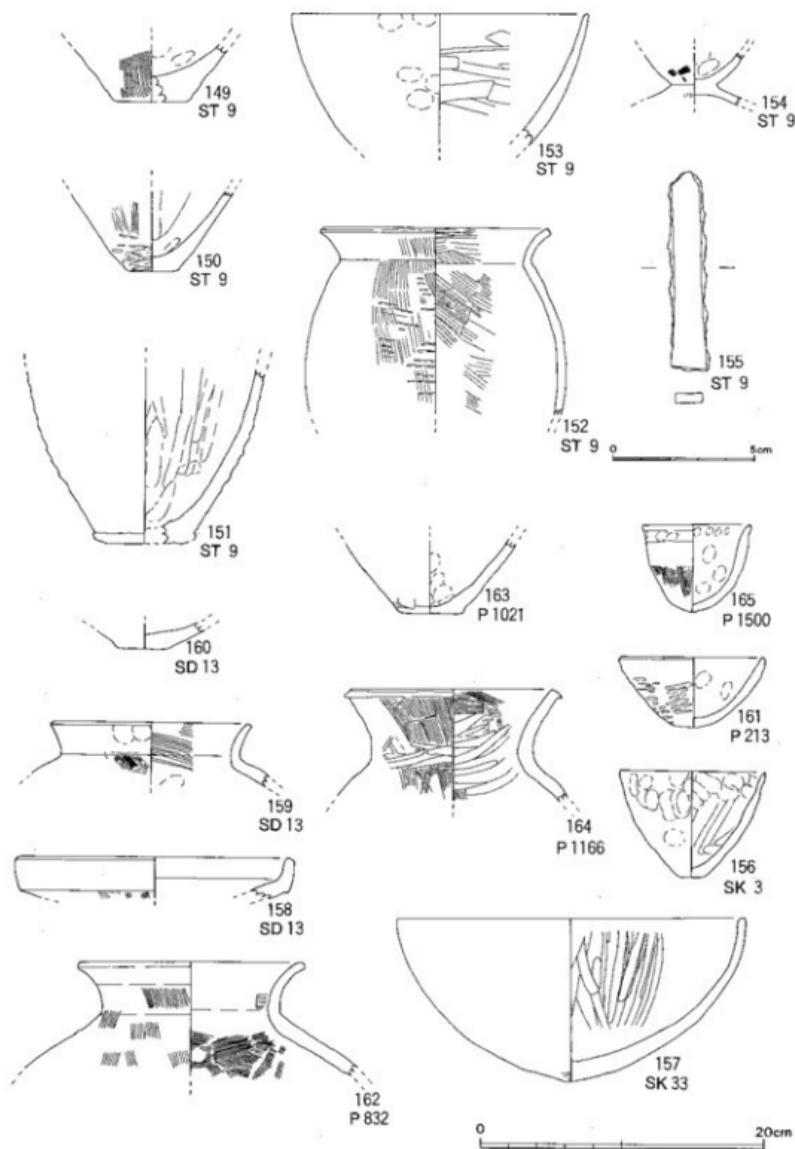


Fig 32 ST 9, SK 3+33, SD 12, P 213·832·1021·1166·1500出土遺物

2. 古墳時代

古墳時代の遺構として竪穴住居 5 棟、土坑 8 基、溝 7 条、柱穴多数を検出した。以下各遺構とその出土した遺物の概要を述べることにする。

竪穴住居

S T 2 (Fig 33)

調査区の中央部南端に位置する。平面プランは隅丸方形を呈す。長径 5.02m、短径 4.86m、検出面からの深さは 8.0~12.0cm、面積は約 24.40m² を測る。長軸方向は N-7.2°-W となっている。埋土は I ~ IV 層である。I 層：灰黒色土、II 層：灰茶色粘質土、III 層：焼土、IV 層：灰である。床面はほぼ水平な面をなし、P 1 ~ P 9 の 9 個の柱穴を検出したが P 1 ~ P 4 を主柱穴とする 4 本柱構造と推測されるが P 1 は S B 6 - P 9 と重複しており、P 2 ~ P 4 は柱穴の切り合いでみられ建て替えが考えられる。これらの柱穴の直径は 19.0~35.0cm、検出面からの深さは 8.0~32.0cm、主柱穴の柱間距離は 2.32~2.88m を測る。柱穴の埋土は灰黒色土単純一層である。又、中央ピットの平面プランは不整形を呈し、長軸 1.65m、短軸 0.30m、検出面からの深さ 5.0~7.0cm を測り、床面は東壁側が 1 段高い段状を呈す。埋土は灰黒色土単純一層である。なお、北側中央の壁際で焼土を確認したことからカマドの可能性を有するが平面プランをとらえることはできなかった。出土遺物から 6 世紀後半と考えられる。

出土遺物 (Fig 39-179~182)

土師器高杯 (179~180) は焼土から出土した。179 は杯部は内湾気味に立ちあがり口縁部は緩やかに外反する。口唇部は丸くおさめる。内・外面共に 2 次焼成で強く発色する。180 は杯部は内湾気味に立ちあがり口縁部は外反する。口唇部は丸くおさめる。181 は土師器甕である。182 は須恵器蓋である。僅かに内湾して立ちあがり段をなして頂部に至る。口唇部は丸くおさめる。

S T 4 (Fig 34)

調査区の西端部で S T 5 の東側に隣接して位置する。平面プランは隅丸方形を呈す。長径 3.24m、短径 2.7m、検出面からの深さは 3.0~9.0cm、面積は 8.75m² を測る小さな住居址である。長軸方向は N-14.5°-E となっている。埋土は黒色土単純一層である。床面はほぼ水平な面をなし、P 1 ~ P 6 を主柱穴とする 6 本柱構造と推測される。これらの柱穴の直径は 23.0~63.0cm、深さ 8.0~13.0cm、柱間距離は 0.5~2.2m を測る。又、P 7 は貯蔵穴と考えられ平面プランは円形を呈し、直径約 49.0cm、検出面からの深さは 14.0cm を測る。柱穴の埋土は黒色土単純一層である。出土遺物から 4 世紀初頭と考えられる。なお、古代~中世の多くの柱穴に切られる。

出土遺物 (Fig 39-183~186)

土師器鉢 (184・185)、土師器甕 (183・186) が床面から出土した。184 の土師器鉢は丸底から内湾して立ちあがり、口縁部は屈曲して外反する。185 は突出気味の平底から斜上外方に直

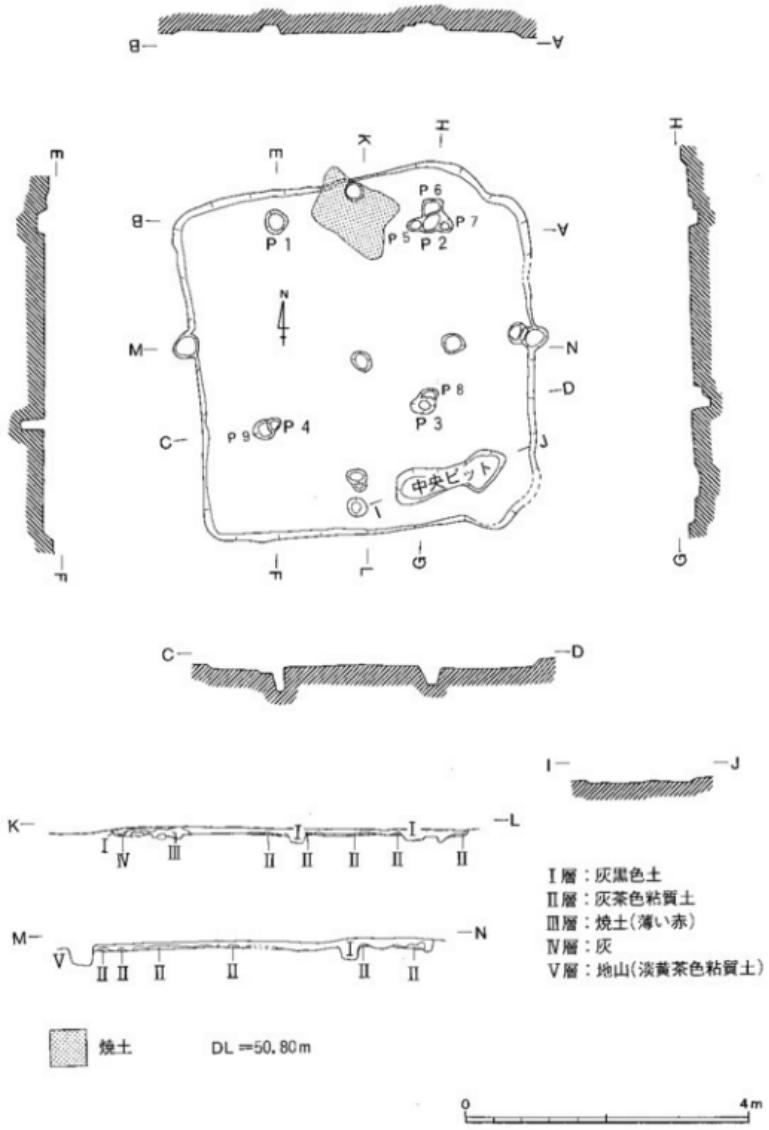


Fig 33 ST 2 実測図

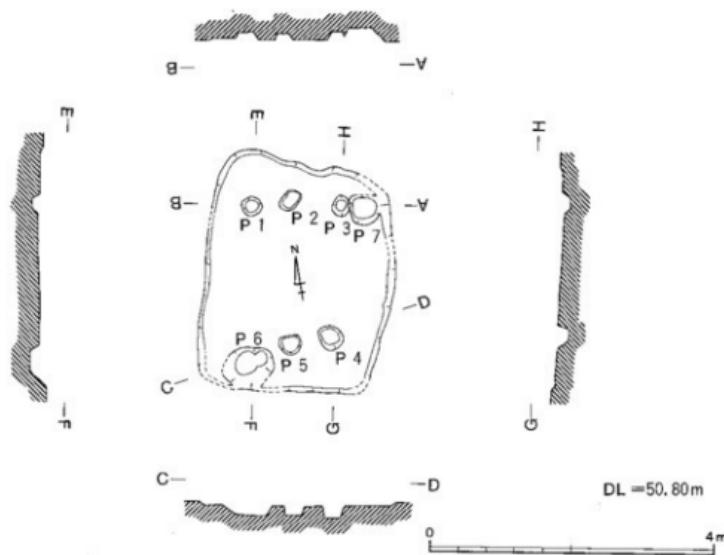


Fig 34 ST 4 実測図

線的に立ちあがる。183の甕は丸底気味の底部から内湾して立ちあがり、口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口縁端部は下方に僅かに肥厚して口唇部は外傾して面をなす。186は内湾して立ちあがり、口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。

ST 5 (Fig 35)

調査区の西端部でST 4の西側に隣接して位置する。西側は調査区外に出る。平面プランは扁平な隅丸方形を呈すると考えられベッド状遺構を伴う。長径は5.9mまで確認できる。短径4.93m、検出面からの深さは11.0~20.0cm、面積は約29.09m²まで確認できる。長軸方向はN~67.5°~Wとなっている。埋土はⅠ~Ⅱ層である。Ⅰ層：黒色土、Ⅱ層：淡灰黑色土である。床面は3~10cmの疊が多いがほぼ水平な面をなし、P 1~P 18の18個の柱穴を検出したがP 1~P 4を主柱穴とする4本柱構造と推測される。これらの柱穴の直径は30.0~49.0cm、検出面からの深さ26.0~31.0cm、柱間距離は1.95~2.83mを測る。なお、P 1・P 2は柱穴の切り合いで見られ建て替えが考えられる。ベッド状遺構は、南西部及び北東部に造っており、ベッドは地山成形で幅0.95~1.52m、検出面からの深さは6.0~10.0cmを測る。中央ピットは住居址の南側に位置する。平面プランは不整形を呈す。長径0.80m、短径0.58m、検出面からの深さ12.0cmを測る。柱穴及び中央ピットの埋土は淡灰黑色土単純一層である。出土遺物から4世紀初頭と考えられる。古代~中世の多数の柱穴に切られる。

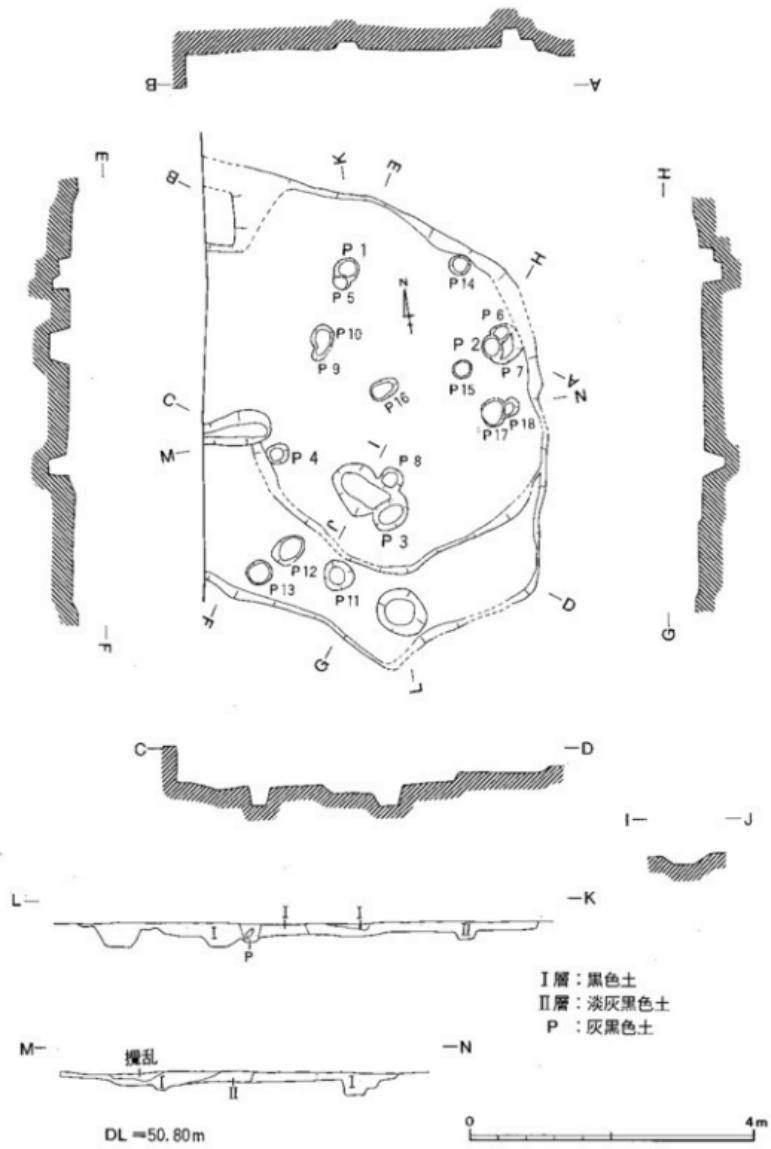


Fig 35 ST 5 实测图

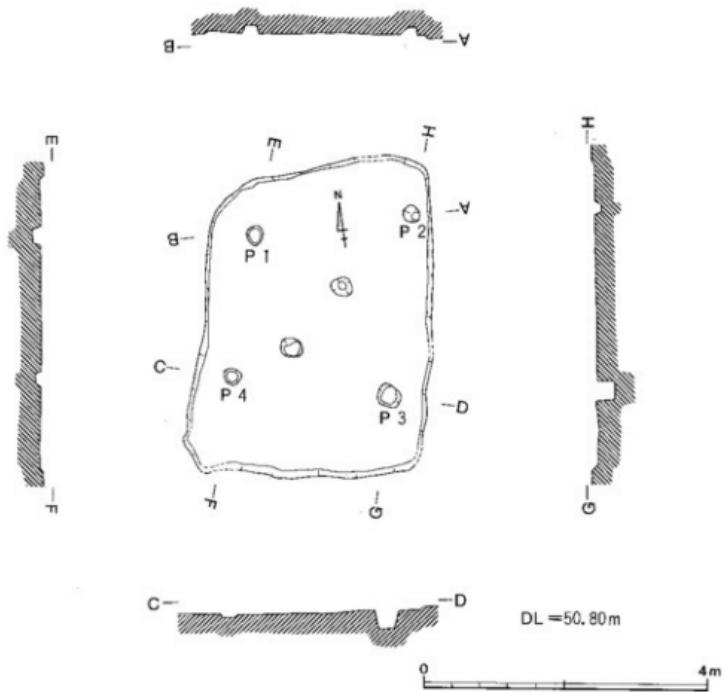


Fig 36 ST 7 実測図

出土遺物 (Fig 39-187~192)

土師器鉢 (187~189) は埋土から土師器鉢 (190) はほぼ完形で床面から出土した。土師器壺 (191), 土師器甕 (192) は床面から出土した。187は平底から斜上外方に僅かに外反して立ちあがる。190は丸底気味の底部から内湾して立ちあがり一端肥厚して口縁部に至る。口唇部は外傾して面をなす。体部外面に稜莊痕を認める。又、内面は有機物が付着する。191の土師器壺は内湾して立ちあがり屈曲して口縁部に至る。口縁部は斜上外方は直線的に長く立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。土師器甕 (192) は口縁部は「く」の字状に外反して、口唇部は僅かに凹んで面をなす。

ST 7 (Fig 36)

調査区の中央部に位置する。平面プランは隅丸方形を呈す。長径4.5m, 短径3.34m, 検出面からの深さは2.0~8.0cm, 面積は15.03m²を測る。長軸方向はN-10.2°-Eとなっている。

埋土は黒色土単純一層である。床面はほぼ水平な面をなしP 1～P 4を主柱穴とする4本柱構造と推測される。これらの柱穴の直径は22.0～36.0cm、検出面からの深さは4.0～26.0cm、主柱穴の柱間距離は2.1～2.6mを測る。柱穴の埋土は黒色土単純一層である。

出土遺物 (Fig 39-193・Fig 40-194～198)

須恵器蓋 (194)、須恵器杯 (195)、土師器甕 (196～198) 打製石庖丁 (193) はいずれも床面より出土したが、打製石庖丁は古い時期の混入品と考えられる。須恵器蓋 (194) は平坦な頂部から僅かに稜をもって下降し口縁部に至る。頂部外面はヘラ削りを施す。須恵器杯 (195) は内湾気味に立ちあがり、受端部は丸くおさめる。立ちあがりは外反気味に軽く内傾し、端部は丸くおさめる。196の土師器甕は内湾して立ちあがり、口縁部は屈曲して外反する。胴部内面は右下りのヘラ削りを施す。胴部外面は2次焼成で紅く発色する。土師器甕 (197) は平底から内湾気味に立ちあがる。198の甕は内湾気味に立ちあがり、口縁部は屈曲して外反する。口唇部は丸くおさめる。内・外面共横ナデ調整を施す。

S T 10 (Fig 37)

調査区の東南部に位置する。平面プランは隅丸方形を呈す。北側の壁際のはば中央部にカマドが確認された。長径4.47m、短径4.25m、検出面からの深さは4.0～10.0cm、面積は約19.00m²を測る。長軸方向はN-15.0°-Wとなっている。埋土は黒色土単純一層である。床面はほぼ水平な面をなすが南半分は10cm前後の礫が一面にあった。P 1～P 10の10個の柱穴を検出したがP 1～P 4を主柱穴とする4本柱構造が推測される。これらの主柱穴の直径は15.0～48.0cm、検出面からの深さ7.0～26.0cm、柱間距離は1.82～2.72mを測る。埋土は黒色土単純一層である。なお、中世の柱穴に切られる

カマド (Fig 37)

住居址の北側の壁際のはば中央に構築され、突出型と考えられる。右袖の長さは1.02m、幅15.0cm、左袖の長さ0.62m、幅10.0cmを測る。焼却部は僅かに凹む。埋土は焼土と灰が混じる。

出土遺物 (Fig 40-199～207)

須恵器蓋 (200)、須恵器杯 (201～202)、古い時期からの混入品と考えられる弥生土器甕 (204)、弥生土器甕 (207) が埋土から、須恵器杯 (203) は床面から、須恵器蓋 (199)、土師器甕 (205・206) はカマドの埋土から出土した。須恵器蓋 (200) は頂部から緩やかに下降し段をなして外方に開がり口縁部に至る。口唇部は丸くおさめる。202の須恵器杯は住居址の全体に破片が散乱していたが、丸底気味の底部から内湾して立ちあがり受端部は丸くおさめる。立ちあがりは短く内傾して端部は丸くおさめる。底部内面は指頭による強い放射状のナデ調整を施す。土師器甕 (205) は、口縁部は屈曲して外反する。口唇部は丸くおさめる。胴部外面は横方向の丁寧なハケ調整を施す。胴部内面は強い横ナデ調整を施す。

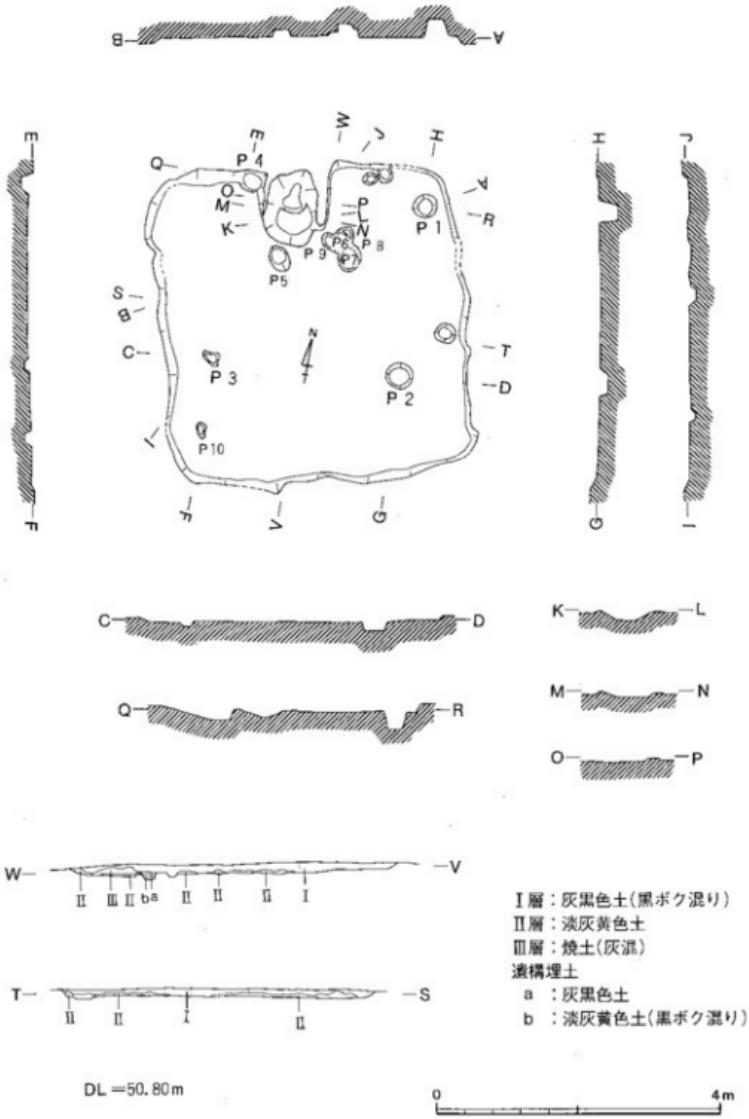


Fig 37 ST 10実測図

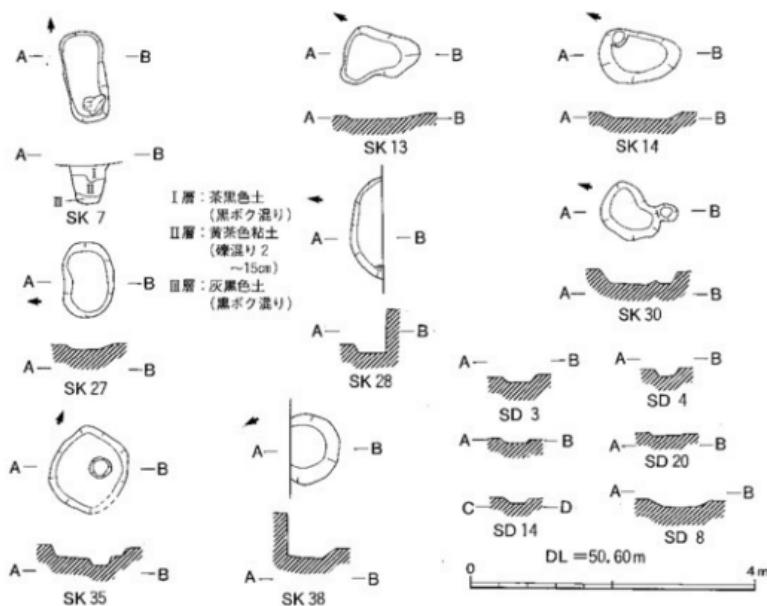


Fig 38 SK 7・13・14・27・28・30・35・38, SD 3・4・8・14・20実測図

土坑

SK 7 (Fig 38)

調査区の西端部、S T 5の南側に位置する。平面プランは隅丸方形を呈す。長径1.27m、短軸0.58m、検出面からの深さは55.0cmを測る。断面形はU字形を呈す。長軸方向はN-9.0°-Wとなっている。埋土はI～Ⅲ層である。I層：茶黒色土、II層：黄茶色粘質土(2.0～15.0cmの疊混り)、Ⅲ層：灰黒色土である。

出土遺物

弥生土器片、土師器片、須恵器壺片、杯片等が出土しているが図示できるものではない。

SK 13 (Fig 38)

調査区の中央北部、SK 14の西側に位置する。平面プランは不整形を呈す。長径1.08m、短径0.59m、検出面からの深さは6.0cmを測る。断面形は逆台形を呈す。長軸方向はN-27.3°-Wとなっている。埋土は灰黒色土単純一層である。

出土遺物

弥生土器片、土師器壺片が少量出土しているが図示できるものではない。

S K 14 (Fig 38)

調査区の中央北部、S K 13の東側に位置する。平面プランは椭円形を呈す。長径1.15m、短径0.72m、検出面からの深さは8.0~10.0cmを測る。断面形は逆台形を呈す。長軸方向はN-10.0°-Wとなっている。埋土は暗灰黒色土單純一層である。

出土遺物 (Fig 40-208)

弥生土器片、土師器片及び須恵器壺片、高杯脚部 (208) がある。

S K 27 (Fig 38)

調査区の東北部、S K 22 (壺棺墓 5) の東側に位置する。平面プランは椭円形を呈す。長径1.07m、短径0.70m、検出面からの深さは7.0~8.0cmを測る。断面形は逆台形を呈す。長軸方向はN-88.2°-Eとなっている。埋土は暗灰黒色土單純一層である。

出土遺物はなかった。

S K 28 (Fig 38)

調査区の西南端部に位置する。南側の半分程度調査区外に出る。平面プランは椭円形を呈すと考えられる。長径1.45m、短径0.46m以上、検出面からの深さ12cmを測る。長軸方向は不明である。埋土は灰黒色土單純一層である。なお、S K 2に切られる。

出土遺物

弥生土器片、土師器片があるが図示できるものではない。

S K 30 (Fig 38)

調査区の東部、S K 29の南側に位置する。平面プランは不整形を呈す。長径0.90m、短径0.64m、検出面からの深さは18.0~20.0cmを測る。断面形は逆台形を呈す。長軸方向はN-24.2°-Eとなっている。なお東南端が中世の柱穴に切られる。

出土遺物

弥生土器片、土師器片があるが図示できるものではない。

S K 35 (Fig 38)

調査区の東南端部に位置する。平面プランは隅丸方形を呈す。長径1.27m、短径1.07m、検出面からの深さは12.0~17.0cmを測る。断面形は逆台形を呈す。長軸方向はN-25.9°-Wとなっている。埋土は暗灰黒色土單純一層である。中央部に直径30.0cm、土坑の床面からの深さ12.0cmの円形のプランを呈す柱穴を確認したが先後関係は不明である。なお、S B 12に切られる。

出土遺物

弥生土器片、土師器片が少量あるが図示できるものではない。

S K 38 (Fig 38)

調査区の北東端に位置し、北側は調査区外に出る。平面プランは円形を呈すと考えられる。長径1.02m、短径0.70mまで確認できる、検出面からの深さは12.0~15.0cmを測る。断面形は

逆台形を呈す。長軸方向はN-57.8°-Wとなっている。埋土は暗灰黒色土単純一層である。

出土遺物

弥生土器片、土師器片があるが少量で図示できるものではない。

溝

S D 3 (Fig 38)

調査区の西南端部に位置する。N-73.5°-Wで東西方向に3.6m延び、西側は調査区外に出る。幅0.40~0.62m、検出面からの深さは9.0cm、床面の東端の標高は50.325m、西端の標高は50.343mを測る。断面形は逆台形を呈す。埋土は灰黒色粘質土単純一層である。なお、S K 11に切られる。

出土遺物

弥生土器片、土師器片（内面青海波文を認める）が少量あるが図示できるものではない。

S D 4 (Fig 38)

調査区の西南部に位置する。N-84.0°-Wで東西方向に3.48m延び、西側は調査区外に出る。幅0.30~0.45m、検出面からの深さは12.0cm、床面の東端の標高は50.365m、西端の標高は50.934mを測る。断面形は逆台形を呈す。埋土は黑色土単純一層である。なお、S T 1を切る。

出土遺物 (Fig 40-209)

弥生土器片、土師器片、棒状叩石（209）が出土している。

S D 8 (Fig 38)

調査区の西南部に位置する。N-17.5°-Eで南北方向に3.8m延び、南側は調査区外に出る。幅0.7~0.92m、検出面からの深さは9.0~11.0cm、床面の北端の標高は50.376m、南端の標高は50.375mを測る。断面形は逆台形を呈す。埋土は暗灰黒色土単純一層である。なお、S D 9に切られる。

出土遺物

弥生土器片、土師器片、須恵器片が出土しているが細片で図示できるものではない。

S D 14 (Fig 38)

調査区の北部に位置する。東西方向に東から僅かにカーブを描いてN-81.5°-Wで26.35m延びる。東西両端部は検出できなかつたが、これは削平の結果と考えられる。幅0.16~0.70m、検出面からの深さは7.0cm、床面の東端の標高は50.85m、西端の標高は50.567mを測る。断面は逆台形を呈す。埋土は灰黒色土単純一層である。なお、S A 1、S D 18・S D 24に切られる。

出土遺物

弥生土器片、土師器片が出土しているが細片で図示できるものではない。

S D 20 (Fig 38)

調査区の南東部に位置する。N-8.0°-Eで南北方向に5.9m延びた後分かれて南東方向に2.8m、西南方向に3.8m延びる。西南端部は調査区外に出る。北端及び南東端は検出できなか

ったがこれは削平の結果と考えられる。幅0.6~1.4m, 検出面からの深さ7.0cm, 床面の北端の標高は50.754m, 南東端の標高は50.713m, 西南端の標高は50.679mを測る。埋土はⅠ~Ⅱ層である。Ⅰ層：灰黒色粘質土（黒ボク混り）Ⅱ層：暗茶色砂礫土（1~3cmの砂礫を含む）である。

出土遺物

Ⅱ層より摩耗した弥生土器片, 土師器片が多く出土したがいずれも細片で図示できるものではない。

S D 24 (Fig 60)

調査区の東部, S D 18の西側に位置する。N-5.5°-Eで南北に3.0m延びる。南北両端は検出できなかつたがこれは削平の結果と考えられる。幅0.28~0.43m, 検出面からの深さ6.0cm, 床面の北端の標高は50.78m, 南端の標高は50.735mを測る。断面形は逆台形を呈す。埋土は灰黒色土單純一層である。なお, S D 14を切る。

出土遺物はなかった。

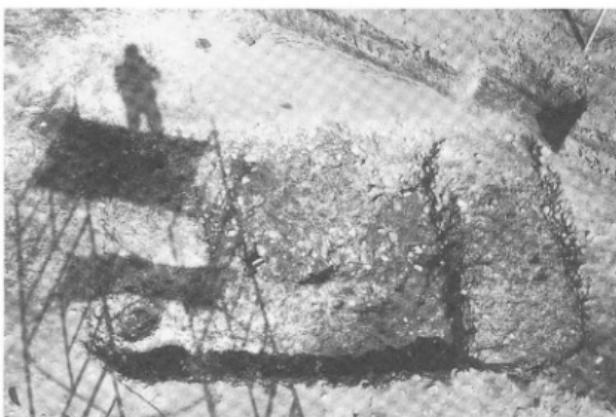
柱穴

P 1803 (Fig 63)

調査区の西端部に位置する。平面プランは梢円形を呈す。長径55.0cm, 短径35.0cm, 検出面からの深さ26.3cmを測る。埋土は灰黒色土單純一層である。

出土遺物 (Fig 40-210)

須恵器壺(210)が出土している。外面中央が凹む底部から内湾氣味に立ちあがる。内・外表面共丁寧な横ナデ調整を施す。底部外面はヘラ切りである。



ローリングタワーからの撮影

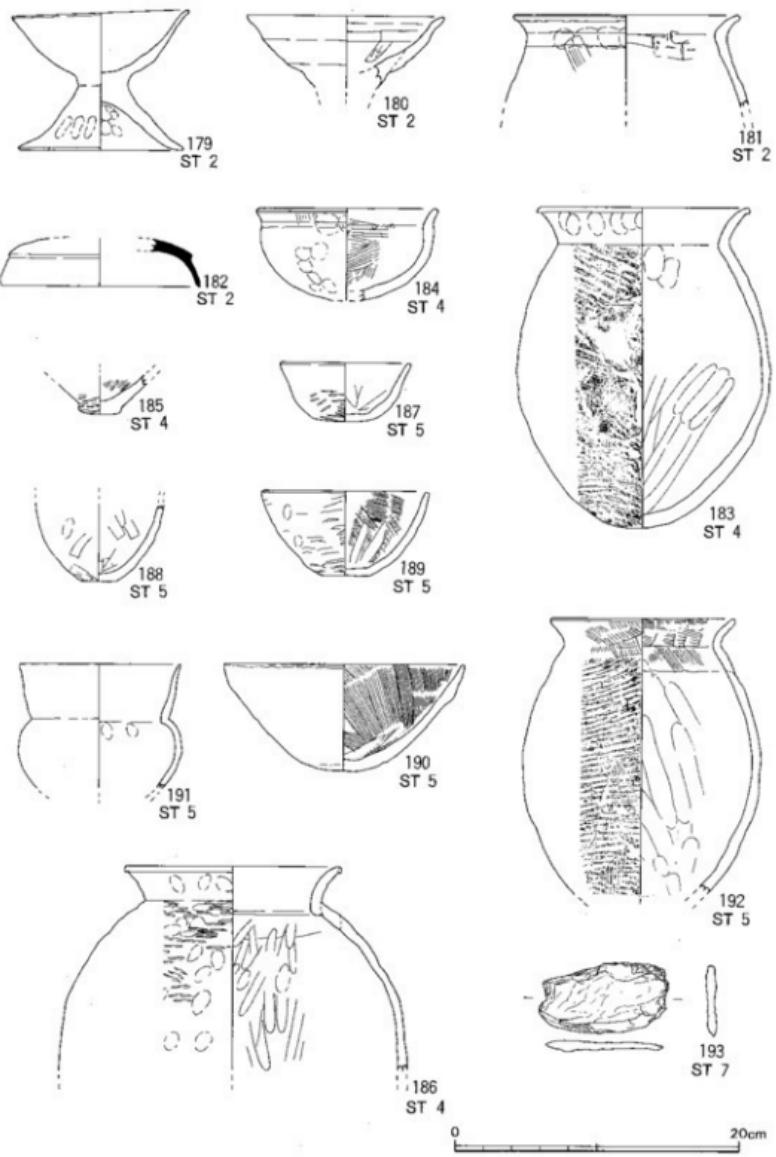


Fig 39 ST 2 (179~182) ST 4 (183~186) ST 5 (187~192) ST 7 (193) 出土遺物

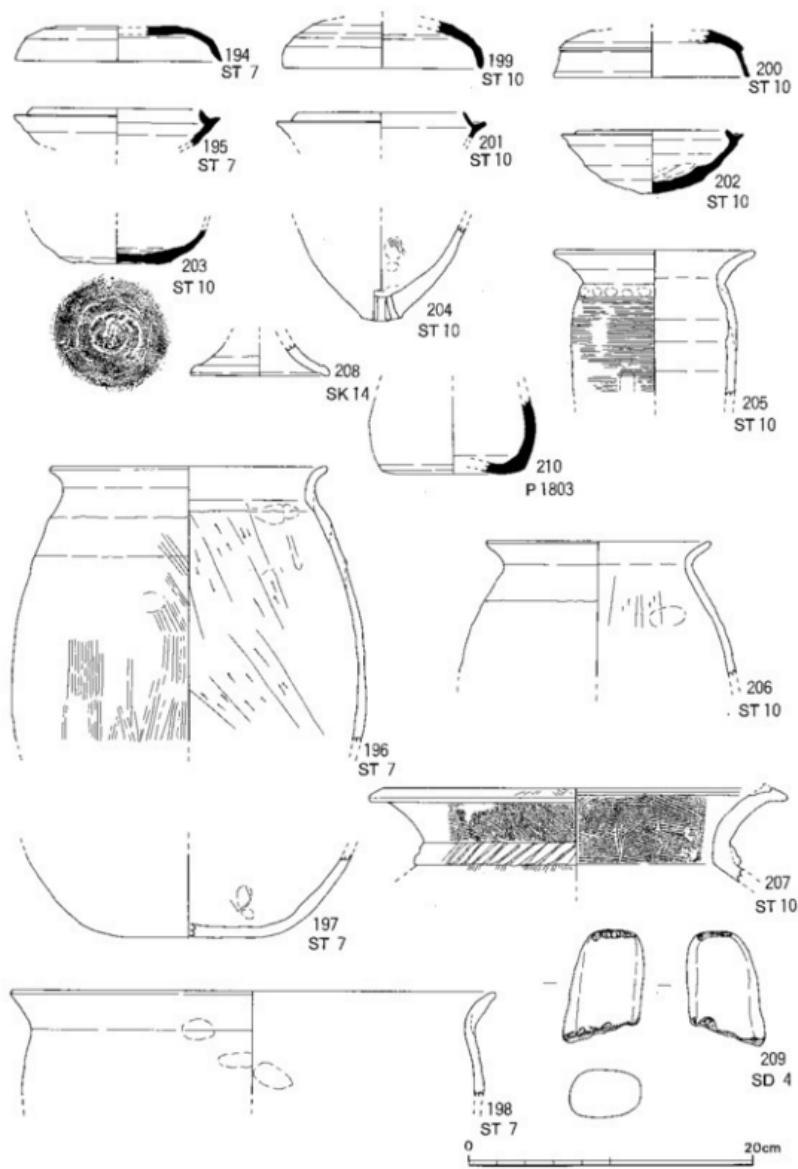


Fig 40 ST 7 (194~198) ST 10(199~207) SK 14(208) SD 4 (209) P 1803(210) 出土遺物

3. 平安時代

平安時代の遺構として、土坑3基、溝1条、井戸1基、柱穴多数を検出した。他に時期は不明であるが、井戸に伴う可能性のある掘立柱建物3棟、柵列1条を検出したので先述した如く本項で説明することとする。なお、遺構の組合せやその変遷については次章に譲る。

掘立柱建物

S B 1 (Fig 41)

S B 1は調査区の中央部S D 11の東側に位置する総柱建物である。建物は桁行3間(4.92m)×梁間2間(4.23m)の東西棟で、棟方向はN-83.0°-Wであり、面積は20.81m²を測る。柱穴の平面プランは隅丸方形及び円形を呈し、直径47.0~90.0cmを測り、柱痕径は直径21.0~42.0cmである。これらの柱穴の検出面からの深さは10.0~55.0cmを測る。柱間距離は桁行1.52~1.72m、梁間2.07~2.11mとなっている。埋土は黒色土(黒ボクに1~4cmの礫混り)単純一層である。

出土遺物

弥生土器片が各柱穴から多く出土した。又、P 6の掘方の埋土から内面に青海波文の叩目を持つ須恵器壺破片が出土したが時期決定の決め手とはならない。

S B 2 (Fig 42)

S B 2は調査区の中央部S B 1の南側に位置する総柱建物と考えられる。南西部は調査区外に出る。桁行3間(5.48m)×梁間2間(4.49m)の東西棟で、棟方向はN-84.8°-Wであり、面積は24.61m²を測る。柱穴の平面プランは隅丸方形及び円形を呈し、直径47.0~80.0cmを測り、柱痕径は約25.0cmである。これらの柱穴の検出面からの深さは22.0~43.0cmを測る。柱間距離は桁行1.70~1.98m、梁間2.2~2.25mとなっている。埋土は黒色土単純一層である。

出土遺物

弥生土器片及び土師器片が出土したが図示できるものではない。

S B 3 (Fig 43)

S B 3は調査区の中央部S B 1の北側に位置する建物である。建物は桁行2間(3.67m)×梁間2間(3.49m)のはば正方形に近い東西棟である。棟方向はN-86.0°-Wであり、面積は12.81m²を測る。柱穴の平面プランは円形及び稍円形を呈し、直径45.0~64.0cmを測る。これらの柱穴の検出面からの深さは14.0~34.0cmを測る。柱間距離は桁行1.6~1.97m、梁間1.5~1.98mとなっている。なお、北側は中央の柱穴が西側に寄っており、出入口の可能性を残す。又、S T 3を切っている。埋土は黒色土(黒ボク)単純一層である。

出土遺物

弥生土器片が出土しているが図示できるものではない。

S B 4 (Fig 43)

調査区の西部に位置する。桁行3間(6.42m)×梁間2間(4.23m)の南北棟で、棟方向は

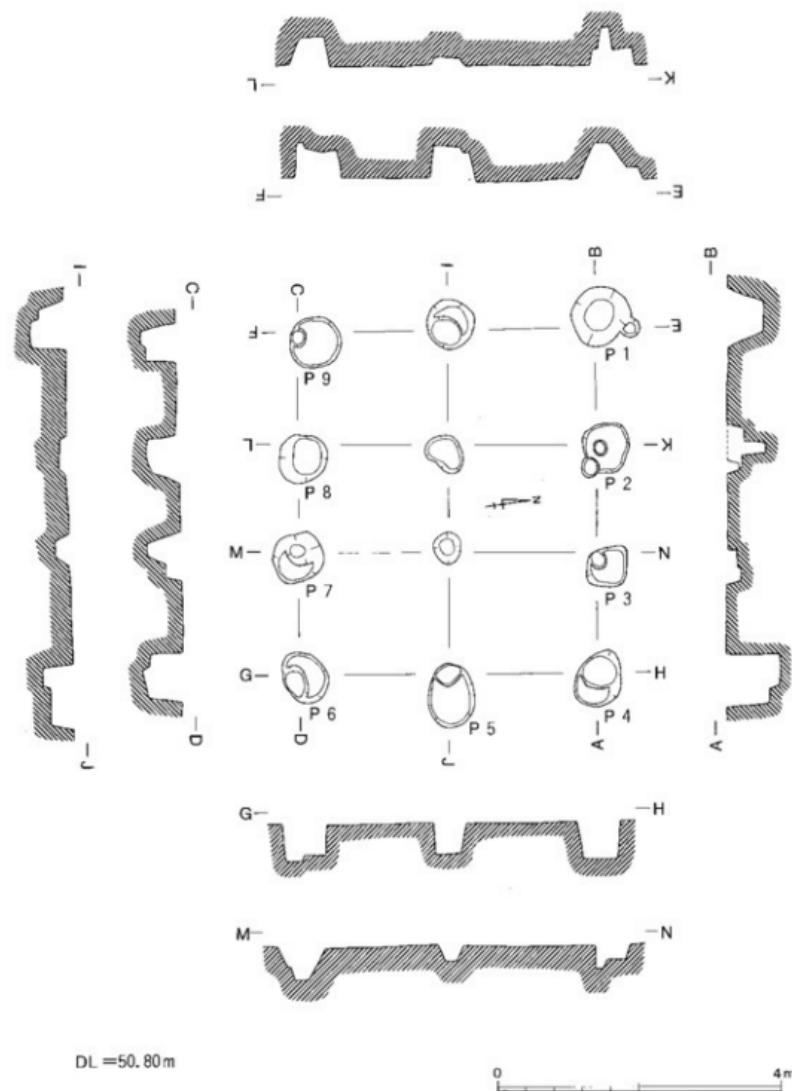
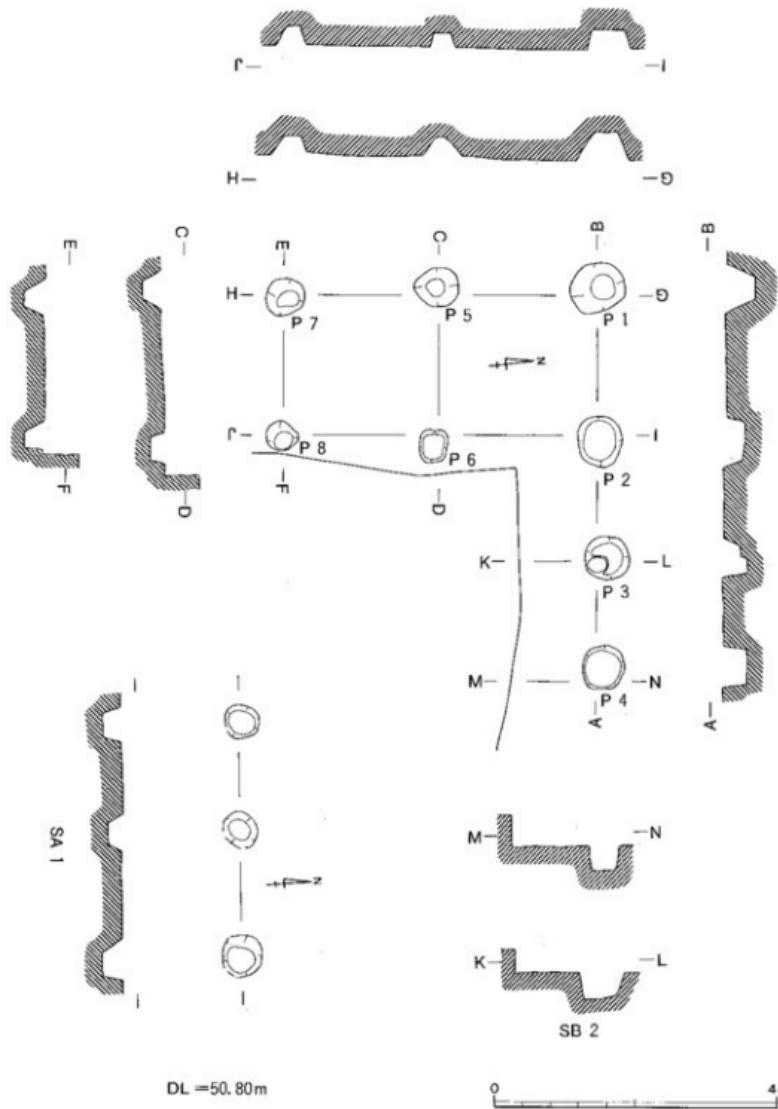


Fig 41 SB 1 実測図



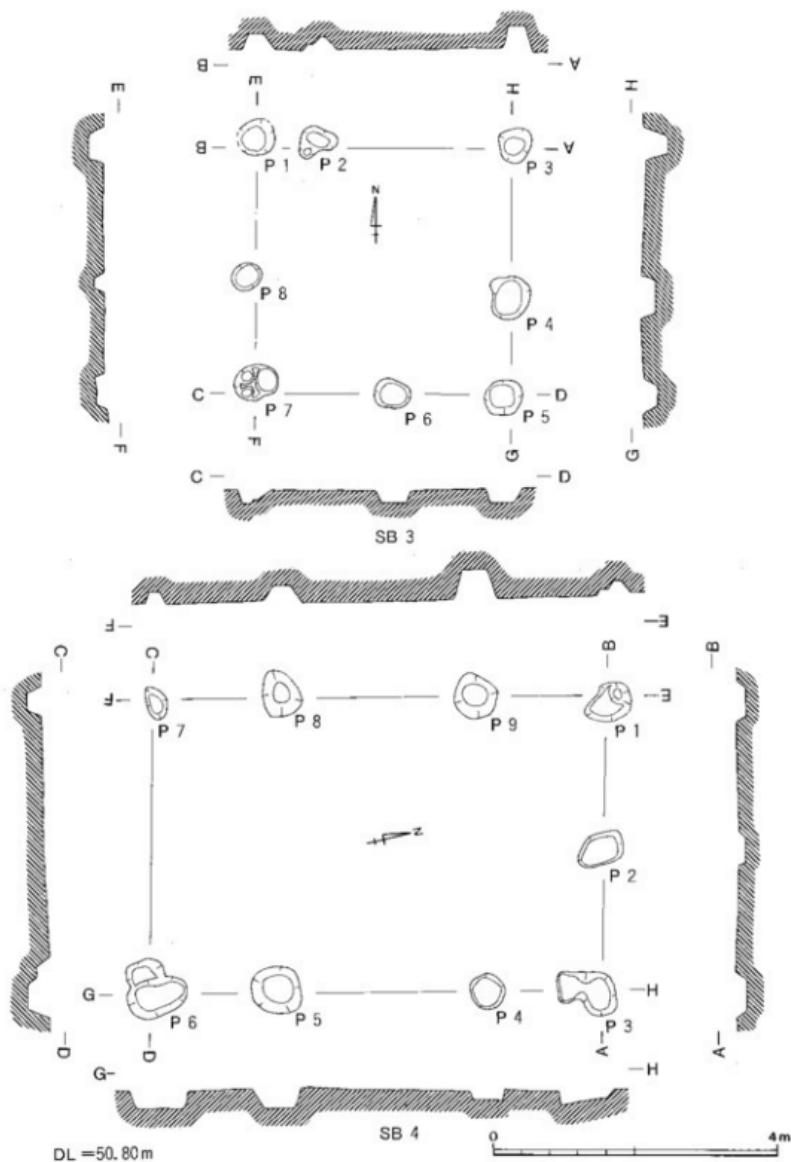


Fig 43 SB 3・4 実測図

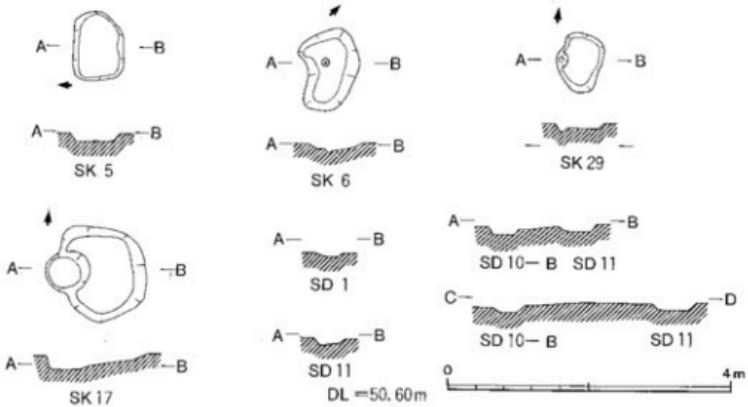


Fig 44 SK 5・6・17・29, SD 1・10-B・11実測図

N-12.8°-E であり、面積は27.16m²を測る。柱穴の平面プランは隅丸方形及び円形・楕円形を呈す。直径50.0~89.0cm、検出面からの深さは8.0~43.0cmを測る。柱間距離は桁行1.82~2.62m、梁調2.16等間となっている。建物の南面中央の柱穴は確認できなかった。埋土は灰黒色土単純一層である。なお、S T 3 を切り、SD 10-B に切られる又、SD 11と重複するが出土遺物から、SD 11が先行する。SE 1と同時期と考えられる。

出土遺物

弥生土器片、土師器裏片・杯片が出土地してあるが図示することはできない。

土坑

SK 5 (Fig 44)

調査区の西側寄りの北端部SK 16の北側に位置し、平面プランは隅丸方形を呈す。長径0.98m 短径0.72m、検出面からの深さ12.0cmを測り、断面は逆台形を呈し、床面は水平な面をなす。壁は急傾斜で立ちあがり、長軸方向はN-88.5°-Eである。埋土は暗灰黑色土単純一層である。

出土遺物

弥生土器片、土師器片、須恵器片が少量出土しているが図示できるものではない。

SK 6 (Fig 44)

中央より僅かに西側、ST 3 の東側に位置し、平面プランは不整形を呈す。長径1.17m、短径0.75m、検出面からの深さは8.0~10.0cmを測り、断面は舟底状を呈す。床面は南側が僅かに高い段状を呈す。ほぼ中央に直径7.0cm、深さ7.0cmを測る柱穴があり、SK 6 に伴うものと考えられる。長軸方向はN-44.0°-Wである。埋土は暗灰黑色土単純一層である。

出土遺物

弥生土器片、土師器壺、輪高台付椀等が出土しているが図示できるものではない。S E 1とほぼ同時期と考えられる。

S K17 (Fig 44)

中央部の北側、S T 7 の北側に位置し、平面プランは楕円形を呈す。長径1.32m、短径1.15m、検出面からの深さは7.0~20.0cmを測り、断面は逆台形を呈す。床面は僅かに東側が下る。壁は急傾斜で立ちあがり、長軸方向はN-45.0°-Wである。埋土は暗灰茶色土単純一層である。なお、西側の柱穴に切られる。

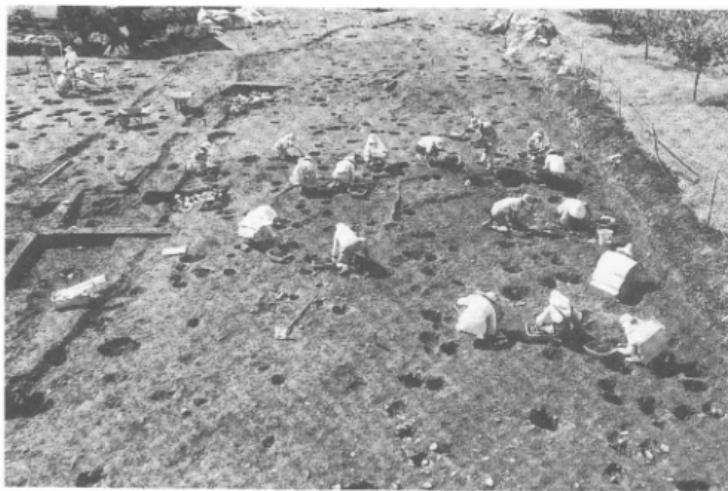
出土遺物

弥生土器片、土師器皿、杯、壺、須恵器があるが図示できるものではない。なお、土師器皿、杯の底部外面はヘラ切りであり S E 1 とほぼ同時期と考えられる。

S K29 (Fig 44)

調査区の東部中央、S K 30の北側に位置し、平面プランは不整形を呈す。長径0.87m、短径0.60m、検出面からの深さは7.0cmを測る。断面形は逆台形を呈す。床面は水平な面をなす。壁は急傾斜で立ちあがる。長軸方向はN-20.2°-Wである。埋土は暗灰黒色土単純一層である。なお、西側は中世の柱穴に切られる。

出土遺物は無かった。



作業風景

井戸

SE 1 (Fig 45)

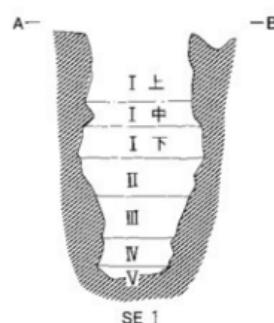
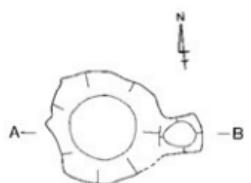
調査区の西部に位置する素掘りの井戸である。平面プランは円形を呈す。直径1.50～1.75m、検出面からの深さは3.45m、床面の直径は0.68mを測る。井戸は中位で膨れ、検出面下1.75mで最大径1.80mを測る。これは満水時の水位を示すと考えられ、壁の砂礫層が浸食された結果と考えられる。埋土はI～V層であるが、I層は1.75mまでの厚さを測り、上部（検出面下0.9mまで）中部（検出面下0.9～1.30m）下部（検出面下1.30～1.75m）に分けて遺物を検出した。I層：黒色土（人頭大の礫混り）II層：灰黑色粘質土（人頭大の礫混り）III層：砂礫土、IV層：暗灰黑色粘質土（砂礫及び黒色土混り）、V層：暗灰茶色砂礫土である。III層の埋土は膨らんだ甌と同様のもので浸食により崩れて埋まり、井戸としての機能を果たさなくなり、その後は廃棄し土器溜りとして利用された可能性が強い。

出土遺物

出土遺物は多量で良好な一括資料を得た。大半はI層からの出土であるが、中でもI層の上層からのものが多いが、黒色土器椀、土師器皿・杯・椀・甌・羽釜・移動式甌・釜据、須恵器椀・片口鉢、刻書土器、鉄器、石製鍛錘車、砥石、土鍤等400点近い遺物が出土した。

I層上出土遺物 (Fig 46-211～237・Fig 47-238～261・Fig 48-262～282・Fig 49-283～289、305～307・Fig 50-290・291・303・304・Fig 51-292～299・Fig 52-300～302)

黒色土器は合計48個が出土し、中には2～3個が重なって出土したものもあるが、すべて貼付輪高台を有するいわゆるAタイプのものであ



- I層：黒色土層（人頭大の礫混り）
II層：灰黑色粘質土層（人頭大の礫混り）
III層：砂礫層
IV層：暗灰黑色粘質土層（砂礫黒ボク混り）
V層：暗灰茶色砂礫土層

DL = 50.60m



Fig 45 SE 1 実測図

る。このS E 1から出土した黒色土器はその手法によって大きく3種にわけることができる。すなわち口縁端部内面に1条のヘラ削りを巡らすもの(212・213・219・226)。口縁部内面から体部上端内面にかけて1~3条のヘラ磨きを巡らすもの(217・221~223・230・231)。単位がわからないほど内面を丁寧にヘラ磨きを施したもの(214・216・218・220・224・227~229)がある。又、暗文を有するものとそうでないものとがある。232は土師器蓋である。環状の摘みを有す。233~236は土師器台付皿である。平底の外周の内側に足高の「ハ」の字状に大きく開く脚を有する。237は土師器脚付皿で、3脚は欠損する。238~244は土師器皿で完形が多い。底部外面は回転ヘラ切り。245~268は土師器杯であるが、247・249・259・266は完形で、263~265はI層の上部・中部・下部出土のものを接合したものである。268~273・279はベタ高台を有する土師器柄である。268・269は杯と椀の中間型とも言えるもので、底部外面は回転ヘラ切りである。又、270の底部外面も回転ヘラ切りである。他の椀の底部外面は回転糸切りである。274~278・280~282はベタ高台を有する須恵器碗である。底部外面は回転糸切りである。283~285は貼付輪高台付土師器椀である。285は体部内面に型板痕を認め、口縁端部内面に1条の軽い沈線を巡らす。286・287は貼付輪高台付須恵器椀である。287は口縁端部内面に1条の沈線を巡らす。体部内面ヘラ磨き、口縁部内面横方向のヘラ磨きを施す。288は須恵器片口鉢である。平底から内湾して立ちあがり、口縁部は僅かに外反する。口縁端部は外傾して口唇部は面をなし軽い沈線が巡る。口縁部に指頭による片口を設ける。水で約2升の容量を持つ。289~291は土師器壺である。291は口縁部内面は横方向のハケ調整を施し、「大」と思われる刻字を施す。292~297は羽釜である。鍔を有す。298は釜鋸である。直線的に立ちあがり、口縁部は「く」の字状に外反して端部は上方に僅かに肥厚する。299~302は移動式壺である。300の鍔は胴部に綫方向に延び胴部上端で屈曲して、中央で僅かに下方に緩やかなカーブを描いて延びる。303は壺である。胴部外面に三文字を認めるが中央は「木」又は「ホ」と思われる刻字を施す。304は砥石で一面のみを使用する。305は石製紡錘車で断面は台形状を呈す。306・307は土鍔で紡錘形を呈す。又、古代モモの種子2個が出土した。

I層中出土遺物 (Fig 47-308~312, Fig 48-313・314)

308は土師器皿である。底部外面は回転ヘラ切りである。309~313は土師器杯であるが、平底から外反、あるいは直線的に立ちあがる。底部外面はすべて回転ヘラ切りである。314は土師器椀である。底部外面中央が僅かに凹むベタ高台から内湾気味に立ちあがり、口縁部は僅かに外反する。

I層下出土遺物 (Fig 46-315, Fig 47-316~320, Fig 49-321~326, Fig 50-329・330, Fig 51-327・328)

315は足高貼付輪台付土師器椀である。体部は内・外面共口クロ目が顕著である。316・317は土師器皿である。316は完形で底部外面は回転ヘラ切り。317はベタ高台気味の底部から斜上外方に直線的に立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。底部外面は回転糸切りである。土師器皿

で唯一の回転糸切りである。318～320は土師器杯である。321～323は須恵器杯である。322は、内・外側共に火摺を認める。324～325は土師器椀である。ベタ高台から内湾気味に立ちあがる。底部外面は回転糸切りである。326は貼付輪高台付土師器椀である。底部内面に丹が残る。327は土師器羽釜である。328・329は土師器甕である。330は鉄器である。楕円形の環から4.3cm延び屈曲する。馬具と思われる。

II層出土遺物

土師器及び須恵器の細片が僅かに出土したが図示できるものはない。

III層出土遺物 (Fig 49-331)

331は貼付高台付椀である。T層下の破片と接合できた。体部は平底から稜をもって斜上外方に直線的に立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。

IV層出土遺物 (Fig 47-332)

黒色土器片、土師器片、土師器皿(332)が出土した。332は中央が僅かに凹んだ平底から外反気味に立ちあがり口縁部は僅かに外反する。底部外面は回転ヘラ切りである。胎土は水簾を行い搬入品と思われる。

V層出土遺物 (Fig 49-333)

黒色土器碗片、土師器甕片があるが、図示できたのは床面直上から出土した須恵器碗(333)のみである。ベタ高台から内湾気味に立ちあがり口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。底部外面は回転糸切りである。

溝

S D 1 (Fig 44)

調査区の西南端部に位置する。N-17.5°-Eで1.76mで南北方向に延び、南端は調査区外に出る。幅0.40-0.68m、検出面からの深さは6.0cm、床面の北端の標高は50.34m、南端の標高は50.33mを測り、標高差はほとんどみられない。断面は逆台形を呈す。埋土は暗灰色粘質土単純一層である。なお、S K 2、S K 11に切られる。

出土遺物 (Fig 52-334)

埋土から土師器椀(334)が出土している。ベタ高台気味の平底から内湾して立ちあがる。底部外面は回転糸切りである。

S D 10-B (Fig 44)

調査区の西部に位置する。南北両端は削平のため検出できない。S T 3の北側からS B 10-Aとほぼ平行に東側をN-6.5°-Wで南下する。全長17.8m、幅35.0-40.0cm、検出面からの深さは7.0-10.0cm、床面の北端の標高50.47m、南端の標高50.46mを測り、標高差はほとんどみられない。なお、S T 3、S B 4を切り、S D 10-Aを切る。出土遺物からS E 1とほぼ同時期と考えられる。

出土遺物

弥生土器片、土師器楕片、羽釜片等が出土しているが図示できるものではない。

S D 11 (Fig 44)

調査区西部に位置し、S T 3 の北側から S D 10-B と S B 1~3 の間を N-6.0°-E で南へ 26.35m 延びる。南・北両端部は検出できなかったが削平の結果と考えられる。S T 3 の南側で最大幅を認めるがやや西に曲るためであろう。幅 0.31~1.25m、検出面からの深さは 8.0~11.0cm、床面の北端の標高は 50.41m、南端の標高は 50.47m を測る。断面は逆台形を呈す。埋土は暗灰色粘質土單純一層である。なお、S T 3 を切り、S B 4 と重複関係にあるが出土遺物から S D 11 が古い。

出土遺物 (Fig 52-335・336)

埋土中より土師器杯 (336) 須恵器杯 (335) が出土している。336 は、底部外面不定方向のヘラ削りを丁寧に施す。

構列

S A 1 (Fig 42)

調査区の中央部、S B 3 の北側の柱筋に平行して位置する。規模は 2 間 (3.42m) の東西方向で長軸方向は N-85.5°-W である。柱穴の平面プランは円形を呈し、直径 49.0~60.0cm である。これらの柱穴の検出面からの深さは 20.0~29.0cm である。柱間距離は 1.71m 等間である。埋土は黒色土單純一層である。

出土遺物は、弥生土器片、土師器片があるがいずれも細片で図示することはできない。

柱穴

P 116 (Fig 63)

調査区の西端部、S K 3 の南側に位置する。平面プランは円形を呈す、直径 30.0cm、検出面からの深さ 14.80cm を測る。埋土は暗灰黑色土單純一層である。

出土遺物 (Fig 52-343)

須恵器杯片と鉄製釣針 (343) が出土している。釣針は扁平な棒軸からひねりをもって釣部を作り先端部に及ぶ。

P 500 (Fig 63)

調査区の西部、S B 3 の南側に位置する。平面プランは円形を呈す。直径 27.0cm、検出面からの深さは 19.6cm を測る。埋土は暗灰黑色土單純一層である。

出土遺物 (Fig 52-342)

須恵器楕 (342) が単独で出土した。ベタ高台から内湾気味に立ちあがり、口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。体部外面はロクロ目顯著、底部外面は回転糸切りである。

P 586 (Fig 63)

調査区の北西部、S B 4 の東側に位置する。平面プランは不整形を呈す。直径 23.0cm、検出面からの深さは 9.4cm を測る。埋土は暗灰黑色土單純一層である。

出土遺物 (Fig 52-337)

土師器皿 (337) が出土した。平底から斜上外方に直線的に立ちあがり、口縁部は僅かに外反する。

P 588 (Fig 63)

調査区の西北部、S K 13の南西側に位置する。平面プランは不整形を呈す。直径45.0cm、検出面からの深さは14.8cmを測る。埋土は暗灰黒色土單純一層である。

出土遺物 (Fig 52, 340)

土師器杯 (340) が出土した。平底から斜上外方に直線的に立ちあがる。底部外面は回転系切り。

P 591 (Fig 63)

調査区の西部、S T 3の東側に位置する。平面プランは梢円形を呈す。直径42.0cm、検出面からの深さは31.4cmを測る。埋土は暗灰黒色土單純一層である。

出土遺物 (Fig 52, 341)

弥生土器片、土師器片の他黒色土器皿 (341) が出土している。黒色土器皿は、いわゆる A タイプで、断面逆三角形の貼付高台を有す。平底から内湾して立ちあがる。

P 683 (Fig 63)

調査区の西北部、S K 12の南側に位置する。平面プランは梢円形を呈す。長径53.0cm、短径43.0cm、検出面からの深さは12.0cmを測る。埋土は暗灰黒色土單純一層である。

出土遺物 (Fig 52, 338)

弥生土器片、土師器皿 (338)、杯が出土している。土師器皿 (338) は平底状の底部から僅かに外反して立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。底部外面ヘラ切り。

P 1649 (Fig 63)

調査区の東部、S T 10の西北側に位置する。平面プランは円形を呈す。直径28.0cm、検出面からの深さは12.3cmを測る。埋土は暗灰黒色土單純一層である。

出土遺物 (Fig 52, 339)

土師器杯 (339) が出土した。平底から内湾気味に立ちあがり口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。



B 区 の 調 査

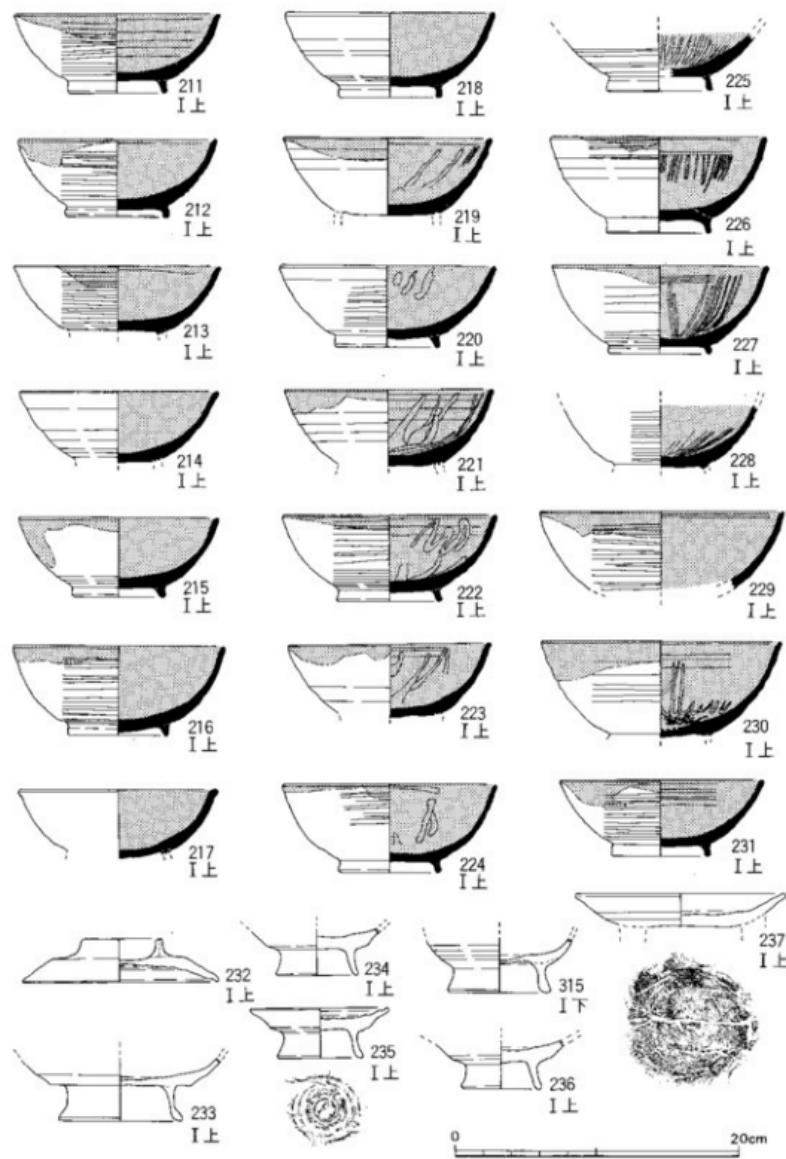


Fig 46 SE 1 出土遺物

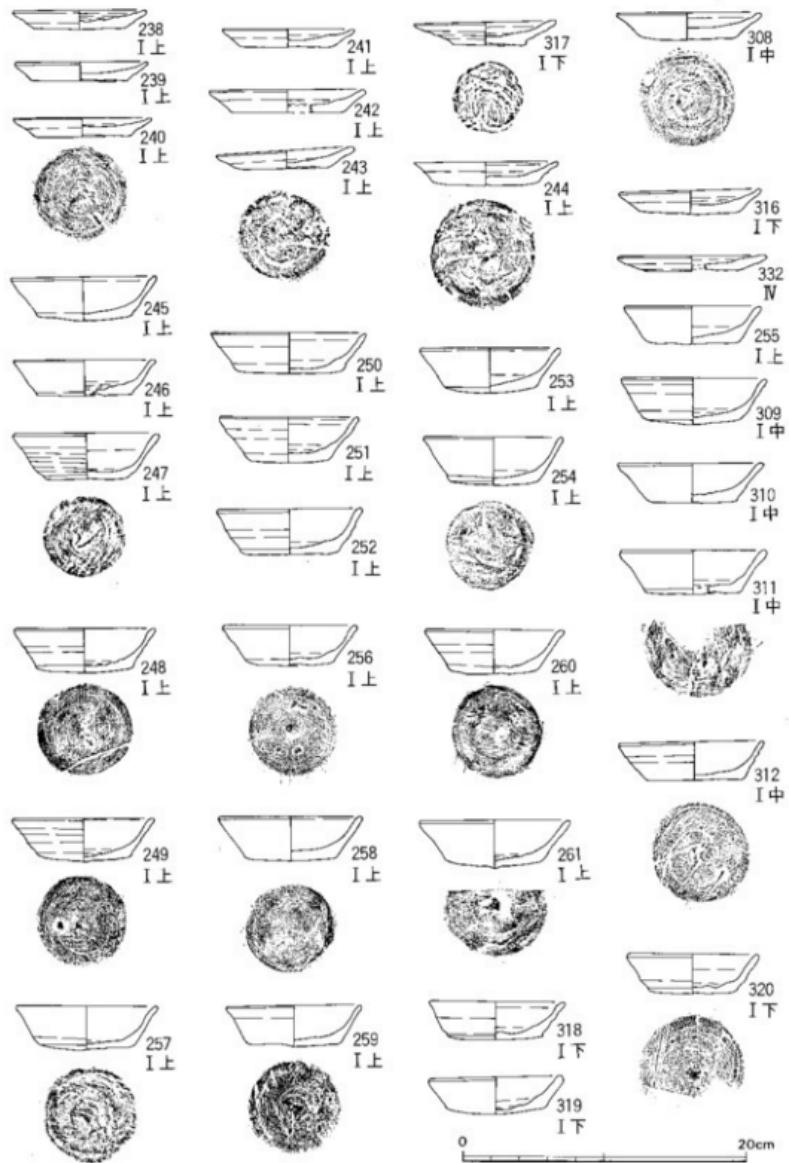


Fig 47 SE 1 出土遺物

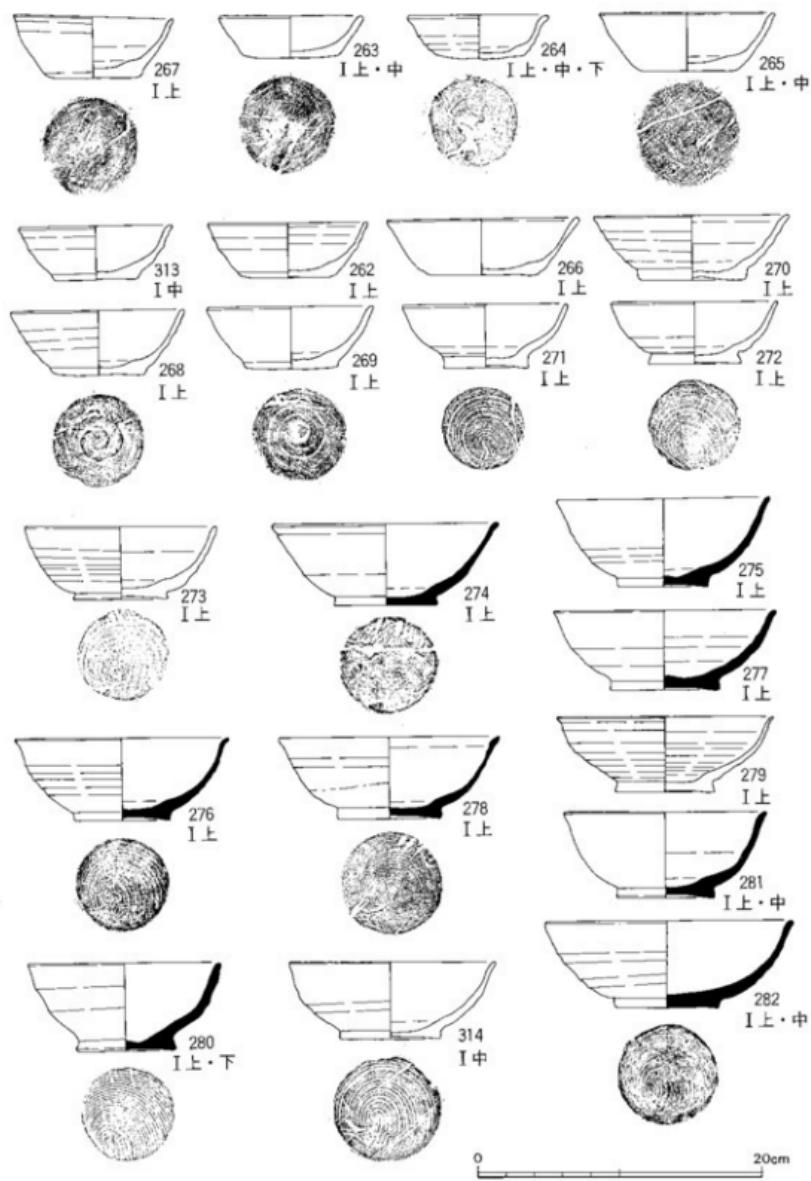


Fig 48 SE 1 出土遺物

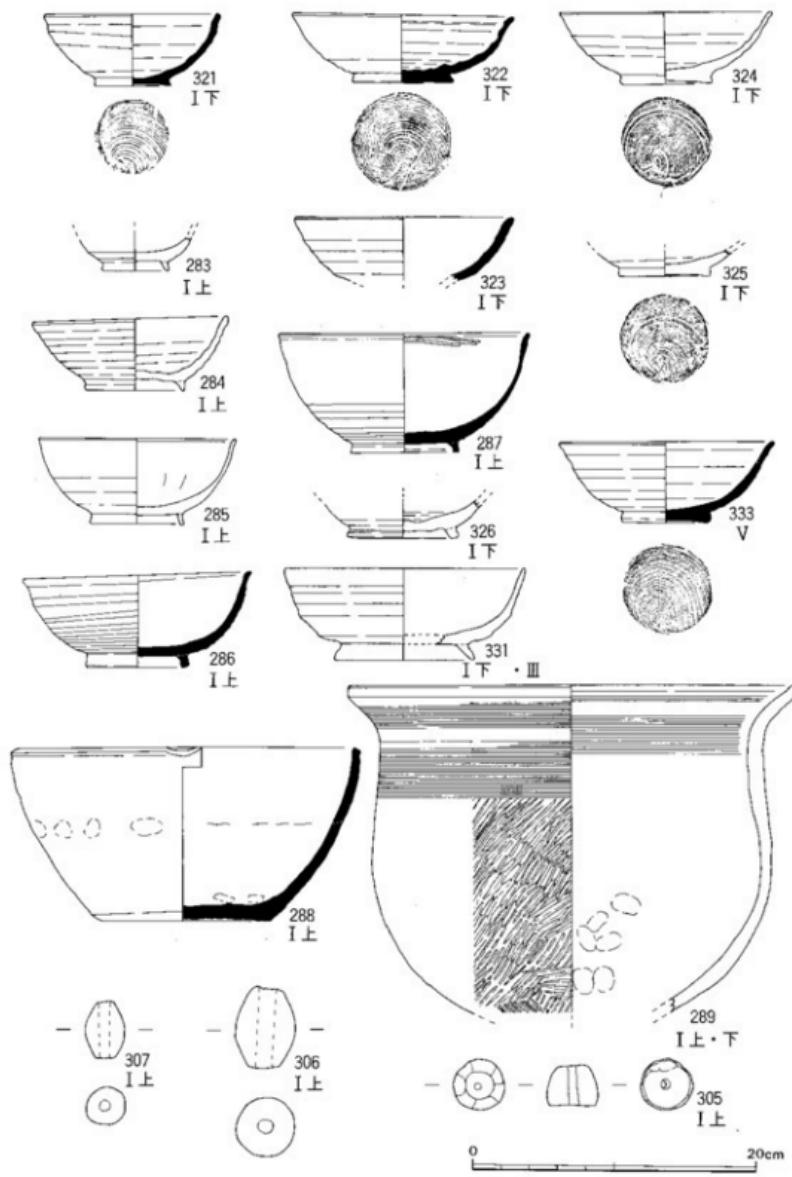


Fig 49 SE 1 出土遺物

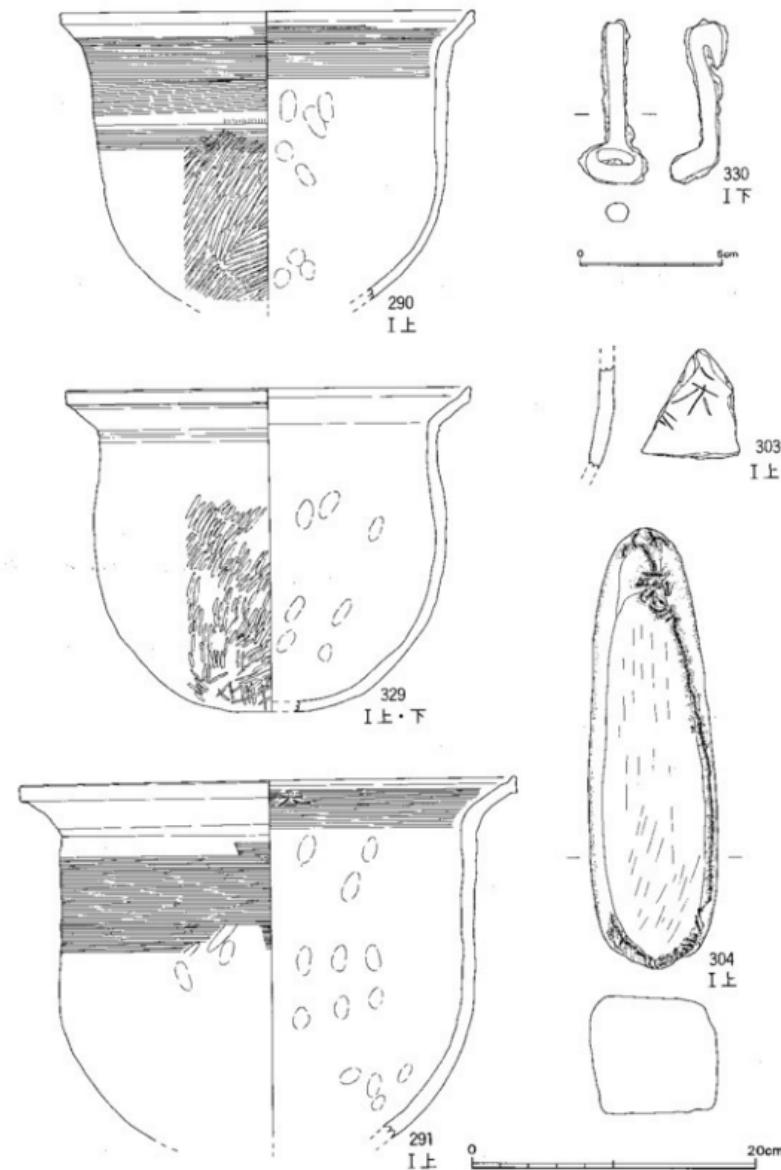


Fig 50 SE 1 出土遺物

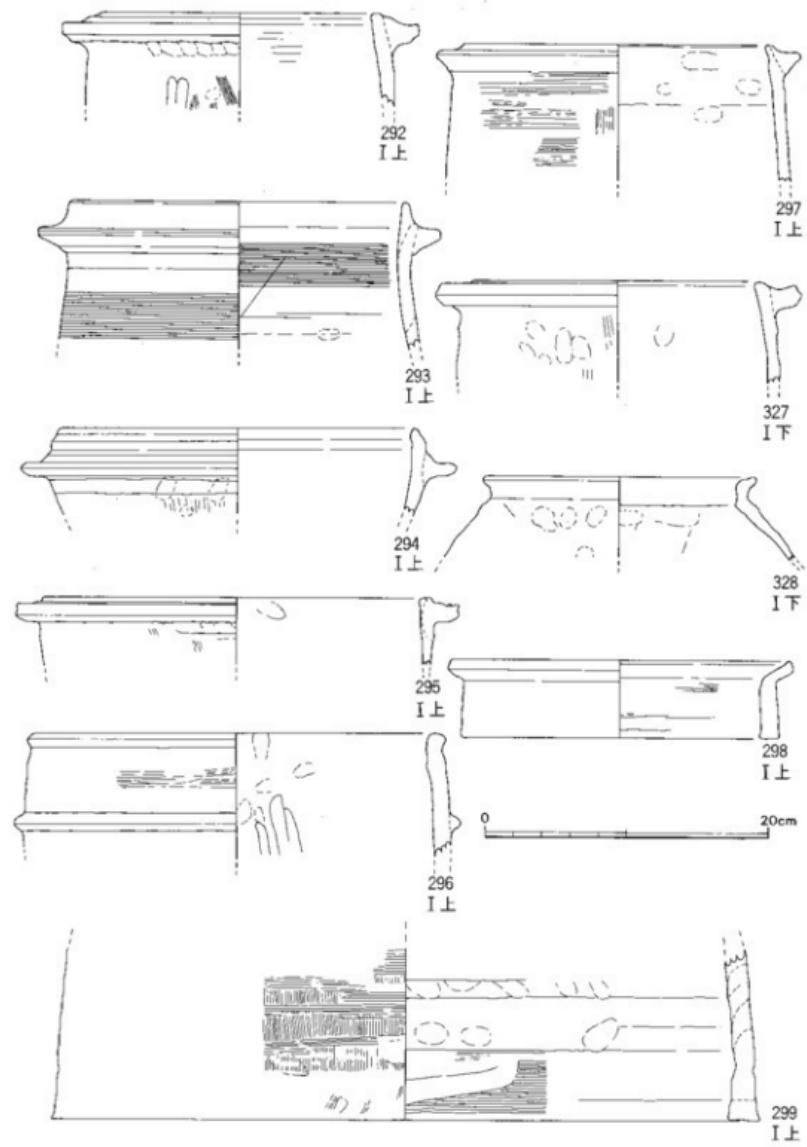


Fig 51 SE 1 出土遺物

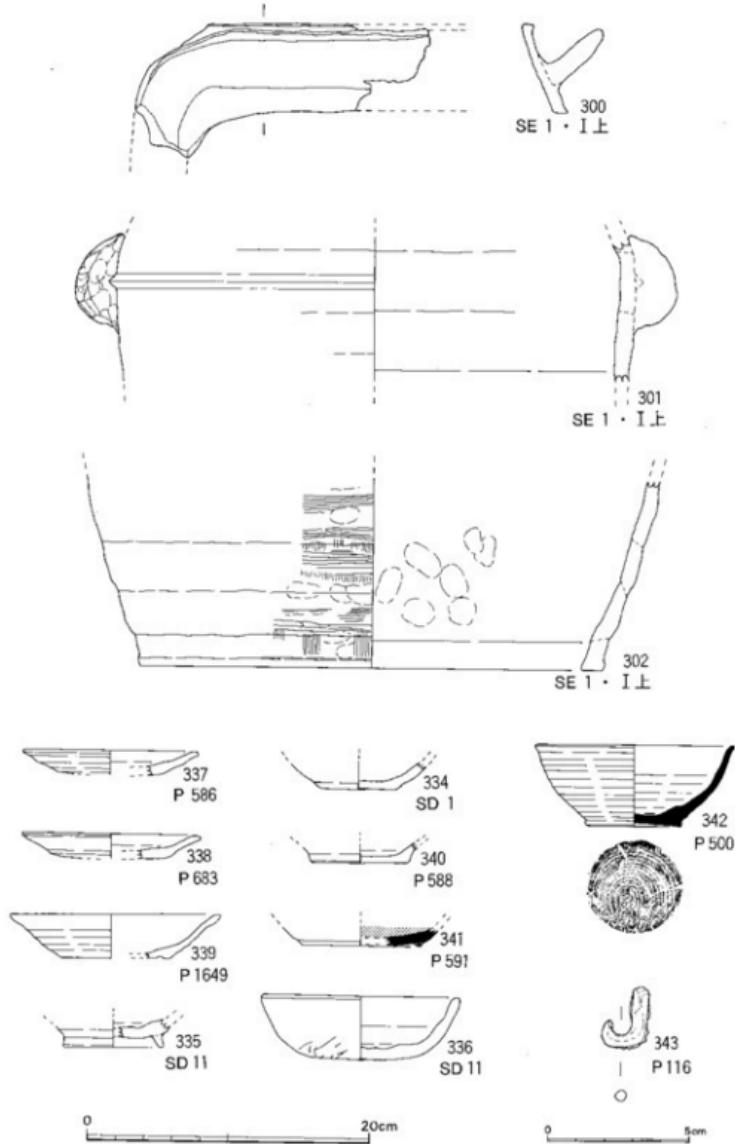


Fig 52 SE 1, SD, P 出土遺物

4. 中世～近世

中世～近世の遺構としては掘立柱建物8棟、土坑14基、溝10条、柱穴多数を検出した。以下各遺構とその出土した遺物の概要を述べることにする。

掘立柱建物

S B 5 (Fig 53)

調査区の西北端部に位置する。建物は桁行1間(4.06m)×梁間2間(3.79m)の東西棟で、棟方向はN-66.7°-Wであり、面積は15.39m²を測る。桁行の中間の柱穴は削平のため欠損したと考えられる。柱穴の平面プランは円形及び梢円形を呈し、直径22.0～79.0cmである。これらの柱穴の検出面からの深さは4.0～24.0cmを測る。柱間距離は桁行4.06m、梁間1.87～1.92mとなっている。埋土は暗茶灰色土單純一層である。なお、S D10-Aを切る。

出土遺物

弥生土器片、土師器片があるが図示できない。

S B 6 (Fig 54)

調査区の中央南部、S B 1の東側に位置する。建物は桁行3間(6.26m)×梁間3間(5.48m)の東西棟で、棟方向はN-79.1°-Wであり、面積は34.30m²を測る。柱穴の平面プランは円形及び不整形を呈し、直径35.0～57.0cmである。これらの柱穴の検出面からの深さは15.0～26.0cmを測る。柱間距離は桁行1.86～2.52m、梁間1.05～2.52mとなっている。なお、P 9は、S T 2-P 1と重複すると考えられる。埋土は暗茶灰色土單純一層である。S T 2と重複するが出土遺物からS B 6が新出のものであることは明確である。出土遺物から15世紀後半と考えられる。

出土遺物

弥生土器片、土師器皿片等が出土しているが図示できるものではない。

S B 7 (Fig 53)

調査区の中央南部より僅かに東側に位置する。建物は桁行1間(3.52m)×梁間2間(2.42m)の東西棟で、棟方向はN-90.0°-Wであり、面積は8.52m²を測る。柱穴の平面プランは円形及び不整形を呈し、直径30.0～60.0cmである。これらの柱穴の検出面からの深さは10.0～25.0cmを測る。柱間距離は桁行3.52m、梁間1.05～1.36mとなっている。埋土は暗茶灰色土單純一層である。

出土遺物

弥生土器片、土師器杯片が出土しているが図示できるものではない。

S B 8 (Fig 55)

調査区の東部、S T 7の東側に位置する。建物は桁行2間(6.95m)×梁間3間(6.16m)の東西棟で、棟方向はN-79.0°-Eであり、面積は42.81m²を測る。柱穴の平面プランは円形及び梢円形を呈し、直径33.0～54.0cmである。これらの柱穴の検出面からの深さは4.0～37.0cm

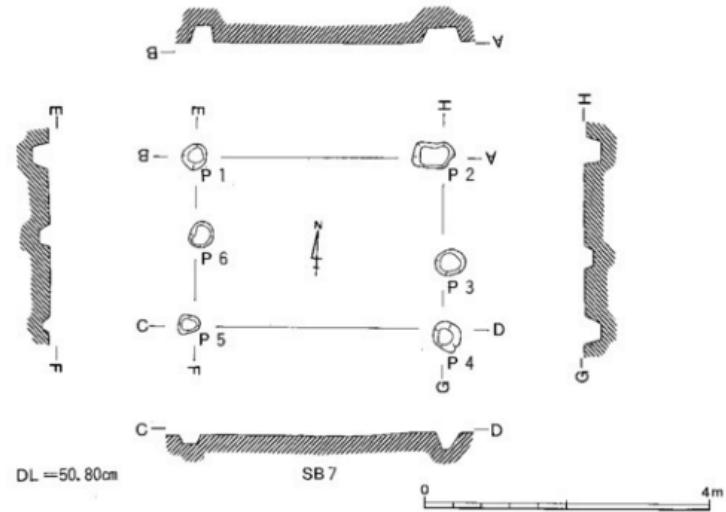
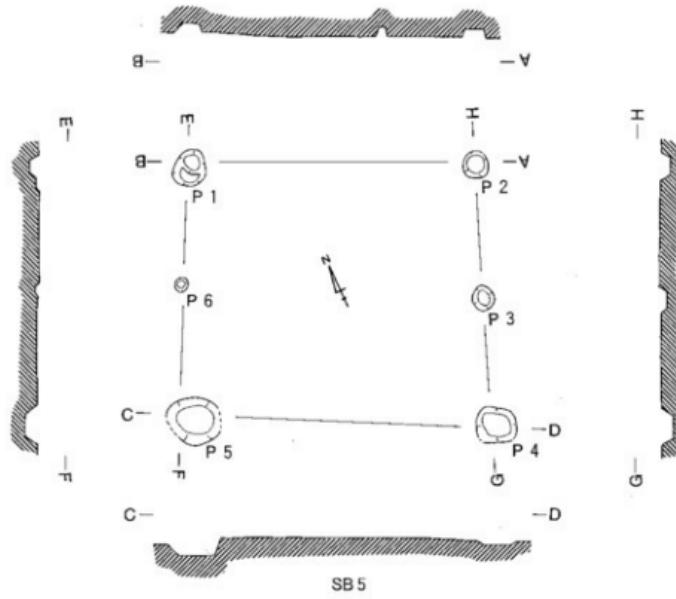


Fig 53 SB 5 + 7 実測図

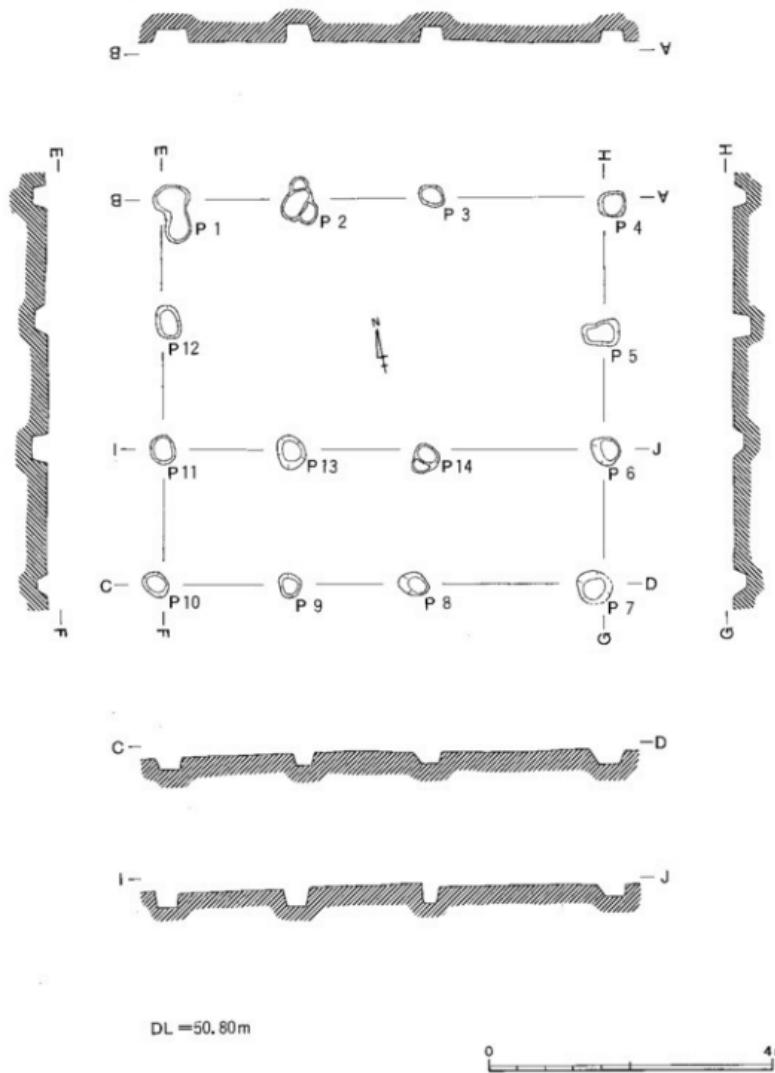


Fig 54 SB 6 実測図

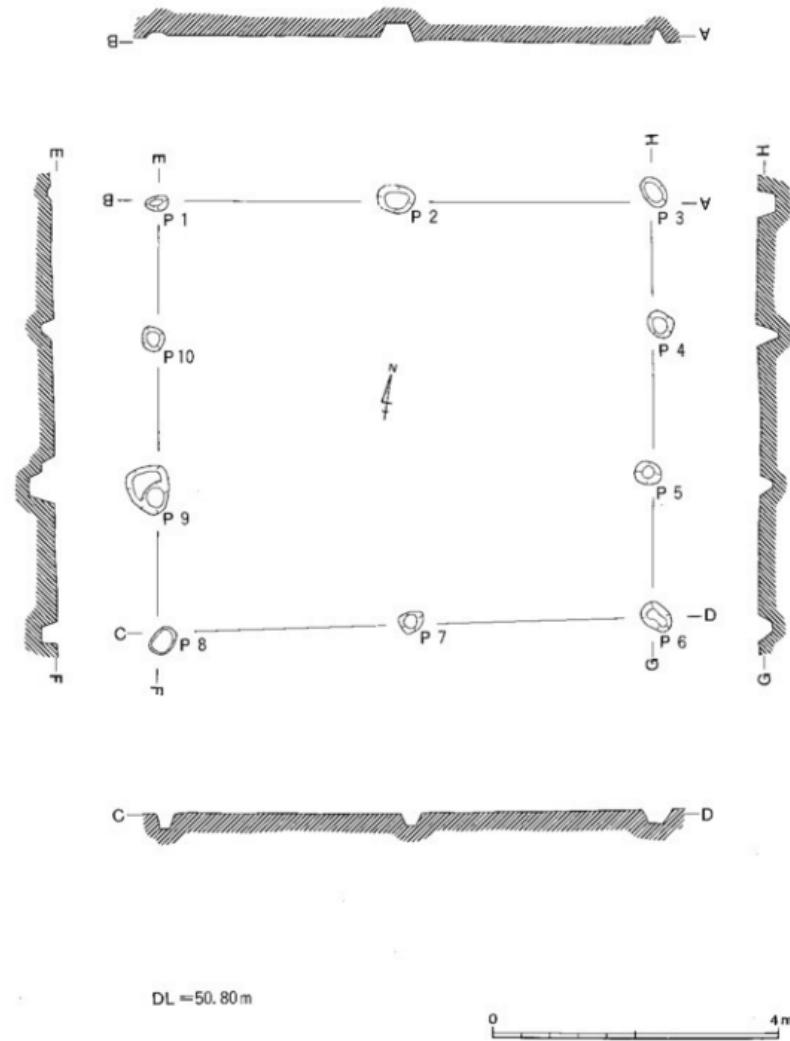


Fig. 55 SB 8 実測図

を測る。柱間距離は桁行3.46～3.49m、梁間1.75～2.06mとなっている。埋土は暗茶灰色土及び灰黒色土の単純一層である。なお、S B 9、SK 25と重複するが先後関係は不明である。又、SD 18を切る。

出土遺物

土師器片、須恵器片、瓦質土器鍋片が出土しているが図示できるものではない。

S B 9 (Fig 56)

調査区の東部に位置する。建物は桁行3間(6.1m)×梁間3間(5.78m)の南北棟で、棟方向はN-7.0°-Wであり、面積は35.26m²を測る。柱穴の平面プランは円形及び稍円形を呈し、直径30.0～62.0cmである。これらの柱穴の検出面からの深さは8.0～35.0cmを測る。柱間距離は桁行1.70～2.44m、梁間1.12～2.01mとなっている。埋土は暗茶灰色土及び灰黒色土の単純一層である。なお、ST 9、SK 22(壺墓5)、SD 19を切り、SB 8、SB 10、SB 11と重複するが先後関係は不明である。出土遺物から15世紀と考えられる。

出土遺物 (Fig 61, 344・Fig 62, 345)

瓦質土器片、土師器皿(344)がP 11から、鉄器釘(345)はP 1から、同じく鉄器釘(356)はP 4から出土した。土師器皿(344)は、内湾気味に立ちあがり、口縁部は僅かに外反し口唇部は丸くおさめる。体部は内・外面共横ナデ調整を施す。体部外面に指頭圧痕を認める。

S B 10 (Fig 57)

調査区の東部に位置する。建物は桁行3間(5.90m)×梁間3間(5.40m)の東西棟で、棟方向はN-56.0°-Wであり、面積は31.86m²を測る。柱穴の平面プランは円形及び稍円形を呈し、直径27.0～39.0cmである。これらの柱穴の検出面からの深さは6.0～32.0cmを測る。柱間距離は桁行0.7～2.8m、梁間1.23～2.72mとなっている。埋土は暗茶灰色土単純一層である。なお、ST 9、SK 31、SD 19を切り、SB 9、SB 11、SK 29と重複するが、SB 9との先後関係は不明であるがSK 29は埋土からSB 10が新しいと思われる。又、SB 11は古い。

出土遺物

弥生土器片、土師器片が出土しているが図示できるものではない。

S B 11 (Fig 58)

調査区の東部に位置する。建物は桁行4間(7.05m)×梁間4間(6.43m)の南北棟で、棟方向はN-33.8°-Eであり、面積は45.33m²を測る。柱穴の平面プランは円形及び稍円形を呈し、直径25.0～55.0cmである。これらの柱穴の検出面からの深さは6.0～32.0cmを測る。柱間距離は桁行1.44～3.70m、梁間1.2～1.86mとなっている。埋土は暗茶灰色土単純一層である。なお、ST 9、SD 19を切る。SK 29、SK 30、SK 34、SB 9、SB 10と重複するが、SB 9との先後関係は不明であるが、SB 10は新しく、SK 29、SK 30、SK 34は古い。出土遺物から15世紀と考えられる。

出土遺物 (Fig 61, 346)

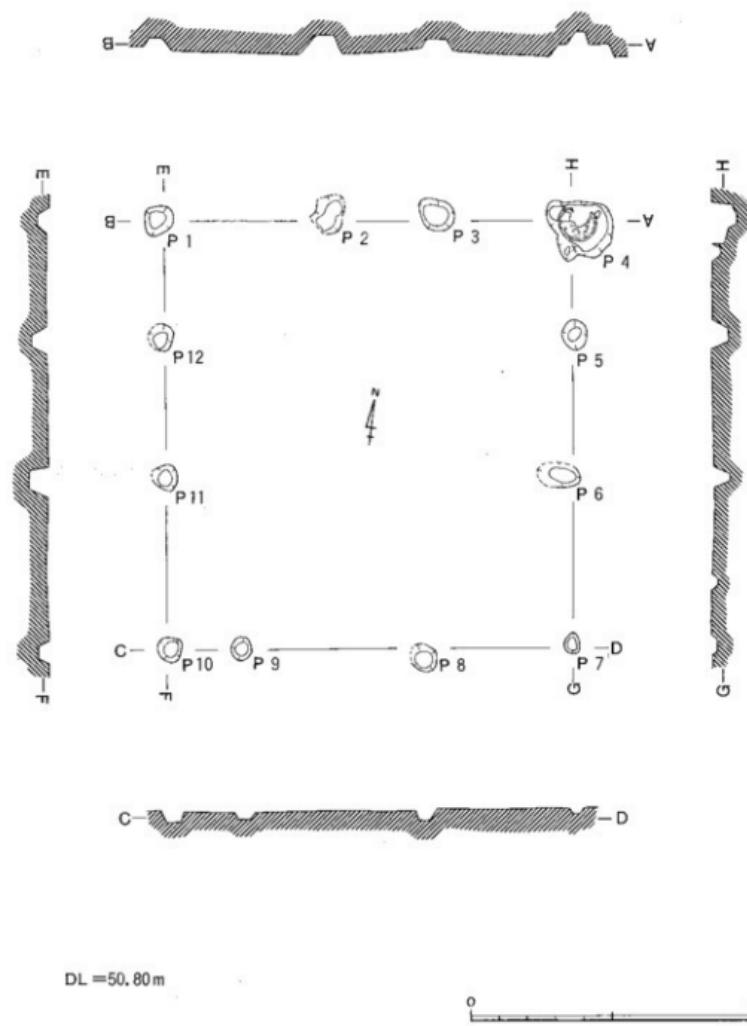


Fig 56 SB 9 実測図

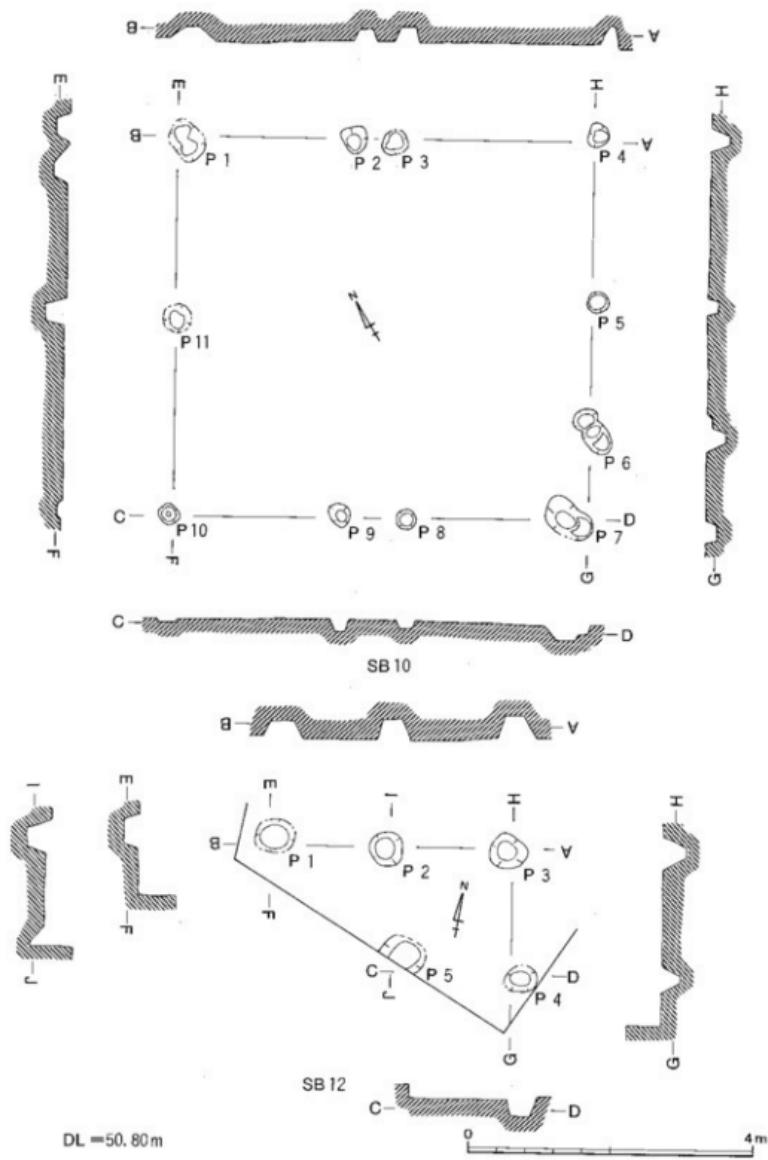


Fig 57 SB 10・12実測図

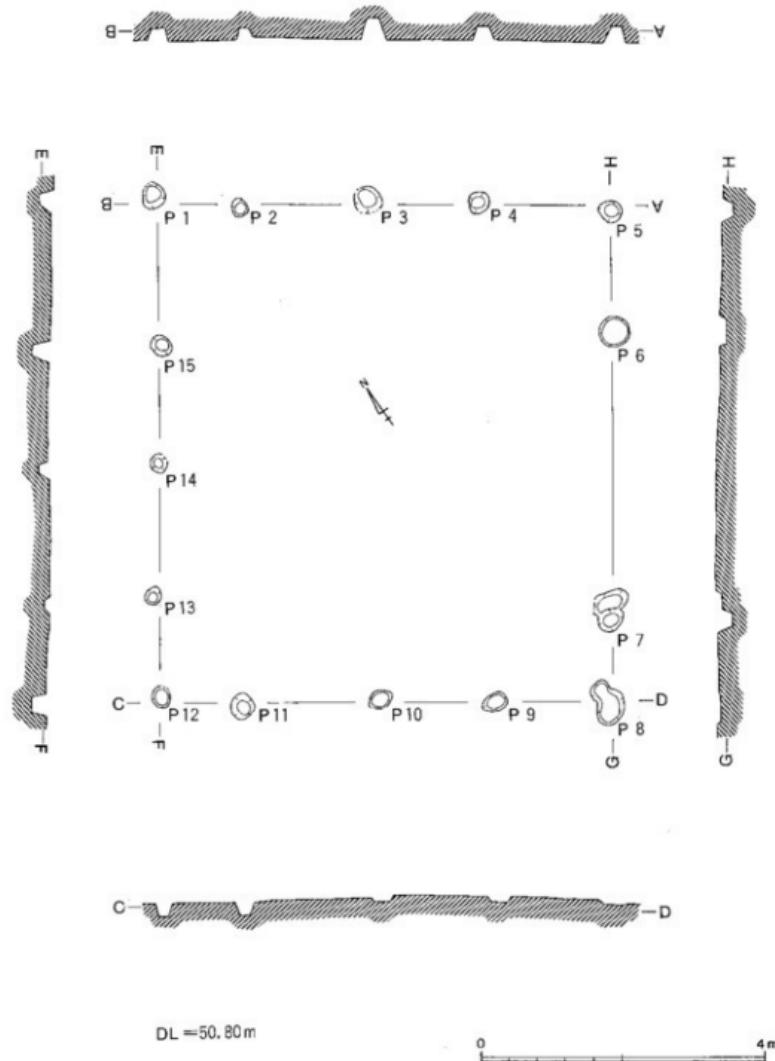


Fig 58 SB 11実測図

弥生土器片、土師器皿（346）がP14から出土した。346は内湾気味に立ちあがり口縁部は直立気味に立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。体部は内・外面共に指頭圧痕を認める。

S B 12 (Fig 57)

調査区の東南端部に位置する。半分以上は調査区外に出る。建物は桁行2間以上（3.45m以上）梁間2間以上（2.49m以上）の規模と考えられる。柱穴の平面プランは円形及び不整形を呈し、直径45.0~63.0cmである。これらの柱穴の検出面からの深さは20.0~32.0cmを測る。柱間距離は1.72m等間である。埋土は灰黑色土単純一層である。なお、S D 19、S K 35を切る。

土坑

S K 1 (Fig 59)

調査区の西南部に位置する。平面プランは梢円形を呈す。長径1.76m、短径1.17mを測る。長軸方向はN-52.0°-Wとなっている。検出面からの深さは9.0~10.0cmを測り、断面は逆台形を呈し床面は水平な面をなす。壁は急傾斜で立ちあがる。埋土は暗灰茶色土（1~3cmの砂礫混り）単純一層である。なお、S D 9を切る。

出土遺物

弥生土器細片が出土しているのみである。

S K 2 (Fig 59)

調査区の西南端部に位置する。半分以上が調査区外に出る。長径2.28m、短径0.68m以上を測る。検出面からの深さは22.0cmを測る。床面はほぼ水平な面をなす。埋土は暗灰茶色土単純一層である。なお、S K 28、S D 1、S D 2を切る。

出土遺物

土師器片及び炭化物が出土しているが図示できるものではない。

S K 4 (Fig 59)

調査区の西部、S T 6とS K 3との間に位置する。平面プランは梢円形を呈す。長径1.65m、短径1.25mを測る。長軸方向はN-18.0°-Wとなっている。検出面からの深さは7.0~20.0cmを測り、断面は段状を呈す。床面は南壁側が低く、北壁側が高い。南壁は急傾斜、北壁は緩やかに立ちあがる。埋土は暗灰茶色粘質土単純一層である。

出土遺物 (Fig 61-347・Fig 62-348)

弥生土器片、土師器片等のほか土錐（347）、釘（348）が出土している。

S K 9 (Fig 59)

調査区の中央より僅かに西の北端部に位置する。平面プランは不整形を呈す。長径0.40m、短径0.37mを測る。長軸方向はN-9.5°-Eとなっている。検出面からの深さは7.0~14.0cmを測り、断面形は逆台形を呈す。埋土は暗灰茶色土単純一層である。P1805と切り合うが先後関係は不明である。出土遺物は存しなかったが埋土から中世と推考される。

S K 10 (Fig 59)

調査区の西南端部に位置する。平面プランは梢円形を呈す。長径0.92m以上、短径0.62mを測る。長軸方向はN-8.2°-Eとなっている。検出面からの深さは7.0cmを測り、断面形は逆台形を呈す。埋土は暗灰色粘質土(1-3cmの礫混り)単純一層である。SK11を切る。

出土遺物

近世陶磁器片が出土しているが図示できるものではない。

SK11 (Fig 59)

調査区の西南端、SK2の北側に位置する。平面プランは半梢円形を呈す。長径3.6m、短径2.96mを測る。長軸方向はN-14.0°-Eとなっている。検出面からの深さは21.0-40.0cmを測り、断面形は舟底状を呈す。床面はほぼ水平な面をなす。床面のほぼ中央部に直径60.0-70.0cm、深さ12.0-13.0cmの円形の凹みがあり、竹と考えられる炭化物が多く出土した。埋土はI~IV層である。I層：暗茶褐色粘質土、II層：暗茶褐色土に黄茶色粘質土が混る。III層：暗茶褐色土、IV層：淡茶黄色粘質土である。工房跡と考えられる。なお、SD1、SD3、SD10-Aを切り、SK10に切られる。

出土遺物

弥生土器片、土師器皿片及び炭化物が出土しているが図示できるものではない。

SK15 (Fig 59)

調査区の西北端部、SD10-AとSD15との間に位置する。僅かに西側が調査区外に出る。平面プランは隅丸方形を呈すと考えられる。長径1.24m、短径0.57mを測る。長軸方向はN-10.5°-Eとなっている。検出面からの深さは15.0-18.0cmを測り、断面形は逆台形を呈すと考えられる。床面は水平な面をなす。埋土は茶黒色粘質土単純一層である。なお、P1806を切る。出土遺物から15世紀と考えられる。

出土遺物 (Fig 61-349-353)

完形に近い土師器杯(349-353)が床面に1列状に並んで出土した。349-353は平底から外反して立ちあがり、口縁部は僅かに内湾して口唇部は丸くおさめる。体部は内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転糸切り。

SK16 (Fig 59)

調査区の中央より僅かに西側、SK5の南側に位置する。平面プランは梢円形を呈す。長径1.25m、短径0.64mを測る。長軸方向はN-64.5°-Wとなっている。検出面からの深さは12.0-12.3cmを測る。断面形は逆台形を呈す。床面は水平な面をなす。埋土は暗茶色土単純一層である。P840を切られる。出土遺物はないが埋土から中世と考えられる。

SK18 (Fig 59)

調査区の東北部、ST8の南側に位置する。平面プランは隅丸長方形を呈す。長径2.45m、短径0.97mを測る。長軸方向はN-15.5°-Eとなっている。検出面からの深さは11.0-17.0cmを測る。断面形は舟底状を呈す。埋土は灰黒色土単純一層である。柱穴が切る。

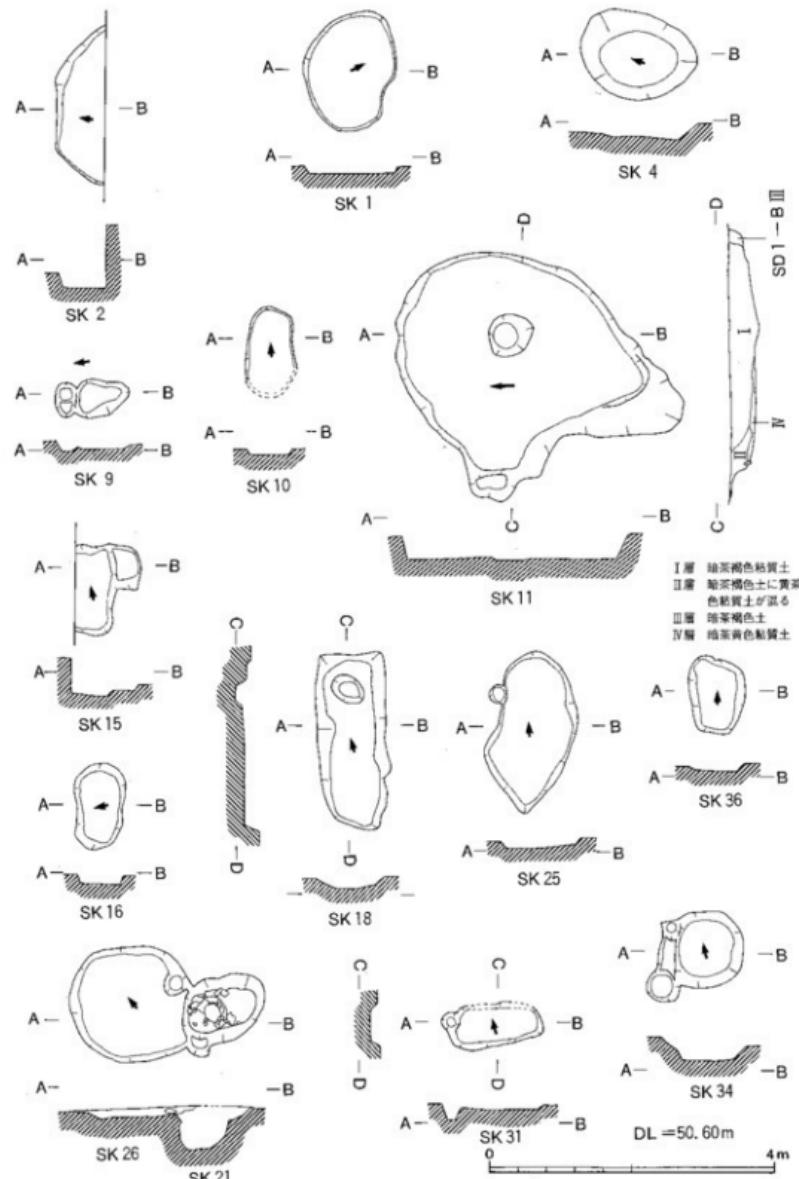


Fig 59 SK 1・2・4・9~11・15・16・18・25・26・31・34・36実測図

出土遺物 (Fig 61-354・355)

弥生土器片、土師器皿（354）、須恵器杯（355）が出土した。354は内湾気味に立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。外面は指頭圧痕が顕著である。

S K 25 (Fig 59)

調査区の東部、S T 7 の西側に位置する。平面プランは不整形を呈す。長径2.30m、短径1.12mを測る。長軸方向はN-8.2°-Eとなっている。検出面からの深さは4.0~6.0cmを測る。断面形は逆台形を呈す。床はほぼ水平な面をなし、壁は急傾斜で立ち上がる。埋土は暗灰茶色土單純一層である。

出土遺物

弥生土器片、須恵器片、瓦質土器土鍋片が出土しているが図示できるものではない。

S K 26 (Fig 59)

調査区の東北部、S T 8 の南側に位置する。平面プランは橢円形を呈す。長径1.81m、短径1.58mを測る。長軸方向はN-45.2°-Wとなっている。検出面からの深さは12.0~13.0cmを測る。断面形は東壁側が段をなし、床面はほぼ水平な面をなす。埋土は暗灰茶色土單純一層である。S K 21（壺棺墓4）を切り、柱穴に切られる。

出土遺物

弥生土器片、底部外面回転糸切りの土師器杯片が出土しているが図示できるものではない。

S K 31 (Fig 59)

東端部に位置する。平面プランは隅丸方形を呈す。長径1.30m、短径0.58mを測る。長軸方向はN-73.5°-Eとなっている。検出面からの深さは5.0~7.0cmを測る。断面形は逆台形を呈す。床面はほぼ水平な面をなす。壁は急傾斜で立ちあがる。埋土は暗灰黒色土單純一層である。S T 9 を切り、S B 10 に切られる。

出土遺物

弥生土器片、土師器片を出土したが図示できるものではない。

S K 34 (Fig 59)

調査区の東端部、S T 9 の南側に位置する。平面プランは円形を呈す。長径1.10m、短径0.96mを測る。長軸方向はN-25.0°-Wとなっている。検出面からの深さは15.0~17.0cmを測る。断面形は逆台形を呈す。床面はほぼ水平な面をなす。埋土は暗灰黒色土單純一層である。なお、S D 19及び2つの柱穴に切られる。

出土遺物

弥生土器片、土師器片、瓦質土器片があるが図示できるものではない。

S K 36 (Fig 59)

調査区の中央よりやや東部、S K 25の南側に位置する。平面プランは不整形を呈す。長径1.06m、短径0.78mを測る。長軸方向はN-26.5°-Wとなっている。検出面からの深さは6.0

~10.0cmを測る。断面形は逆台形を呈す。床面は水平な面をなす。埋土は茶黒色粘質土単純一層である。出土遺物から15世紀後半から16世紀初めにかけてのものと考えられる。

出土遺物 (Fig 61-357・358)

土師器杯 (357・358) がある。平底から外反して立ちあがり、357の口縁部は僅かに内湾する。口唇部は丸くおさめる。内面はロクロ目顯著である。外面は横ナデ調整を施す。底部外面は回転糸切りである。

溝

S D 5 (Fig 60)

調査区の西南部に位置する。N-78.0°-Wで東西方向に2.0m延びる。東端は調査区外に出る。幅0.34~1.48m、検出面からの深さ7.0~9.0cmを測る。床面の東端の標高は50.38m、西端の標高は50.32mを測る。断面は逆台形を呈す。埋土は灰黒色土単純一層である。なお、S D 10-Aに切られ、S D 7を切る。S D 13と同一の溝の可能性を有す。

出土遺物 (Fig 62-359)

弥生土器片、底部外面回転糸切の杯片、釘 (359) が出土している。

S D 9 (Fig 60)

調査区の西南部に位置する。N-49.5°-Wで東北に18.95m延びる。両端は調査区外に出る。幅4.45~7.17mの大溝である。検出面からの深さ7.0~26.0cmを測る。床面の西端の標高は50.47m、東端の標高は50.43mを測る。埋土は暗茶灰色粘質土 (1~5cmの砂礫混り) 単純一層である。なお、S D 8、S D 10-Aを切り、S K 1、柱穴多数に切られる。

出土遺物

出土遺物は少なく縦片で、弥生土器片、土師器片、須恵器片が出土しているが、いずれもローリングを受けて摩耗している。

S D 10-A (Fig 60)

調査区の西部に位置する。両端は調査区外に出る。N-82.0°-Wで東西方向に10.8m延びた所で南へほぼ直角に曲りN-14.0°-Eで南北方向に直走し、やや西に曲ってN-20.5°-Eでさらに南北方向に直走する。全長79.68m、幅0.30~2.15m、検出面からの深さ3.0~43.0cmを測る。床面の西端の標高は50.33m、南端の標高は50.24mを測り、西から東、さらに北から南へ流水する。雨天時には充分排水路の役目を果たしたことを付記しておく。溝はS D 10-Bを切った付近で最も深く、水が溜まるようになっており生活用水として使用も考えられる。埋土は暗灰色粘質土単純一層である。なお、S T 3、S E 1、S D 10-B、S D 12、S D 13を切り、S B 5、S D 9、S K 11に切られる。出土遺物からS K 15とはほぼ同時期と考えられ、15世紀に比定できる。

出土遺物 (Fig 61-361・Fig 62-360)

備前焼壺片、瓦質土器鍋片、土師器杯 (361)、砥石 (360) が出土している。361の杯は平底

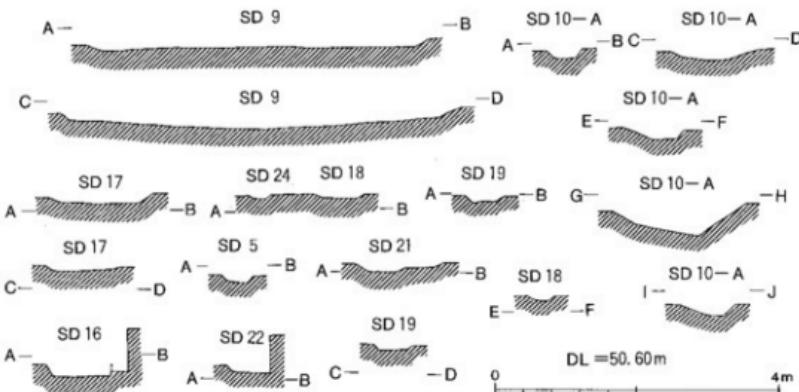


Fig 60 SD 5・9・10-A・16~19・21・22・24実測図

から外反して立ちあがり、口縁部は僅かに内湾して、口唇部は丸くおさめる。

S D 13 (Fig 12)

調査区の西南部に位置し、N-78.0°-Wで東西方向に5.25m延びる。西側は調査区外に出る。幅0.93~1.10m、検出面からの深さは12.0cm、床面の東端の標高は50.317m、西端の標高は50.32mを測る。埋土は黒色土單純一層である。S D 5と同一の構造と考えられるが、S T 1, S D 7, S D 12を切り、S D 10-Aに切られる。

出土遺物

弥生土器片等が出土しているが細片で図示できるものではない。

S D 16 (Fig 60)

調査区の西北端部に位置する。大半は調査区外に出る。東西方向に延びると考えられる。検出できたのは、全長1.25m、幅0.23m以上、検出面からの深さは12.0cmを測る。埋土は暗灰色粘質土單純一層である。S K 8（壺棺墓1）を切る。なお、出土遺物はなかった。

S D 17 (Fig 60)

調査区の北東部に位置する。N-67.5°-Wで東西方向に19.65m延びる。東は調査区外に出る。西端は調査区外に出るが削平の結果と考えられる。幅0.92~1.67m、検出面からの深さは5.0~13.0cmを測る。床面の西端の標高は50.686m、東端の標高は50.957mを測る。埋土は淡灰黒色粘質土（砂礫混り）単純一層である。なお、S T 8を切り、S D 18と交わるが切り合い関係は認められず、ほぼ同時期と考えられる。

出土遺物 (Fig 61~362)

土師器杯（362）の他瓦質土器片、青磁片等が出土している。362は平底から外反して立ちあ

がる。底部外面は回転糸切りである。

S D 18 (Fig 60)

調査区の東部に位置する。N-13.0°-Eで南北方向に15.65m延びる。南端は検出できなかつたが削平の結果と考えられる。幅0.4~0.8m、検出面からの深さは7.0cmを測る。床面の南端の標高は50.766m、北端の標高は50.782mを測る。埋土は灰黒色土単純一層である。なお、北端はS D 17と交わるが切り合い関係は認められず、ほぼ同時期と考えられる。又、S D 14を切る。出土遺物から15世紀と考えられる。

出土遺物 (Fig 61-363)

土師器杯片、瓦質土器鍋 (363) が出土している。363は内湾して立ちあがり、口縁部近くに突帯を有す。口縁端部は内側に肥厚して、口唇部は面をなす。

S D 19 (Fig 60)

調査区の東端部近くに位置する。N-13.5°-Eで南北方向に14.75m延びる。南端は調査区外に出る。幅0.35~0.67m、検出面からの深さは6.0~10.0cmを測る。床面の北端の標高は50.81m、南端の標高は50.981mを測る。埋土は暗灰黒色粘質土単純一層である。なお、S T 9、S K 34、S B 9、S B 11を切り、S B 10、S B 12は切る。又、多数の柱穴に切られる。出土遺物から15世紀と考えられる。

出土遺物 (Fig 61-364~366)

土師器杯 (364)、土師器皿 (365)、瓦質土器鍋 (366) 等が出土している。364は中央部が僅かに凹んだ平底から直線的に外反し、口唇部は丸くおさめる。365は平底から内湾気味に立ちあがり、口縁部は外反し、口縁端部は上方に肥厚する。口唇部は外傾して面をなす。古い時期からの混入と考えられる。366は内湾して立ちあがり、口縁端部は僅かに内傾して口唇部は面をなす。断面三角形の貼付鈎を有す。

S D 21 (Fig 60)

調査区の東南端部近くに位置する。N-59.5°-Wで東西方向に6.78m延びる。東端は調査区外に出る。又、西端は検出できなかつたが削平の結果と考えられる。幅1.15~1.90m、検出面からの深さは7.0~12.0cmを測る。断面形は南側が浅い段状を呈す。床面の東端の標高は50.61m、西端の標高は50.566mを測る。埋土は灰黒色土単純一層である。

出土遺物

弥生土器片、土師器片、瓦質土器土鍋片が出土しているが図示できるものでない。

S D 22 (Fig 60)

調査区の東南端部に位置する。大半が調査区外に出るため断定はできないが溝の端部であろうと考えられる。又、N-21.5°-Eで南北方向に延びると考えられる。検出できたのは、全長4.13mまで、幅0.5~0.9mまで、検出面からの深さは8.0~11.0cmを測る。床面北端の標高は50.74m、南端の標高は50.679mを測る。埋土は灰黒色粘質土単純一層である。

出土遺物

土師器片、瓦質土器土鍋片が出土しているが図示できるものでない。

柱穴

P 103 (Fig 63)

調査区の西端部に位置する。平面プランは円形を呈す。直径33.0cm、検出面からの深さは10.1cmを測る。埋土は暗灰茶色土單純一層である。

出土遺物 (Fig 61-367)

土師器皿 (367) が出土している。内湾気味に立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。口縁端部内面は強いナデ調整を施す。外面は指頭圧痕が顕著である。

P 105 (Fig 63)

調査区の西端部に位置する。平面プランは梢円形を呈す。直径42.0cm、検出面からの深さは24.0cmを測る。埋土は暗灰茶色土單純一層である。

出土遺物 (Fig 61-368)

備前焼片、土師器皿 (368) 等が出土している。368は中央部が凹んだ底部から内湾気味に立ちあがり、口縁部は僅かに外反する。口縁部は擒んで強い横ナデ調整を施す。内・外面共指頭圧痕が顕著である。

P 746 (Fig 63)

調査区の中央部に位置する。平面プランは円形を呈す。直径32.0cm、検出面からの深さは20.4cmを測る。埋土は灰黒色土單純一層である。なお、S B 6 に切られる。出土遺物から15世紀後半と考えられる。

出土遺物 (Fig 61-370)

土師器皿 (370) 等が出土している。370は、内湾して立ちあがり、口唇部より3.1cm下に断面而三角形の鈎を有す。胴部外面は叩き調整を施すが他は内・外面共横ナデ調整を施す。

P 778 (Fig 63)

調査区の西北端部に位置する。平面プランは円形を呈す。直径32.0cm、検出面からの深さは28.0cmを測る。埋土は灰黒色土單純一層である。

出土遺物 (Fig 61-371)

弥生土器片、土師器皿 (371) 等が出土している。371は、平底から斜上外方に僅かに内湾気味に立ちあがる。体部は内・外面共ロクロ目顕著である。底部外面は回転糸切りである。

P 1135 (Fig 63)

調査区の東部、S K 26の南側に位置する。平面プランは梢円形を呈す。直径35.0cm、検出面からの深さは20.4cmを測る。埋土は暗灰茶色粘質土單純一層である。

出土遺物 (Fig 61-372・Fig 62-379)

土師器皿 (372)、瓦質土器片、明錢「洪武通宝」(379) 等が出土している。372は中央部が

凹んだ平底から内湾気味に立ちあがり、口縁部は直上に直線的に立ちあがる。口縁部は摘んで横ナデ調整を施す。他は全面に指頭圧痕を認める。379は床直上から出土した。

P 1494 (Fig 63)

調査区の東部、S T 10の北西側に位置する。平面プランは円形を呈す。直径38.0cm、検出面からの深さは35.0cmを測る。埋土は灰黒色土単純一層である。

出土遺物 (Fig 61-373)

土師器皿 (373) が出土した。373は口縁端部は摘んで強い横ナデ調整を施し、爪による凹線が外面向にみられる。内・外面共に指頭圧痕顯著である。

P 1544 (Fig 63)

調査区の中央よりやや東側に位置する。平面プランは梢円形を呈す。直径35.0~45.0cm、検出面からの深さ22.2cmを測る。埋土は暗灰茶色粘質土単純一層である。

出土遺物 (Fig 61-374・375)

土師器皿 (374・375) が出土している。内湾気味に立ちあがり、口縁部は374は外反し、375は直立気味に立ちあがる。374は内・外面共横ナデ調整を施す。

P 1802 (Fig 63)

調査区の西端部に位置する。平面プランは梢円形を呈す。直径30.0~37.0cm、検出面からの深さは11.7cmを測る。埋土は灰黒色土単純一層である。なお、S T 5を切る。

出土遺物 (Fig 61-377)

瓦質土器擂鉢 (377) 等が出土している。斜上外方に直線的に立ちあがり、口唇部は外傾して面をなす。

P 1804 (Fig 63)

調査区の中央南端部に位置する。平面プランは梢円形を呈す。直径約28.0cm、検出面からの深さは10.6cmを測る。埋土は灰黒色土単純一層である。なお、S T 2を切る。

出土遺物 (Fig 61-378)

土師器小杯 (378) が出土している。平底から斜上外方に段をもって立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。体部外面は強い横ナデ、内面は不定方向のナデ調整を施す。底部外面は糸切り及び板目痕を残す。なお、器形が全体的に歪む。

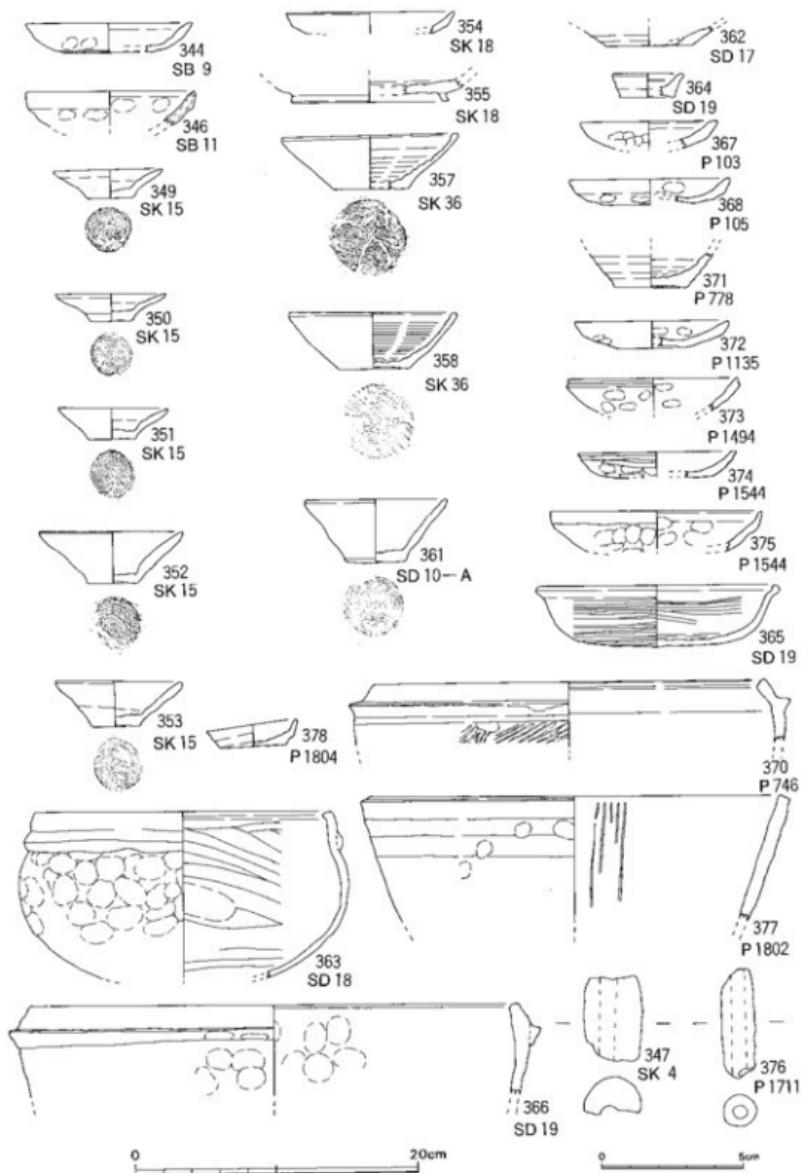


Fig 61 SB・SK・SD・Pの出土遺物

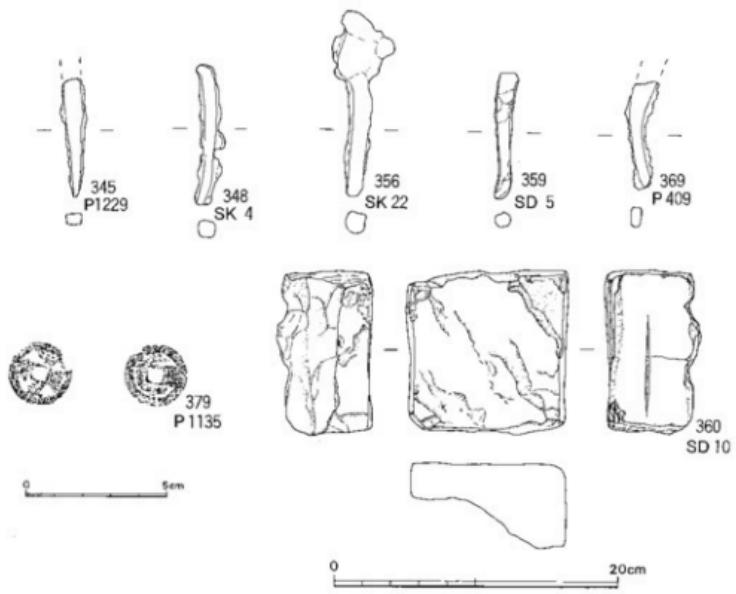


Fig 62 SK · SD · P 出土遺物

第VI章 総括

1. 遺物について

本遺跡で出土した遺物は、土器が大半を占めるが他に陶磁器、鉄器、土製品、石製品等がある。土器には弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦質土器等が、陶磁器には綠釉陶器、青磁、白磁等がある。鉄器には鎌、鐵鎌、鉈、馬具等が、石製品には紡錘車、管玉等があり、その他布目瓦片や自然遺物として古代モモの種子等がある。

これらの出土遺物は、弥生時代から中・近世のものであるが、特に弥生時代の竪穴住居であるS T 8と平安時代の井戸であるS E 1からは良好な一括資料を得ることができたので、ここではS T 8とS E 1の土器を中心に考察を述べることとする。

(1) S T 8 出土の土器

竪穴住居に集中癱棄された一括資料であり、完形及び復元完形を多く含んでいる。これらの土器は編年を進めるまでの基準資料として大きな位置づけを有する。先ず土器組成を見ると、鉢30点(21.1%)、高杯5点(3.5%)、壺19点(13.4%)、甕86点(60.6%)、瓶1点(0.7%)、蓋1点(0.7%)である。以下各器種ごとにその特徴を見ることにする。鉢は法量から4つのタイプに分けることができる。すなわち口徑20cm以上の大型のもの94、16~18cmの中型のもの90~92、10~13cmの小型のもの79・80・84~89、7~9cmの最小型のもの76・78・81~83である。高杯は杯部が椀状を呈する95・96、脚部を見てみると穿孔を施す95・97と図示しなかったが上・下2段に同じ大きさで穿孔を施したP L 35の脚、穿孔のない96がある。全体形の分かるものは杯部と脚部を分割成形している。壺はすべて平底で胴部中位に最大径を有す。頭部が直立気味に立ちあがる110・111は当該期に普遍的に存在するA類⁽¹⁰⁾である。104は二重口縁の土器でB類。胴部上端から大きくラッパ状に開ぐる口縁部を有するC類の107~109、短頭の口縁を有するD類の112~114がある。甕で注目すべきは108である。胴部上半に放射状の暗文を配す甕である。甕は法量から3つのタイプに分けることができる。すなわち器高15~21cmの小型のもの116~124、22.9~29cmの中型のもの125~129・131、34cm前後の大型のもの130・132~134である。小型と中型のものは総じて砲弾型を呈し、口縁部は外反する。成形手法は116・118・119・122・127・128・131は叩き目の主軸方向の変化から分割成形B手法⁽¹¹⁾の痕跡が見られる。116・117・123~130・132~135・137~139・143は胴部外面叩き調整の後下半を縱方向のハケ調整を施すものが多い。121の胴部外面は叩き調整の後、中位は部分的に縱方向のハケ調整を施し、下半は部分的にナデ調整を施す。118・119・122・142の胴部外面は叩き調整の後縱方向のナデ調整を部分的に施す。甕で注目すべきは115で、搬入品である。平底から内溝して立ちあがり、口縁部は強く屈曲して外反する。胴部外面上半は縱方向のハケ調整、下半は丁寧なヘラ磨きを施す。胴部内面はヘラ削りを施す。特徴から黒谷川郡頭遺跡土坑33出土の甕

(12) 等と近似し阿波地方を含む瀬戸内地方との関連が窺える資料である。当地域においては、後期初めを除くと内面ヘラ削りはほとんど認められず、僅かに深潤遺跡S T 3出土の壺⁽¹³⁾等に例を見つけるのみであり、影響が考えられる。

これらの特徴からS T 8の時期を決定しなければならない。南四国の土器編年で言えば、岡本健児氏が「叩き技法が本格的に定着しその全盛」を迎えたとしたヒビノキⅡ式であり、庄内式土器併行に位置づけられるものである。深潤遺跡C区出土の飾った壺⁽¹⁴⁾は、S T 8出土の飾りのない壺に比してやや古い時期に置くことができよう。

(2) S E 1 出土の土器

素掘りの井戸から出土した一括資料であり、完形及び復元完形を多く含んでいる。当地域における平安時代の土器資料は、土佐国衙跡⁽¹⁵⁾、曾我遺跡⁽¹⁶⁾、十万遺跡⁽¹⁷⁾等の出土によって徐々に増えつつあるが、土師器、須恵器の編年は出土土器の僅少さに因して未確立である。しかし漸く基準となる良好な資料を得ることができた。先ず土器組成を見ると、黒色土器碗47点・杯1点(12.9%) 土師器杯150点(40.3%) 土師器碗51点(13.7%) … 輪高台33点・ベタ高台18点、須恵器碗28点(7.5%) … 輪高台7点・ベタ高台21点、碗は合計79点(21.2%) 土師器皿42点(11.3%) 壺29点(7.8%) 羽釜14点(3.8%) 移動式竈4点(1.1%) その他6点(1.6%) … 須恵器片口鉢、土師器釜据等、以上である。以下各器種ごとにその特徴を見ることにする。

黒色土器碗

すべて内面のみ黒色を呈するいわゆるAタイプで、貼付輪高台を有する。又底部外面は回転ヘラ切りの後ナデ調整を施すものと無調整のものがある。法量から2つのタイプに分けることができる。口径13.9~15.2cmをI、17.0~17.3cmをIIとする。又、口縁端部内面に1条のヘラ削りを巡らすものをA、口縁部内面から体部上端内面にかけて1~3条のヘラ磨きを巡らすものをB、単位がわからないほど内面を丁寧にヘラ磨きを施したものCとし、IA、IBとというふうに記していく。

IA類は、212・213・219・226で放射状に暗文を配するものがある。高台径は口径比の48.3~51.4%である。器高と口径の関係は比例する。

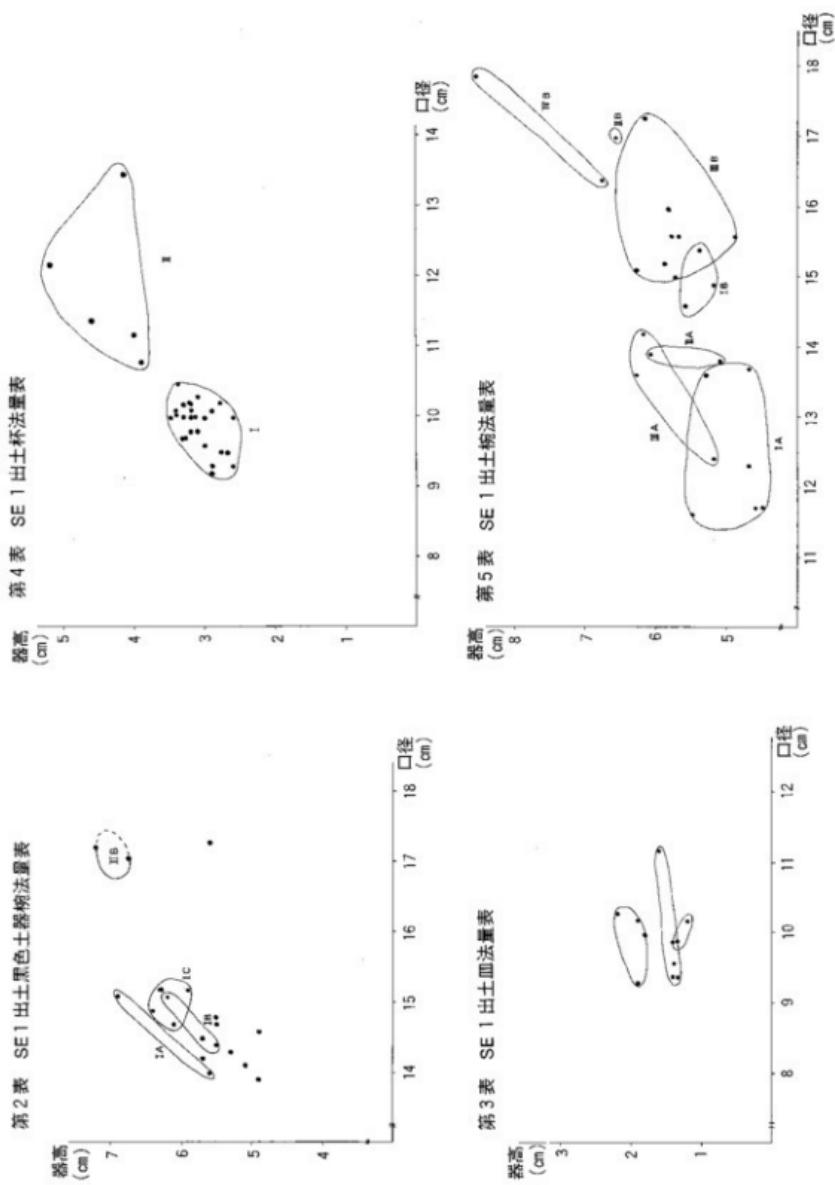
IB類は、211・221・222・225・231で放射状の暗文と波状及び螺旋状の暗文を配するものがある。高台径は口径の47.2~48.3%である。器高と口径の関係は比例する。

IC類は、214・216・218・220・224・227・228で放射状の暗文と縦方向の暗文を配するものがある。又214・216は口縁部外面、220・224・227は口縁部内面に横ナデ調整を施す。214・218及び摩耗して内面の調整は不明であるが215・218は体部外面にロクロ目が顯著である。高台径は口径の44.7~49.0%である。器高と口径の関係は比例しない。

IB類は、229・230で放射状の暗文及び螺旋状の暗文を配するものがある。229は口縁部外

第2表 SE1出土黑色土器碗法量表

第4表 SE1出土杯法量表



面はナデ調整を施す。230は口縁部内面に軽い沈線を巡らす。輪高台が欠損しているので正確には不明であるが、高台径は口径の約41.8%である。器高と口径の関係は個体数が少なく不明である。

なお、図示していないが、体部内面に型板痕を認めるものがあり、土師器碗285と類似する。高台高が高くてしっかりしたものとなり、口縁部内面に軽い沈線を巡らすものがある。

皿

土師器皿は台付皿（233～236）脚付皿（237）と口径9.3～11.2cmを測る平底の皿（238～244・308・316）、ベタ高台気味の底部を有する皿（317）の4つのタイプに分かれる。317の底部切り離しは、回転糸切りであるが他はすべて回転ヘラ切りである。平底の皿は器高指数11.5～12.1cm（316・332）、14.1～14.9cm（238・240～242）、18.0～21.3cm（239・243・244・308）にさらに分けることができる。底部内面にロクロ目を残すものが多い。なお、332の胎土は精選され砂粒を含まないことから搬入品と考えられる。

杯

すべて底部切り離しは回転ヘラ切りの後、荒いナデ調整を施すものが多い。法量から2つのタイプに分けることができる。口径9.3～10.5cmをIとし、底径は口径の60～70%の範囲にはとんど取まる。口径10.8～13.5cmをIIとし、底径は口径の50%前後である。

I類は、245～261・263・264・309～312・318～320で、器高は2.6～3.5cmを測る。245・253・258は口縁部内面に軽い沈線を巡らす。

II類は、平底の262・265・266で、器高は4.0～5.2cmを測るものとベタ高台気味の底部の267・313で、器高は3.9～4.6cmを測るものとがある。なお266は口縁部内面に軽い沈線を巡らす。

椀

268・269は、杯と椀の中間型ともいえるものであるが、椀とした。厳密なものではない。椀は土師器ベタ高台のものをI、輪高台のものをII、須恵器ベタ高台のものをIII、輪高台のものをIVに大別できる。さらに法量から2つのタイプに分けることができる。口径11.6～14.2cmをA、14.9～17.9cmをBとする。以下IA、IIAというふうに記していく。

IA類は、268～273である。底径は口径の48.5～57.3%である。268～270は底部切り離しは回転ヘラ切りであり、271～273は回転糸切りである。268・271・272の底部内面は凹む。器高指数34.3～47.4である。

IB類は、279・314・324である。底径は口径の41.6～49.3%である。底部切り離しは回転糸切りである。279の底部内面は凹む。器高指数34.8～38.4である。

IIA類は、284・285である。高台径は口径の47.5～50.7%である。284の底部外間に回転ヘラ切り痕を認める。285は口縁部内面に1条の軽い沈線を巡らし、体部内面に型板痕を認める。型板痕は図示していないが黒色土器椀にも認められる。器高指

数37.0~43.9である。

Ⅱ B類は、331である。高台径は口径の57.6%である。体部は平底から稜をもって斜上外方に直線的に立ちあがる。器高指数38.8である。

Ⅲ A類は、280・281・321である。底径は口径の43.5~46.3%，器高指数41.9~46.3である。底部切り離しは、回転糸切りである。なお、口径と器高は比例関係にある。

Ⅲ B類は、274~278・282・322・333である。底径は口径の40.0~49.4%，器高指数31.4~41.7である。底部切り離しは、回転糸切りである。274・275・278の底部内面は凹む。

Ⅳ A類は、ない。

Ⅴ B類は、286・287である。底径は口径の43.0~45.7%，器高指数41.5~48.0である。286の底部切り離しは、回転ヘラ切りの後ナデ調整を施す。287の底部外面はロクロナデを施す。口縁端部内面に1条の沈線を巡らす。口縁部及び体部内面はヘラ磨きを施す深い椀である。なお、口径と器高は比例関係にある。

壺

壺は全体の器形がほぼ分かるものは289~291・329の4点ある。ほぼ同じ器形であるが胴部上端部より下は叩き調整を施すもの（289・290・329）と、胴部中位から下は丁寧なナデ調整を施すもの（291）とがある。291は、口縁部内面に「大」と思われる刻字が施され祭紙的要素をもつものと考えられる。他に壺腹部（303）外面に3文字の刻字を認め、やはり丁寧なナデ調整が施されている。同様の器形の壺は土佐国衝跡S X 6₍₁₈₎から出土している。

羽釜

口縁端部外面のやや下った部分に鉢を有する折津C₁型（293₍₁₉₎）口縁端部外面にそのまま鉢を有する折津C₂型（292・295・297・327₍₂₀₎），口縁部は僅かに内側に屈曲し、口縁端部よりやや下に鉢を有するもの（294），口唇部より5.7cm下に断面三角形の小さな鉢を有するもの（296）の4つのタイプにわけることができる。

以上S E 1出土の土器の特徴の概略を述べてきた。まず、これらの土器の時期差について決定しなければならない。331はⅢ層から出土したがⅠ層下と接合できた。又、333の須恵器柄は床直上から出土したが、Ⅰ層から出土した碗類との間に時期差はほとんど認められないなど、全体の遺物は、ほぼ同時期のものと考えてよからう。黒色土器Aは、口縁部内面にヘラ削りを巡らすものであるが、器壁を薄くするためのヘラ削りを残すものとすれば興味深い。又、内面に炭素が充分吸着せず、黒色土器といいがたいものも図示していないが含まれる。先述したように土師器碗285等と器形及び手法が類似する。これらのことから黒色土器は在地系の可能性をもつ。畿内の黒色土器Aタイプと同じ内墨黒色土器が、土佐に縁釉陶器と共に多量に移入されてくるのは9世紀中頃以降₍₂₁₎であるが、土佐における黒色土器の生産は、このS E 1の時期から始まる可能性が強い。黒色土器を含めて輪高台の椀の底部切り離しは、回転ヘラ切り、

ベタ高台の椀は小型のものは回転ヘラ切りが残り、中型のものは回転糸切りとなっており、皿317を除いて他の皿、杯など小型のものは、回転糸切り出現後も回転ヘラ切りが残る⁽²²⁾ようである。しかし曾我遺跡S K 5⁽²³⁾の11世紀末にはなくなる。以上出土遺物の特徴からS E 1の時期を10世紀後半から11世紀前半までと考えたい。

2. 遺構について

当遺跡で検出した遺構は、竪穴住居10棟、掘立柱建物12棟、土坑38基（壺棺墓9基）、溝24条、井戸1基、柵列1条、及び柱穴群である。これらすべてについての所属年代や性格を明確にすることはできないが時代順に諸検討を加えることとする。

弥生時代

竪穴住居は平面プランが円形を呈するもの（S T 9）、隅丸方形を呈するもの（S T 1・3・8）瓢箪形を呈するもの（S T 6）がある。南四国の竪穴住居の平面プランは、ヒビノキI式⁽²⁴⁾の段階までは円形が一般的であり、ヒビノキII式⁽²⁵⁾になると不整円形・隅丸方形が出現し、方形住居に統合されていく、検出した竪穴住居は、ヒビノキII式期と考えられるが、S T 9はS K 33に切られること等から僅かに時期が下るようである。他はほぼ同時期と見てよからう。土器が集中廃棄されたS T 8は、他の住居址に比べて床面が深い位置にあること、平面プランが隅丸長方形を呈すること。出土した土器は、投げ込まれたのではなく据え置かれたと考えられること等々他の住居址と明らかに様相を異にすることから祭祀的意味をもつものとみてよからう。壺棺墓については、S T 3から11.35m北に壺棺墓1（S K 8）、7.3m北に壺棺墓2（S K 12）が、位置し、壺棺墓2（168）は先述したように底部に一孔が穿たれており、葬送習俗の一つに該当し、西北九州地方に今も残存する壺棺の底部に体液を流すための一孔を穿つ⁽²⁶⁾行為に類似するとも考えられる。又壺棺4（171・172）の出土状態は、土器片を脇部に貼り付ける等、深淵遺跡出土の壺棺と類似しており葬送習俗に伴うと考えられ、壺棺2（168）と合わせて興味深いものである。壺棺墓群（壺棺墓3～9）は、S T 8とS T 9との間に位置し、集落内に墓域が営まれていたことは明確である。壺棺は、すべて大きさから乳幼児又は小児用と解すべきであろう。居住区と墓域との距離で言えば、五軒屋敷遺跡⁽²⁷⁾・深淵遺跡⁽²⁸⁾・香川県彼ノ宗遺跡⁽²⁹⁾においても居住区と墓域が極めて近いことが言える。しかし、特に壺棺墓群には成人墓群が全く見られず、その点で子供の墓域と成人の墓域を異にしていることは注目に値することである。又ほぼ同時期と考えられ、さらに祭祀的要素を多分に持ち、壺棺墓群に近接するS T 8との関係についても合せて今後充分なる検討を要することである。

古墳時代

検出された竪穴住居は5棟であるが、4世紀初頭と考えられるS T 4は規模からS T 5の付属的施設の可能性があり興味深いものである。又6世紀後半と考えられるS T 2・7・10はカマドを持つものと持たないものがあることや、その位置関係から集落を考える上で興味深い。

なお S T 10から約80m南の県内唯一現存する前方後円墳である大塚古墳は6世紀前半と考えられるが、この時期のものは当遺跡にはない。大塚古墳の墓域周辺にその前後の集落が経営されるのは、その背景に首長の盛衰を物語るものであって、これまた興味つきなものである。

平安時代

当遺跡で検出した遺構は出土遺物から前後2時期に分けて考えることができる。前半期のものは S D 11・P 488・591等、後半期のものは S B 4、S E 1、S D 10-B 等である。前半期は 335・336の杯、341の黒色土器、図示していないが P 448から出土した綠釉陶器片から9世紀後半が考えられる。後半期の良好な一括遺物を出土した S E 1 は、出土遺物から S B 4 に伴うものと考えられるが、S B 4 は、井戸から約4.2m北側に位置する。又 S B 4 の南面中央の柱穴は検出されておらず、むしろ欠陥の状況でそれがゆえに出入口であった可能性を持つ。これらのことから S B 4 は厨の可能性をもつものではなかろうか。S E 1 出土の黒色土器は、県内の発見は現在のところ極めて少なく、土佐では、一般的な供膳形態の食器とは言えないようである。又 291・303の刻字を施した甕は一般庶民のものとは考えられない。330の鉄器は馬具の可能性が極めて高く、以上のことから特に後半期の S B 4、S E 1 は有力豪族の館の一部とも考えられ、又地名の「サウジ」は「庄司」の訛ったものに結びつく可能性もあり興味深い。なお、調査区の北及び西側にも同時期の建物群が所在すると思われる。

中世

検出した遺構を出土遺物から次の表の様に大別できる。S D 10-A は直角に曲って南下することから屋敷を区画する溝と思われるが、S D 17と結びつく可能性があり、S D-10A・17・18はほぼ同時期のもので S D 10-A 同様 S D 17・18は屋敷を区画する溝と考えられる。これらを含めて検出した遺構は15世紀から16世紀初頭までと考えられ、北側の山手に所在する山田城跡の盛えた時期であり、山田氏の臣属の居館跡と考えられ、当遺跡の西側に所在したと言われる西の市、東の市を含めて戦国期城下町の初源的なものとも把握でき、今後周辺における調査によってより明らかになることが期待され得る。

遺 構	15世紀		16世紀	
	S D 17	S B 9	S B 6	
	S D 18	S B 11	S K 36	
	S D 19		S B 10	
		S K 15		
		S D 10-A		

第6表 緑釉陶器・二彩陶器県内出土地（平成2年3月現在）

器種	点数	出土地	報告書等
緑釉陶器 盆	1	吾川郡春野町石屋敷	山根・石屋敷遺跡
タ 怀	1	南国市比江新ラ田	土佐国街跡発掘調査報告書第1集 S55.3
タ 不明	1	タ ダイリ	土佐国街跡発掘調査報告書第2集 S56.3
タ 梗	1	タ 府中	土佐国街跡発掘調査報告書第3集 S57.3
タ 盆	1	タ 前浜	田村遺跡群 S62
杯	2	タ 金星	土佐国街跡発掘調査報告書第8集 S63.3
タ 梗・皿	6	香美郡野市町深瀬	深瀬遺跡発掘調査報告書 H1.3
二彩陶器 壺等	5	タ タ	深瀬遺跡発掘調査報告書 H1.3
緑釉陶器 皿・梗・壺	45	香美郡野市町曾我	曾我遺跡発掘調査報告書 H1.3
タ 皿	9	中村市森沢風指	後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書 II H1.3
タ 皿等	2	南国市国分	土佐国分寺発掘調査報告書 H1.3
タ 皿・楕等	20	南国市比江字金屋	土佐国街跡発掘調査報告書第9集 H1.3
タ 皿	4	幡多郡大方町加持宮崎	宮崎遺跡 H1
タ 皿	1	吾川郡春野町西分増井	西分増井遺跡 H1
タ 皿	2	香美郡上佐山田町百石町	ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書 H2.3

第7表 古代「墨書・刻書土器」県内出土地（平成2年3月現在）

器種	文字	出土地	期間	報告書
須恵器水部(刻書)	「使道」	南留市比江字松ノ下	S61.10.16~12.19	土佐国街跡発掘調査報告書第7集 S62.3
上部唇高杯楕(墨書)	「官」	宇宮ノ西	S54.8.29~9.12	土佐国街跡発掘調査報告書第7集 S62.3
土部器杯(+)	「水」	香美郡野市町深瀬	S62.9.28~11.30	深瀬遺跡発掘調査報告書 H1.3
須恵器蓋(+)	「山」	曾我	S62.3.7~5.7	曾我遺跡発掘調査報告書 H1.3
須恵器蓋(刻書)	「大」	溪頭	S63.6.22~8.13	深瀬遺跡発掘調査報告書 H1.3
須恵器蓋(刻書)	「上」	上佐山田町大法寺	不明	上佐山田町史・大法寺1号古窯址(大法寺古窯址群)
須恵器蓋(刻書)	「禾」	+	+	土佐山田町史・大法寺1号古窯址(大法寺古窯址群)
須恵器蓋(刻書)	「力」	+	+	土佐山田町史・大法寺1号古窯址(大法寺古窯址群)
土師器皿(墨書)	不明	幡多郡大方町加持字宮崎	S63.12.8~12.10	宮崎遺跡 H1.3
土師器皿(墨書)	「住」?	+	H1.3.6~3.10	*
土師器皿(刻書)	「大」	香美郡土佐山田町百石町	H1.7.6~10.30	ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書 H2.3
土峰從寳(刻書)	「ホ」?	+	*	*

(註)

- (1) 土佐山田町教育委員会『高知県ひびのき遺跡』1977年
- (2) 高知県教育委員会『飼占屋跡遺跡発掘調査報告書』1983年
- (3) 土佐山田町教育委員会『稲荷前遺跡発掘調査報告書』1990年
- (4) 龍河洞保存会『龍河洞』1959年
- (5) 土佐山田町教育委員会『土佐山田町林田遺跡発掘調査報告書』1985年
- (6) (1)に同じ
- (7) 土佐山田町教育委員会『土佐山田町史』1979年
- (8) 火山灰に腐植土が混ったもの
- (9) 黄茶色の火山灰
なお黒ボク及び音地の分析の結果、火山ガラスの含有率においてかなり異なるが、その主な含有火山ガラスは鬼界ーアカホヤ火山灰と考えられる。(分析結果を参照されたい。)
- (10) 岡本健児「南四国における卯のある弥生土器と土師器」『森貞次郎博士古稀記念・考古学論集』下1982年
- (11) 都出比呂志「畿内第5様式における土器の変革」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集 1982年
- (12) 徳島県教育委員会『黒谷川郡頭遺跡Ⅲ・IV』1989年
- (13) 野市町教育委員会『深瀬遺跡発掘調査報告書』1989年
- (14) (13)に同じ
- (15) 高知県教育委員会『土佐国衙跡発掘調査報告書』第1~9集 1980~1989年
- (16) 野市町教育委員会『曾我遺跡発掘調査報告書』1989年
高橋啓明「高知県・曾我遺跡」考古学ジャーナル No.312, 1989年
- (17) 香我美町教育委員会『十万遺跡発掘調査報告書』1988年
- (18) 高知県教育委員会『土佐国衙跡発掘調査報告書』第9集 1989年
- (19) 管原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所1983年
- (20) (19)に同じ
- (21) (16)に同じ
- (22) 小川貴司「回転糸切り技法の展開」『考古学研究』第26卷第1号 考古学研究1979年
- (23) (16)に同じ
- (24) (1)に同じ
- (25) (1)に同じ
- (26) 井之口章次「葬儀の民俗学－4」『月刊歴史教育』通巻27号 東京法令出版1981年
- (27) 高知県教育委員会『五軒屋敷発掘調査報告書』1984年

- 28 13と同じ
- 29 善通寺市文化財保護協会『彼ノ宗遺跡』1985年

第8表 遺物観察表

件名番号	遺構番号	器種	口徑 器高 側面 底面 直徑 (cm)	形態・文様	手法	備考
Fig. 6 1	Ⅱ層	縦袖陶器 皿	— (1.6) — 11.0	貼付高台を有す。平底から内湾気味に立ちあがる。底部内面に凹線を認める。	底部外表面はヘラ切り後ナデ調整を施す。全表面施釉。釉は淡緑色で緑色の斑点を認める。	I ~ 3 mm の鉢紋を含む。軟質。
2		土製器 鉢	— (3.5) — 7.0	平底から内湾気味に立ちあがる。	体部は内・外両共に横ナデ調整を施す。底部は内・外両共ナダグ調査を施す。底部内面に削削压痕を認める。	
3		タ 羽釜	25.8 (3.5) —	口縁邊部に平行して背を貼付ける。背は上方に僅かに反り上がる。口唇部は僅かに外傾して面をなす。	内・外両共横ナダグ調査を施す。	
4	Ⅲ層	須出器 蓋	11.8 (3.5) —	内側して直線的に立ちあがり縁をなして頂部に至る。口唇部は丸くおさめる。	内・外両共横ナダグ調査を施す。内面はクロロ口調査。	
5		タ 亞	— (2.8) —	縫に突出した頂部から内凹して下降する。	頂部は内・外両共不定方向のナダグ調査。体部は内・外両共に横ナダグ調査を施す。頂部と底部との境はヘラ削りを施す。	
6		タ 蓋	13.0 2.8 7.1	内湾気味に立ちあがり頂部に凸る。口唇部は丸くおさめる。	頂部外表面はヘラ削りのあと不定方向のナダグ調査。口縁部は内・外両共丁寧な横ナダグ調査を施す。	
7		領江器 杯	12.0 4.6 — 7.9	外反気味に立ちあがり受端部は丸くおさめる。たちあがりは鋭く、内側し端部は丸くおさめる。	内・外両共横ナダグ調査を施す。	
8		タ 杯	12.2 (2.9) —	直線的に立ちあがり受端部は丸くおさめる。たちあがりは直線的に内側し端部は丸くおさめる。	内面は横ナダグ調査を施すが外表面は灰褐色の自然釉のため観察不可能。	
9		タ 杯	13.4 3.3 —	内湾気味に立ちあがり受端部は丸くおさめる。たちあがりは外反気味に内側し端部は丸くおさめる。	受部は揃えて横ナダグ調査を施す。杯部外表面下半はヘラ削りを施す。	
10		土器 皿	9.4 1.8 6.4	平底から僅かに段をもって直線的に立ちあがり口縁部に凸る。口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外両共横ナダグ調査を施す。底部外表面はヘラ切り。	
11		タ 杯	— (2.0) — 7.0	ベタ高台気味の底面から斜向外方に直線的に立ちあがる。	内面は横ナダグ調査を施す。外表面は唐脱が衝しく観察不可能。	
12		タ 杯	11.0 3.2 6.2	平底から内湾気味に立ちあがり、口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	内・外両共横ナダグ調査を施す。底部外表面はヘラ切り。	
13		タ 杯	— (2.2) — 8.0	ベタ高台気味の底面から内湾気味に立ちあがる。	体部は内・外両共横ナダグ調査を施す。底部外表面は削削ヘラ切り。	
14		タ 杯	— (1.4) — 3.0	平底から斜向外方に直線的に立ちあがる。	体部は内・外両共クロ口調査。底部外表面は削削ヘラ切り。	
15	Ⅳ層	タ 皿	11.3 1.2 — 8.0	中央が僅かに凹む底面から内湾気味に立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。	内・外両共横ナダグ調査を施す。底部外表面はヘラ切り。	
16		タ 皿	12.6 2.0 — 6.4	内湾気味に立ちあがり段をなして口縁部に凸る。口唇部は丸くおさめる。	口縁部は揃えて強い横ナダグ調査を施す。体部は内・外両共に横ナダグ調査を施す。	
17		タ 皿	14.6 2.6 — 6.5	中央が僅かに凹む底面から内湾気味に立ちあがり段をなして口縁部に凸る。口唇部は丸くおさめる。	口縁部は揃えて強い横ナダグ調査を施す。底部内・外・外両共削削压痕を認める。	
18		タ 皿	10.4 3.2 —	僅かに丸底直気味の底面から内湾気味に立ちあがり口唇部は丸くおさめる。	内面は不定方向の深いハケ調査を施す。内・外両共に指削压痕が認める。	内面は削ける。

第9表 遺物観察表

邦国番号	遺構番号	器種	法蓋 口径 器高 厚径 底径 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
Fig 6 19	目録	土師器 皿	11.8 (2.9) —	内湾気味に立ちあがり口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共横ナゲ調整を施す。内・外面共指頭圧痕を認める。	
20		須恵器 高杯鉢	— (4.3) — 17.2	脚部は「ハ」の字状に下降し溝部近くで外反し、溝部は面をなす。脚部は前方部の透しが空たれる。	内・外面共に横ナゲ調整を施す。脚部の透しはハラ切り。	
21		弥生土器 鉢	— (3.8) — 3.0	僅かに突出気味の平底から内湾して立ちあがる。	内・外面共不定方向のナゲ調整を施す。	
22		土 盤	— (2.9) — 4.2	平底から直線的に斜上外方に立ちあがる。	脚部外側下半は複方向のハケ調整を施す。底部内側に指頭圧痕を認める。	
23		土 盤	— (5.9) — 3.0	平底から内湾気味に立ちあがる。	外面は仰き調整を施す。底部内面は半横方向のハケ調整を施す。下半には指頭圧痕を認める。	
24		土 壺	17.6 (5.3)	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁部は下方に膨出し、口唇部は丸くおさめる。頸部内面に棱を有す。	口縁部内面は横方向のハケ調整を施す。腹部外面は引き調整を施す。口縁部外側に指頭圧痕を認める。	
25		土 壺	13.8 (16.0)	内湾して立ちあがり直面して口縫部に沿う。口縫部は外反して、口唇部は面をなす。	脚部外側は複方向及び右下りの弓字調整を施す。口縫部外側はナゲ調整を施す。外面は右下りのハケ調整で指頭圧痕を認める。	外面は採ける。
26		土師器 皿	25.6 (8.0) —	口縫部は「く」の字状に外反し、口唇部は外傾して面をなす。	口縫部外側上下は複い横方向のナゲ調整を施し側面に凹凸、前後内側横ナゲ調整を施す。口縫部外側はナゲ調整を施す。脚部及び頸部下半に指頭圧痕を認める。	
27		土 瓶	— (16.2) — 10.2	単孔の瓶である。外反気味に立ちあがりその後内湾気味になり貼付把手に至る。把手は大根。	外側は封緘が著しいが一部丁寧な横方向のハラ書きを残す。内面は不定方向のハラ削りを施す。	
28		瓦 厚さ 2.3	— —	平瓦	凹面は織い布封を有す。凸面は着火が著しく観察不可能。	軟質
29		瓦 厚さ 3.2	— —	平瓦	凹面は細い布目を有す。凸面は粗目の叩きを施す。	硬質
30		弥生土器 器台	— (5.0) — 6.2	僅かに外反気味に垂直に立ちあがる。	内面設置目を認める。焼耗が著しく観察不可能。	
31		近畿陶器 下ろし皿	— (2.8) — 12.2	平底から斜上外方に段をして直線的に立ちあがる。	底筋内面にハラ焼きによる格子目を施す。体部上端内面に青茶色の釉。外面上に白色の釉を施す。	
32		土 盤	全長 (3.5) 全幅 1.9 重量 9.5 g	円筒形を呈す。		
33	表接	土 盤	全長 3.2 全幅 1.0 重量 2.4 g	円筒形を呈す。		

第10表 遺物観察表

挿図番号	遺物番号	器種	口径 器高 (mm) 銅径 底径	形態・文様	手法	備考
Fig 21 31	S T 1 — P 3	弥生土器 鉢	13.8 7.1 — 4.2	平底から内溝して立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	体部外面は右下りの叩き調整の後ナゲ調整を施す。口縁部は横んで調整を施す。	
35		タ 鉢	— (3.5) — 1.2	丸底気味の底盤から内溝して立ちあがる。	内・外両共指頭圧痕が認める。	
36		ミ 鉢	— (4.5) — 3.0	平底から内溝して立ちあがる。	外縁は縱方向のハケ調整を施す。	
37		ミ 鉢	19.6 (7.5) —	内溝気味に立ちあがり口唇部は薄くなり底盤部は外側に僅かに肥厚して口唇部は面をなす。	体部外面は仰頭による強い横方向のナゲ調整を施す。体部内面は横方向のハケ調整を施す。体部に筋上接着痕を認める。	
38	S T 1	ミ 鉢	23.2 — 6.4	平底から内溝して立ちあがり口唇部は上方に僅かに肥厚し、口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外両共ナゲ調整を施す。口縁部は内・外両共指頭圧痕を認める。	
39		タ 甕	— (7.9) — 5.4	平底から内溝気味に立ちあがる。	内・外両共指頭によるナゲ調整を施す。	
40		ミ 甕	16.2 (5.0) —	口縁部は「く」の字状に屈曲して外反し、底盤部は下方に僅かに肥厚し、口唇部は丸くおさめる。	脚部外面上端は横方向のハケ調整、他の叩きの後縦方向のハケ調整を施す。口縁部外面は横ナゲ調整を施す。	外縁全体が僅ける。 底面より出土。
41		ミ 甕	15.8 (6.2) —	口縁部は「く」の字状に屈曲して外反し、口唇部は面をなす。	叩き出し口縁である。脚部外面上は左下りの叩き調整を施す。口縁部内面は丸いハケ原体による横方向のハケ調整を施す。	
42		ミ 甕	17.6 (4.0) —	口縁部は「く」の字状に屈曲して外反し、底盤部は下方に僅かに肥厚して口唇部は面をなす。	叩き出し口縁である。口縁部外縁は弾き→横方向のハケ→横方向のハケ調整の順で仕上げる。 脚部外面上は左下りの叩き調整。	
43		タ 甕	— (5.6) — 4.6	平底気味の底盤から内溝して立ちあがる。	外縁は横方向のハケ調整を施す。 内面は指頭圧痕を認める。	
44		タ 甕	— (3.7) — 3.4	平底から大きく開いて僅かに内溝して立ちあがる。	外縁は縦方向のハケ調整を施す。 内面は指頭圧痕を認める。	
45		ミ 甕	15.4 (12.3) —	口縁部は「く」の字状に外反して口唇部は面をなす。	口縁部外面はナゲ。内面は横方向のハケ調整を施す。脚部外縁は横方向の叩き調整。中段から下はさらに横方向のハケ調整を施す。脚部内面は指頭による強烈な横方向ワイヤー調整を施す。	
46		ミ 甕	30.4 (12.0) —	口縁部は「く」の字状に屈曲して外反し、口唇部は面をなす。	脚部外筋は左下りのハケ調整を施す。脚部内面は右下りのハケ調整の後、抜張による縦方向の強いナゲ調整を施す。	外縁は2次焼成で紅く発色し、口縁部外縁は僅ける。
47		鐵石	全長 15.6 全幅 9.2 全厚 3.0 重量 745 g	片曲は使用して滑かである。		
Fig 22 48	S T 3	弥生土器 鉢	12.0 (3.8) — —	内溝して立ちあがり口唇部は丸くおさめる。	体部外筋は左下りの叩き調整の後ナゲ調整を施す。体部内面は不定方向のハケ調整の後横ナゲ調整を施す。体部内面に指頭圧痕を認める。	
49		ミ 鉢	10.5 5.2 — 2.0	平底から内溝して立ちあがり、口唇部は面をなす。	体部外筋は、不定方向のナゲ調整、内面は縦方向のハケ調整を施すが部分的に不定方向のナゲ調整を施す。	
50		ミ 鉢	6.2 2.6 —	平底から内溝気味に立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。	体部外筋は、ナゲ調整を施す。 体部内面は、丸いハケ原体で不定方向のハケ調整を施す。	
51		ミ 鉢	6.1 4.9 — 3.2	突出気味の平底から内溝して立ちあがり。口唇部は丸くおさめる。	体部外筋は横方向の叩き調整の後ナゲ調整。内面は指頭によるナゲ調整を施す。	

第11表 遺物観察表

採回番号	遺構番号	器種	口径 器高 底径 (m)	形態・文様	手法	備考
Fig 22	S T 3	弥生土器 鉢	11.5 7.2 — 1.7	丸底気球の底盤から僅かに内湾気球に立ちあがり、口唇部は丸くおきめる。	体部外表面は下りの叩き調整の後不定方向のナダ調整を施す。体部内面は左位より上は不定方向のハケ調整、下位より下は不定方向のナダ調整を施す。	床面より出土
52			15.4 6.1 — 3.3	丸底気球の底盤から内湾して立ちあがる。口唇部は外傾して面をなす。	体部外表面は下りの叩き調整を施す。内面は不定方向のハケ調整を施す。体部内面は左位より上は不定方向のハケ調整を施す。	パッド上
53		・ 鉢	14.0 5.7 — 2.7	平底気球の底盤から内湾気球に立ちあがり、口唇部は面をなす。	体部外表面は下りの叩き調整を施す。多數の瘤頭を底盤を認める。内面は不定方向のハケ調整、底盤内面はナダ調整を施す。	・
54			(5.0) — 2.1	平底から内湾して立ちあがる。	体部外表面は下位よりナダ調整を施す。体部内面は左半は不定方向のハケ調整、右半はナダ調整を施す。	
55		・ 鉢	13.6 6.0 — 2.5	平底気球の底盤から内湾して立ちあがる。口唇部は丸くおきめる。	体部外表面は右下りのハケ調整を施す。内面は左位に丁寧なナダ調整を施す。	
56			17.0 7.3 —	内湾して立ちあがり口唇部は丸くおきめる。	体部外表面はナダ調整、内面上半は不定方向のハケ調整、下半はナダ調整を施す。内面は外側に張り出た。内面共指屈压痕を認める。	パッド上
57		・ 甕	(5.5) — 3.1	平底から内湾して立ちあがる。	胴部外表面は不定方向の叩き調整を施す。内面は不定方向のナダ調整を施す。指屈压痕を認める。	
58			12.6 (7.2) —	口唇部は「く」の字状に屈曲して外反し、口唇部は面をなす。頭部内面に瘤をなす。	口袋部内面は不定方向のハケ調整、外側にナダ調整を施す。胴部外表面は右方向の叩き調整で底盤のハケ調整を施す。	頭部内面は2次焼成で紅く発色。
59		・ 甕	16.7 (8.4) —	口唇部は「く」の字状に屈曲して外反し、口唇部は面をなす。頭部内面に瘤をなす。	叩き出し形状である。外側は右下りの叩き調整である。口唇部内面は強ナダ調整、胴部内面は指屈による強い縱方向のナダ調整を施す。	胴部外表面は揮ける。
60			全長 1.7 全幅 0.8 全厚 0.2 全深 0.4 孔径 0.4	円筒形を呈す。		
61		管玉	全長 5.3 全幅 1.8 全厚 0.2 重量 5.9g			管玉製で白色である。
62		鉄錠				床面
63	S T 3 中央ビット	弥生土器 鉢	23.0 (4.8) —	内湾して立ちあがり口唇部は外傾及び左位に僅かに膨張して、口唇部は僅かに凹んで面をなす。	体部外表面はナダ調整を施し、指屈压痕を認める。体部内面は不定方向のハケ調整を施す。	
64	S T 6	・ 鉢	14.4 (6.2) —	内湾して立ちあがり口唇部は外傾して面をなす。	体部外表面は左下りの叩き調整の後不定方向のナダ調整を施す。体部内面は右下りのハケ調整の後瘤頭による縱方向のナダ調整を施す。	
65		・ 鉢	17.3 6.1 — 5.5	平底気球の底盤から内湾して立ちあがり、口唇部は僅かに凹んで面をなす。	体部外表面は瘤頭及び左下の叩き調整のナダ調整を施す。口唇部内面は横方向のハケ調整を施すが瘤頭横方向のナダ調整を施す。内・外側共指屈压痕を認める。	
66		・ 鉢	15.4 6.9 — 3.2	突出した平底から内湾気球に立ちあがり、口唇部は僅かに上方に膨張して口唇部は外傾して僅かに凹んで面をなす。	体部外表面は瘤頭及び右下の叩き調整の後、不定方向のナダ調整を施す。底盤内面は指屈による瘤頭調整を施す。体部内面は不定方向のハケ調整を施す。	
67		・ 鉢	11.7 7.3 —	丸底から内湾して立ちあがり、口唇部は丸くおきめる。	体部外表面は左下りの叩き調整の後、不定方向のナダ調整を施す。内面は右下りのハケ調整の後ナダ調整を施す。	
68		・ 鉢	21.2 12.3 — 4.0	丸底気球の底盤から外反気球に立ちあがり口唇部は丸くおきめる。	体部外表面は不定方向の叩き調整の後ナダ調整を施す。口唇部内面は右下りのハケ調整の後ナダ調整を施す。	

第12表 遺物観察表

検査番号	遺物番号	器種	口径 法基 (cm) 直径 深さ 底径	形態・文様	手法	備考
Fig 23 69	S T 6	弥生土器 甕	16.6 (7.3) — —	口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は外傾して面をなす。底部内面に棱を有す。	印き出し口縁である。外腹は横方向の叩き調整を施す。口縁部内面及び胴部上端内面は右下りのハケ調節を施す。估は指添による縱方向の強いナゲ調整を施す。	
		甕	16.0 (3.7)	口縁部は「く」の字状に屈曲して外反し、彌溝でさかに僅かに外反する。口神部は丸くおさめる。	内・外腹共横方向のナゲ調整を施す。「口縫部外腹に指添土痕を残す。頭部内面に斜土接合帯を有す。	
		甕	17.8 (11.5) — —	口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口神部は丸くおさめる。底部内面に棱を有す。	印き出し口縁である。外腹は左下りの叩き調整を施す。内腹は右下りのハケ調節の後、頸部は指添による縱方向の強いナゲ調整を施す。	
		甕	21.5 24.4 — —	内側して立ちあがり。口縁部は屈曲して大きく立ちあがる。胴部半位に最大径を有す。	口縁部外腹は縱方向のハケ調節。内腹は右下りのハケ調節を施す。胴部外面は左下りの叩き調整を施す。	
		全長 全幅 重量	7.3 2.5-3.2 70 g	手捏ねである。三叉型と考えられる。	指添土痕が頭著。	74と同一のものと考えられる。
		支脚	全長 全幅 重量	7.9 2.4-2.8 50 g	手捏ねである。屈曲して立ちあがる。三叉型と考えられる。	73と同一のものと考えられる。
Fig 24 76	S T 8	弥生土器 盆	8.9 9.4 9.1 2.6	断面長方形を呈す。表面両表面は凸凹して、使用のために凹む。		
		盆	— — — —	平底から内側して立ちあがり口縁部は外反する。口唇部は面をなす。	口縁部外腹は堅方向。内腹は右下りのハケ調節を施す。体部内面は右下りの叩き調節の後腹方向のハケ調節を施す。体部内腹は上右下りのハケ調節。下半は指添による不定方向のナゲ調整を施す。	
		盆	(6.0) — — 2.6	突出気味の平底から内溝して立ちあがる。	体部外腹は左下りの叩き。内腹は縱方向のハケ調節を施す。	
		盆	8.9 9.1 — 1.4	僅かに残る平底から内溝して立ちあがり口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部外腹は右下りのハケ調節。下半は対立ハケ原体によるハケ調節を施す。体部内腹上半は横及び右下りのハケ調節の後下方にかけて指添による縦方向のナゲ調整を施す。	
		盆	12.5 7.2 — 2.5	突出気味の平底から内溝に立ちあがり。口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部外腹は縱方向のハケ調節を施す。口唇部は横方向のハケ調節を施す。体部内腹は不定方向のハケ調節を施す。底部内面にしきり目頭著。	
		盆	13.8 8.4 — 3.4	平底から内側して立ちあがる。口唇部は面をなす。	体部外腹はナゲ調整。内腹は横方向のハケ調節を施す。体部外腹はナゲ調整。内腹は横方向のハケ調節を施す。底部内面はナゲ調整を施す。	
81	S T 8	盆	7.4 4.1 — 1.9	僅かに突出気味の底盤から内溝に立ちあがり。口唇部は丸くおさめる。	体部外腹はナゲ調整。内腹は横方向のハケ調節を施す。体部外腹はナゲ調整。内腹は横方向のハケ調節を施す。底部内面はナゲ調整を施す。	
		盆	8.9 4.1 — —	丸底から内側して立ちあがり。口唇部は面をなす。	体部外腹は右下りの筋屈なハラ崩き。内腹は街頭によるナゲ調整を施す。	
		盆	7.8 5.9 — 1.0	僅かに残る平底から内溝して立ちあがり。口唇部は外傾して面をなす。	体部外腹は右下りの筋屈なハラ崩き。内腹は街頭によるナゲ調整を施す。	
		盆	11.9 4.9 — 3.1	半底気味の底盤から斜上外方に直線的に立ちあがり。口唇部は内傾して面をなす。	体部外腹は縱方向のハケ→ナゲ→ナゲ→ナゲの順で仕上げる。体部内腹は不定方向のハケ調節の後ナゲ調整を施す。	
		盆	11.2 5.1 — 2.0	平底から内側して立ちあがり。口唇部は丸くおさめる。	体部外腹はナゲ調整。内腹は右下りのハケ調節を施す。	

第13表 遺物観察表

辨認番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口徑 器高 胴径 底径	形態・文様	手 法	備 考
Fig 24	86	弥生土器 体	12.0 6.7 — 3.4	平底から斜向外方に直線的に立ちあがり、山唇部は僅かに内側して口唇部は内側して曲をなす。	体部外側は叩き調整の後丁寧なナゲ調整を施し、部分的にハケ調整を施す。体部内面は不定方向のハケ調整を施す。底部内面はナゲ調整を施す。	底部内面に指圧痕を認める。
	87	・ 体	11.6 6.2 — 2.6	平底から内側して立ちあがり、口唇部は直線をなす。	体部内面は左下りの叩きの後ナゲ調整を施す。体部内面は不定方向のハケ調整を施す。	
	88	・ 体	12.6 5.5 — 1.2	丸底気球の底部から内側して立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。	体部外側はナゲ調整、内面は不定方向のハケ調整を施す。	
	89	・ 体	12.8 6.8 — 3.4	平底から内側気球に立ちあがり口唇部は直線をなす。	体部は・、外面共複数方向のナゲ調整を施す。内・外面共指圧痕を認める。	
	90	・ 体	16.4 7.0 — 5.4	突出気球の底部から内側して立ちあがり口唇部は外側に僅かに膨らむ。口唇部は直線をなす。	体部外側は左下りの叩き調整の後、山唇部外側は複数方向のハケ調整の後丁寧なナゲ調整を施す。体部内面は不定方向のハケ調整を施す。底部外側は指圧による強い凹陷を施し、7つの突起状を形成する。	
	91	・ 鉢	16.6 7.5 —	丸底から内側して立ちあがり口唇部は直線をなす。	全体ナゲ調整を施す。	
	92	・ 鉢	18.0 7.6 — 2.7	突出気球の平底から内側して立ちあがり、口唇部は直線をなす。	体部外側は右下りの叩き調整、内面は右下りのハケ調整を施す。	
	93	・ 鉢	17.4 8.4 — 1.9	僅かに突出気球の平底から内側気球に立ちあがり、口唇部は直線をなす。	体部外側は右下りの叩き調整、内面は右下りのハケ調整を施す。	
	94	・ 鉢	22.6 10.1 — 5.0	僅かに残る平底から内側して立ちあがり、口唇部は僅かに膨らして口唇部は外側で開いて直線をなす。	体部外側不定方向のハケ調整の後上部は横方向、それ以外は不定方向のハケ調整を施す。体部内面は右下りのハケ調整の後不定方向のハケ調整を施す。	
Fig 25	95	・ 高杯	13.6 (9.9) —	杯部は内側気球に立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。脚部は「ハ」の字状に大きく開き、「4孔を穿つ」。	杯部の内・外周辺、及び脚部の外側は丁寧なハケを施す。脚部内面は横方向のハケ調整を施す。	
	96	・ 高杯	12.7 11.5 — 11.7	杯部は内側気球に立ちあがり、口唇部は直線をなす。脚部は「7」の字状に開き、縫合部は直線をなす。	全表面及び脚部内面は不定方向のハケ調整。脚部内面は右下りのハケ調整の後横ナゲ調整を施す。	
	97	・ 高杯	— (5.5) — 23.0	脚部は「ハ」の字状に開き、「7孔を穿つ」と思われる。	外蓋は横方向のハケ調整の後上半は横方向のハラ巻き、下半は横方向のヘラ巻きを施す。縫合部は米開頭。	
	98	・ 蓋	— (7.8) — 18.1	「ハ」の字状に開き、縫合部は直線をなす。	口唇部及び山唇部外側はナゲ調整を施す。それ以外の外側は右下りのハケ調整を施す。口唇部から脚部上端内面にかけて大きいハケ原体による右下りのハケ調整の後指揮によるナゲ調整を施す。	
	99	・ 瓶	11.1 13.8 — 3.0	内溝して立ちあがり、口唇部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は各傾向で直線をなす。脚部内面に幾つも有する。底部は底盤後1孔を穿つ。	口唇部及び山唇部外側はナゲ調整を施す。それ以外の外側は右下りのハケ調整を施す。口唇部から脚部上端内面にかけて大きいハケ原体による右下りのハケ調整の後指揮によるナゲ調整を施す。	
	100	・ 壺	3.3 11.3 7.0 2.0	最大径を脚部上端に有す。平底から斜上弓方に直線的に立ちあがり、脚部上端で内側に屈曲して脚部に至る。脚部は垂直気球に立ちあがり、口唇部は内側して口唇部は丸くおさめる。	外側は不定方向のハケ調整を施す。内・外面共指圧痕を認める。脚部に粘土接着剤を認める。	
	101	・ 壺	9.1 — 2.3	丸底気球の底部から立ちあがり、脚部は球状を呈す。	外側は叩き→不定方向のハケ→ナゲの各調整で仕上げる。内面は上半ナゲ調整、下半は右下りのハケ調整を施す。	

第14表 遺物観察表

件番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口径 器高 側面 底径	形態・文様	手 法	備考
Fig 25 102	S T 8	朱生土器 壺	— (11.2) — 2.6	平底から内湾して立ちあがる。最大径を胴部上半に有す。	胴部外面上端は左下りの叩き、それより下、中位までは左下りの叩き調整。中位より下は縱方向のハケ調整を施す。胴部内面は上半段万字形のハケ調整。下平安テ調整を施す。	
103		壺	13.5 (3.7)	口縁部は外反して漏部を上・下に肥厚する。口唇部は面をなす。	口唇部は横方向のナデ調整を施す。底は丸耗が著しく腹部不可能である。	
104		壺	22.8 (4.4)	二重口縁である。口縁部は径をもって屈曲し内湾気味に立ちあがり、口唇部は外折して面をなす。	上口縁の外型は横方向のナデ、内面は横方向のハケ調整を施す。下口縁の外型は縱方向のハケ調整を施す。後段はナデ調整を施す。	
105		壺	— (26.2) 27.1 8.2	平底から内湾して立ちあがる。胴部中央位に最大径を有す。	胴部外面上端左下り叩きの後、縱方向及び右下りのハケ調整を施す。胴部下端下端はヘラ巻きを施す。胴部前面は中位より下やや下まで不定方向のハケ調整を施すがそれより下はラフ巻きを施す。	胴部外面上端は擡ける。
106		壺	— (23.1) 28.3 6.2	平底から内湾して立ちあがる。胴部中央位に最大径を有す。	胴部外面上端左下り叩きの後、縱方向及び右下のハケ調整を施す。胴部内面は元いゝケ原体による左右方向ハケ調整の後ナデ調整を施す。底盤内面はナデ調整を施す。底盤外側はハケ調整を施す。胴部内面に横腹底を認める。	
Fig 26 107		壺	25.6 (11.6) —	口縁部は胴部上端から大きく外反し、漏部は下方に僅かに肥厚して口唇部は面をなす。	口縁部は横方向及び右下のハケ調整を施す。胴部外面上端は左下りの叩き漏部の後丁寧に縱方向のハケ調整を施す。内面はナデ調整を施し、その後口縁部は不定方向のハケ調整を施す。	
108		壺	21.2 (28.9) 37.1	球状の漏部上端から口縁部はラッパ状に大きく外反し。口唇部は面をなす。胴部位に最大径を有す。	胴部外面上端は横方向及び右下のハケ調整の後不定方向のハケ調整を施す。さらに胴部外面上端に放射状の確又を施す。漏部は内・外筋共右下のハケ調整を施す。口唇部内面はラフ巻きを施す。胴部内面はハケ調整の後ナデ調整を施す。	
109		壺	— (29.7) 24.4 3.0	平底から内湾して立ちあがり。口縁部は大きく外反する。胴部中央位に最大径を有す。	口縫部は内・外面共右下のハケ調整を施す。胴部外面上半は左下り、中位は横方向、下半は左下のハケ調整の後右下のハケ調整を施す。胴部内面は元いゝケ原体によるハケ調整の後腹底によるナデ調整を施す。	
110		壺	20.6 31.6 28.6 8.2	平底気味の底盤を有する。底盤の胴部から漏部は直立気味に立ちあがり。口縁部はラッパ状に外反する。漏部は上・下に肥厚する。口唇部は面をなす。胴部中央位に最大径を有す。	口縫部及び口縁部外側はナデ、内面は横方向の丁寧なハケ調整を施す。漏部は内・外筋共右下のハケ調整を施す。胴部外側は元いゝケ原体による不定方向のハケ調整を施す。胴部内面は元いゝケ原体によるハケ調整を施す。漏部前面は横方向のナデ調整を施す。	
111		壺	22.0 (31.1) 29.0	球形の漏部から漏部は直立気味に立ちあがり。口縁部は屈曲して外反する。漏部は上方に肥厚する。口唇部は面をなす。胴部中央位に最大径を有す。	外側は漏部から胴部下端までは元いゝハケ原体で横方向のハケ調整を施す。胴部内面は右下りのハケ調整の後舌縁によく縱方向のナデ調整を施す。口縁部外側は横方向のハケ調整の後横方向のナデ調整を施す。漏部前面は横方向のナデ調整を施す。	
Fig 27 112		壺	17.2 31.6 26.0 5.4	平底から内湾して立ちあがり。口縁部は屈曲して外反する。漏部は上方に肥厚する。口唇部は面をなす。胴部中央位に最大径を有す。	胴部外面上端は横調整の後縱方向のハケ調整を施す。胴部内面は右下りのハケ調整の後舌縁によく縱方向のナデ調整を施す。口縁部外側は横方向のハケ調整の後横方向のナデ調整を施す。	

第15表 遺物観察表

件名番号	遺物番号	器種	口縁 器高 法量 (cm) 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
Fig 27 113	弥生土器 壺		18.0 35.4 28.8 6.0	平底から内湾して立ちあがり、口縁部は「く」の字状に屈曲して外反し、口縁底部は上・下に肥厚して、口唇部は面をなす。最大径を胴部中位に有す。	口縁部外面は腹方向のハケ調整の後横方向のナデ調整を施す。 口縁部内部は右下りのハケ調整の後横部は横方向のナデ調整を施す。胴部外側上半は左下り、中位は横方向、下半は左下りの叩き調整の後横方向のハケ調整を施す。 胴部内面は不定方向のハケ調整と不定方向のナデ調整を交互に施す。	
	114	壺	17.2 32.3 28.5 5.1	平底から内湾して立ちあがり、口縁部は「く」の字状に屈曲して外反し、口縁底部は上・下に肥厚して、口唇部は面をなす。最大径を胴部中位に有す。	口縁部外面は腹方向のハケ調整の後横方向のナデ調整を施す。 口縁部内部は右下りのハケ調整の後横部は横方向のナデ調整を施す。口唇部は横方向のハケ調整を施す。 胴部外側上半は右下り、下半は左下りの叩き調整の後横方向のハケ調整を施す。 胴部内面は不定方向のハケ調整と不定方向のナデ調整を交互に施す。	
	115	壺	15.0 26.6 22.8 4.1	平底から内湾して立ちあがり、口縁部は強く屈曲して外反する。口縁部は僅かに上・下に肥厚する。口唇部は僅に凹んで面をなす。最大径を中位より上に有す。	口縁部は内・外面共強い腹方向のナデ調整を施す。下側部外表面は複数の左下りの丁寧なラフ加工、そよより上は横方向のハケ調整を施すが、一部に下側部の叩き調整を認める。下側部内面は腹方向のハケ削り、中位は右下り及び腹方向のハケ削り、上位は指削によるナデ調整を施す。	兼用土器。 頭部外側全体が埋ける。
Fig 28 116	S T 8	壺	10.9 15.2 10.8 3.2	平底から内湾して立ちあがり口縁部は僅かに屈曲して外反する。口唇部は外方に僅かに肥厚して口唇部は面をなす。	叩き出し口縫である。口縁部外面は右下りのハケ調整を施す。外表面は明る上半は左下り、下半は右下りの叩き調整の後、下半は縦方向のハケ調整を施す。胴部内面は横方向の指削によるナデ調整を施す。	頭部外側は2次焼成を受けて軽く発色すると共に焼ける。
117		壺	12.2 17.1 12.8 3.0	平底から内湾して立ちあがり口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口縁底部は外方に僅かに肥厚して、口唇部は面をなす。	口唇部は左下り、口縁部外表面は腹方向のハケ調整を施す。口縁部内部は右下りのハケ調整を施す。胴部外表面は横方向の叩き調整の後、内面は腹方向のハケ削りである。	胴部外側は2次焼成を受けた軽く発色する。口縁部外面は堅ける。
118		壺	12.0 17.7 12.8 3.4	平底から内湾して立ちあがり口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口縁底部は外方に僅かに肥厚して、口唇部は面をなす。	口縁部外表面は腹方向のハケ調整、内面は右下りのハケ調整を施す。胴部外側上半は左下り、ト字右下りの叩き調整の後下半は要いナデ調整を施す。胴部内面は腹方向のハケ削りの後指削によるナデ調整を施す。	胴部外表面は2次焼成を受けた軽く発色する。
119		壺	11.0 17.3 12.8 2.5	平底から内湾して立ちあがり口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口縁底部は外方に僅かに肥厚して、口唇部は面をなす。	叩き出し口縫である。口縁部外表面は横方向のハケ調整を施す。胴部外側上半は左下り、ト字右下りの叩き調整の後下半は右下りのナデ調整を施す。胴部内面は右下りのハケ調整の後横方向のナデ調整を全面に施す。	胴部外表面は2次焼成を受けた軽く発色する。
120		壺	12.2 19.6 14.4 3.5	平底から内湾して立ちあがり口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は凹んで面をなす。	叩き出し口縫である。口縁部外表面は横方向のハケ調整、内面はナデ調整を施す。胴部外側上半は左下り、中位は右下り、下半は左下りの叩き調整を施す。胴部内面は指削による縦方向のナデ調整を施す。	
121		壺	13.4 20.8 15.1 3.5	平底から内湾して立ちあがり口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口縁底部は外方に僅かに肥厚して、口唇部は面をなす。	叩き出し口縫である。口唇部は不定方向のハケ調整、口縁部外表面は横方向のハケ調整、内面は右下りのハケ調整を施す。胴部外表面は左下りの叩き調整の後半位は部分的に横方向のハケ調整を施す。下半は部分的にナデ調整を施す。胴部内面は右下りのハケ調整を施す。	外面全体埋ける。

第16表 遺物観察表

掉団番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 器高 器径 底径	形態・文様	手 法	備考
Fig 28 122	弥生土器 壺		13.3 18.0 15.4 3.2	平底から内湾して立ちあがり口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口縁底部は外方に肥厚して、口唇部は面をなす。	口縁外部はナデ。外周は不定方向のハケ調整を施す。腹部外面上半左下り、下半横方向及び右下りの印き調査の後下位は総方向のナゲ調整を施す。腹部内面上面は左下り、下半はナゲ調整を施す。	腹部外面は2次焼成を受け紅く発色する。
			17.9 25.7 20.1 2.6	平底から内湾して立ちあがり口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口縁底部は上方に僅かに肥厚して、口唇部は外傾して面をなす。	叩き出し口縁である。口縁外部はナゲ調整、内面は荒いヶ原体による横方向及び右下のハケ調整を施す。腹部外面は右下りの印き調査を施し、下位は荒いヶ原体による横方向のハケ調整を施す。内面は荒いヶ原体による横方向及び右下のハケ調整を施す。	
			13.4 21.0 14.8 3.6	平底から内湾して立ちあがり口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。	叩き出し口縁である。口縁内部は右下のハケ調整を施す。腹部外面上半は左下り、中位は横方向、下半は右下りの印き調査を施し、下半はさらに右下のハケ調査を施す。腹部内面は上端部は右下のハケ調整、他は指頭による不定方向のナゲ調整を施す。	
Fig 29 125	S T 8 ・ 壺		13.7 27.3 17.8 4.7	平底から内湾して立ちあがり口縁部は屈曲して外反する。口縁底部は僅かに外方に肥厚して口唇部は面をなす。	口縁外部は総方向のハケ調整を施し、内面は右下りのハケ調整を施す。腹部外面上半は左下りの印き調査の後腹方向のハケ調整を施す。腹部内面は右下のハケ調査を施す。以下は指頭による横方向のナゲ調整を施す。	
			14.6 29.0 20.1 4.0	平底から内湾して立ちあがり口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は面をなす。	口縁部は内、外周先ハケ調査を施す。腹部外面は左下りの印き調査の後中位は不定方向のハケ調査を施す。内面は不定方向のハケ調査を施す。	腹部外面は剥ける。
			11.2 28.1 17.8 4.0	平底から内湾して立ちあがり口縁部は屈曲して外反する。口唇部は面をなす。	口縁部は右下のハケ調査を施す。腹部外面は左下りの印き調査の後腹方向のハケ調査を施す。腹部内面は右下のハケ調査を施す。	*
Fig 30 130	・ 壺		15.4 28.3 17.9 3.4	平底から内湾して立ちあがり口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は面をなす。	口縁部は内、外周先ハケ調査を施す。腹部外面は左下りの印き調査の後腹方向のハケ調査を施す。腹部内面は右下のハケ調査を施す。	*
			17.9 25.7 20.1 2.6	平底から内湾して立ちあがり口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口縁底部は上方に僅かに肥厚して、口唇部は外傾して面をなす。	叩き出し口縁である。口縁外部は叩きの後で横方向のハケ調整を施す。内面は横方向及び右下のハケ調査を施す。腹部外面上半右下りの印き調査の後下位は荒いヶ原体による横方向のハケ調整を施す。腹部内面は右下のハケ調査を施す。	
			18.2 (20.5) 22.0 —	内湾して立ちあがり口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する口唇部は面をなす。	叩き出し口縁である。口縁外部は叩きの後で横方向のハケ調整を施す。内面は横方向及び右下のハケ調査を施す。腹部外面は左下りの印き調査の後上位及び下位は右下のハケ調査を施す。腹部内面は右下のハケ調査を施す。	外周は全体が剥ける。
	131		13.4 22.9 15.7 2.9	僅かに残る平底から内湾して立ちあがり。口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は面をなす。	口縁部は内、外周共右下のハケ調整を施す。腹部外面は叩き調査を施すが性は剥離して観察是不可能である。腹部内面は右下のハケ調査の後ナゲ調整を施す。	

第17表 遺物観察表

博団番号	遺構番号	器種	口径 器高 厚度 法量 (cm) 重量 g	形態・文様	手法	備考
Fig 30 132	S T 8	弥生土器 甕	17.2 (21.5) 23.6	内尚して立ちあがり口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は面をなす。	口縁部外面は底方向。内面は横及び下下りのハケ調整を施す。腹部外側は上半左下り、下半右下りのハケ調整を施す。下部は後傾方向及び下下りの叩き調査の後底方向のハケ調整を施す。底部前面は右下りのハケ調整を施す。	外側全体が黒ける。
			13.6 34.1 28.4 2.3	僅かに残る平底気味の底部から内尚して立ちあがり口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口縁部は外方に僅かに肥厚して、口唇部は面をなす。	口縁部外面は底方向のハケ調整を施す。内面は右下りのハケ調整を施す。腹部外側は叩き調査の後底方向のハケ調整を施す。底部前面は窓いハケ原体で不定方向のハケ調査を施す。	
			— (24.3) 6.2	平底気味の底部から内尚して立ちあがる。	腹部外側は右下りの叩き調査の後下下は腹方向のハケ調整を施す。底部前面はハケ調査の後窓いハケ調整を施す。	
			— (17.0) 4.5	平底から内尚して立ちあがる。	腹部前面は叩き調査の後中位よりやや下下まで腹方向のハケ調整を施す。底部前面はハケ調査を施す。	
			12.6 (9.8) —	口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口縁部は外方に僅かに肥厚して、口唇部は面をなす。	口縁部は内・外表面ナガ調査を施す。腹部外面は左下りの叩き調査を施す。腹部内面は右下りのハケ調査の後、腹部内面のナガ調査を施す。	*
			— (11.5) 2.7	平底から内尚して立ちあがる。	腹部前面は右下りの叩き調査の後底方向のハケ調整を施す。腹部内面は叩き調査による強いナガ調査を施す。底部外面はハケ調査を施す。	
			— (11.5) 3.0	—	腹部前面は上半右下り、下半左下の叩き調査の後不定方向のハケ調整を施す。腹部内面は叩き調査による強いナガ調査を施す。底部外面はハケ調査を施す。	腹部外面は2次焼成を受けた紅色化する。
			— (12.6) 3.6	—	腹部前面は中位は横方向、下半は左下りの叩き調査の後横方向のハケ調整を施す。腹部内面は指滑による腹方向のナガ調査を施す。	
			— 18.4 18.0 3.7	—	腹部外側は上半左下り、下半は左下りの叩き調査の後横方向のハケ調整を施す。腹部内面は指滑による腹方向のナガ調査を施す。	
			— (19.3) 18.6 3.6	—	腹部外側は横方向叩き調査を施す。腹部内面は横方向のナガ調査を施す。	
			— (14.8) 3.5	—	腹部外側は叩き調査の後底方向のハケ調整を施す。底部外面はハケ調査を施す。	腹部外面は灰ける。

第18表 計測表

博団番号	遺構番号	器種	法量 全量 全幅 cm cm cm 重量 g	備考	博団番号	遺構番号	器種	法量 全量 全幅 cm cm cm 重量 g	備考
Fig 31 144	S T 8	上鏡	3.5 1.2 0.4 37	円筒形を呈す。	Fig 31 147	S T 8	瓶石	13.3 2.4 2.5 119	2面使用する。粘板岩製である。
			6.3 1.8 0.3 8.4					32.1 16.9 5.6 5,000	
			10.0 9.3 3.6 515	砂岩製である。					1面使用する。砂岩製である。
145	S T 8	鉄製 鍾			148	S T 8	瓶石		
146									

第19表 遺物観察表

検査番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口縁 部高 幅厚 底厚	形態・文様	手法	備考
Fig 32 149	S T 9	弥生土器 盆	— (4.1) — 4.8	平底から外反して立ちあがる。	外面は底方向のハケ調整を施す。 内面は指觸部直ぐ認めめるが傷は 磨耗が著しく観察が不可能である。	
150	S T 9 — P 1	* 壺	— (5.7) — 3.8	平底から斜上向外へ直線的に立ち あがる。	外面は不定方向の叩き調整の他、 底方向のハケ調整を施す。内面 は底頭による横方向の強いで 調整を施す。	
151		* 壺	— (12.5) — 7.3	平底から段をなして内湾気味に立 ちあがる。	崩壊部外側下の要い叩き調整の 後、下端はナデ調整を施す。 崩壊内面は振動による強い板方 向のナデ調整を施す。	
152	S T 9	* 壺	16.6 (13.2) 18.6	口縁部は「く」の字状に屈曲して 外反する。口唇部は面をなす。	口縁部外側は底方向のハケ調整の 他内面は不定方向のハケ調整を施す。 崩壊外側右下の叩き調整を施す。 崩壊内面は振動による強い板方 向のナデ調整を施す。	崩壊外側は擦ける 内面は不完全なハケ調整を施す。
153		* 鉢	20.7 (9.4) —	内湾して立ちあがり。口唇部は面 をなす。	体部外由はナデ調整を施し、指 頭圧痕調査。体部内面は不定方 向のハケ調整を施す。	
154		* 高杯	— (3.7) —	杯部は内湾して立ちあがる。脚部 は「ハ」の字状に大きく開く。	杯部外面は右ドリのハケ調整の 後ハラ磨きを施す。杯部内面は 指觸圧痕を認める。脚部外側は 底方向のハラ磨きを施す。	
155	S T 9 — P 1	鉢器 鉢	全長 7.0 全幅 1.0 全厚 0.3 重量 14.0g	全長 全幅 全厚 重量		
156	S K 3	弥生土器 鉢	10.3 7.6 — 1.6	平底から僅かに内湾して立ちあが り。口唇部は丸くおさめる。	体部外面はナデ調整を施す。体 部内面は内湾のナデ調整を施す。 口縁部は擦んで押拌して調 整する。	
157	S K 33	* 鉢	25.0 11.7 —	僅かに残る平底気味の底部から内 湾して立ちあがり。口縁部に至る。 口唇部は面をなす。	体部外面は叩きの後ナデ調整を 施す。体部内面は底方向のハケ 調整の後横・横方向のナデ調整 を施す。	
158		* 壺	19.6 (2.9)	口縁部は外反して立ちあがり。腰 をもって屈曲し内湾気味に立ちあ がる。口唇部は外傾して面をなす。	口縁部外側は下平緩方向のハケ 調整。上平緩方向のナデ調整 を施す。内面は横ナデ調整を施す。	
159	S D 12	* 壺	13.8 (4.5)	口縁部は「く」の字状に屈曲して 外反する。口唇部は面をなす。	崩壊上端外面は右下りのハケ調 整。内面ナデ調整を施す。口縫 部外側はナデ調整。内面は右ド リのハケ調整を施す。	
160		* 壺	(1.9) — 3.8	平底から外反して立ちあがる。	内・外面共磨耗が著しく観察不 可能である。	
161	P 213	* 鉢	10.0 5.0 — 1.8	丸底から内湾して立ちあがり。口 唇部は僅かに凹んで面をなす。	口縁部は擦んでナデ磨耗を施す。 体部外側は左下りの叩き調 整。内面ナデ調整を施す。	
162	P R 32	* 壺	15.8 (8.2)	口縁部は崩壊上端から大きく外反 する。口唇部は丸くおさめる。	口縫部下部及び側部外面は横方 向のハケ調整を施す。口縫部下 部内面は底方向、崩壊内面は不 定方向のハケ調整を施す。	
163	P 1021	* 壺	(5.3) — 4.6	平底から内湾気味に立ちあがる。	崩壊外側は底方向のハケ調整。 内面は崩壊底跡。	外面全体が2次焼 成を受け紅く発色 する。
164	P 1166	* 壺	14.2 (8.0)	口縁部は崩壊上端部から斜向外 に外反し、通部は下方に僅かに肥 厚する。口唇部は外傾して面をな す。	外面は右下りのハケ調整を施す。 頭部外側は指頭による横方向の ナデ調整を施す。口縫部内面は 不定方向のハケ調整。側部内面 は底方向で横方向のハケ 調整の後、崩壊内面を中心に指 頭による左下りのナデ調整を施 す。	
165	P 1500	* 鉢	7.6 6.3 — 0.7	突出気味の僅かに残る底から内 湾気味に立ちあがり。口縁部は僅 かに外反する。口唇部は丸くお さめる。	口縫部外側は横ナデ調整。体部 外側は縱方向のハケ調整の後ナ デ調整を施す。全体に指觸部を 認める。	

第20表 遺物観察表

採集番号	遺物番号	器種	法量 (cm) 口徑 器高 柄径 底径	形態・文様	手 法	備考
Fig 39 179	S T 2	土師器 高杯	12.7 10.0 — 11.8	口部は内湾気味に立ちあがり口縁部は雍やかに外反する。口唇部は丸くおさめる。脚部は「ハ」の字状に開いて、底部は丸くおさめる。	内・外面共曲輪を著しく觀察は不可能であるが、脚の内・外面共に指輪状痕を認める。	内・外並共に2次焼成で紅く発色する。
180		* 高杯	14.0 — —	口部は内湾気味に立ちあがり口縁部は外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部外縁は不定方向のナデ調整を施す。体部内面は横方向へのラブリのナデ調整を施す。口縫部内面は横ナデ調整を施す。	
181		* 甌	16.2 (6.5) —	口縁部は「く」の字状に外反して脚部は僅かに下方に屈する。腹部内面に棱を有する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部は内・外面六儀状ナデ調整を施す。肩部外縁は腹方向のハケ調整のナデ調整を施す。脚部内面は不定方向のハラ削りを施す。	
182		漆壺 蓋	— (3.4) — 14.2	僅かに内湾して立ちあがり段をなして頭部に至る。口唇部は丸くおさめる。	内・外面共横ナデ調整を施す。	
183	S T 4	*	甌 — — —	丸底気味の底部から内湾して立ちあがり。口縁部は「く」の字状に屈して外反する。口縫部は下方に僅かに外傾して、口唇部は外傾して向をなす。頭部内面に棱をもつ。	叩き出し口縁である。脚部外縁上半は右下り、中位は横方向の叩き出しがある。脚部内面は左下のナデ調整を施す。	
184		土師器 鉢	12.6 6.5 —	丸底から内湾して立ちあがり、口縁部は屈曲して外反する。口唇部は面をなす。	体部外縁はナデ調整。内面は不定方向のハケ調整を施す。口縫部外縁は横方向のハケ調整の後横ナデ調整を施す。脚部内面は左下のナデ調整を施す。	
185		* 鉢	(2.8) — 3.0	突出気味の平底から斜上外方に直線的に立ちあがる。	外縁叩き出しがある。内面不定方向のハケ調整を施す。	
186		* 甌	15.6 (14.6) —	内湾して立ちあがり。口縁部は「く」の字状に屈して外反する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部は内・外面共横ナデ調整を施す。脚部外縁は後及び右下の叩き出しがある。脚部内面は横方向の後不定方向のナデ調整を施す。脚部内面は右下のナデ調整を施す。	
187	S T 5	* 鉢	9.2 4.2 4.4	平底から斜上外方に僅かに外傾して立ちあがる。L1唇部は丸くおさめる。	外縁叩き出しがある。内面不定方向のナデ調整を施す。	
188		* 鉢	(5.5) 2.4	平底から内湾して立ちあがる。	体部は内・外面共ナデ調整の後部分的にハケ調整を施す。底部内面は数段状にハケ調整を施す。	
189		* 鉢	11.4 6.9 3.6	平底から内湾して立ちあがる。口唇部は外傾して面をなす。	体部外縁は横方向の叩き出しがある。脚部内面は不定方向のハケ調整の後下半は指輪によるナデ調整を施す。	
190		* 鉢	17.2 7.2 —	丸底気味の底部から内湾して立ちあがり一端肥厚して口縫部に至る。口唇部は斜上外方に直線的に立ちあがり。口唇部は丸くおさめる。	体部外縁はナデ調整を施す。口縫部及び脚部内面は右下のハケ調整。底部内面は不定方向のハケ調整を施す。	体部外縁に継状痕を認める。内面は有機物が付着する。
191	S T 7	* 甌	11.4 (9.0) —	内湾して立ちあがり原縁として口縫部に至る。口唇部は斜上外方に直線的に立ちあがり。口唇部は丸くおさめる。	内・外面叩き出しが著しく觀察不可。脚部と端内面に指輪状痕を認める。	
192		* 甌	13.0 (19.6) —	口縫部は「く」の字状に外反して口唇部は僅に屈んで面をなす。頭部内面に棱を有す。	口縫部は内・外面共右下のハケ調整を施す。脚部外縁は左下の叩き出しがある。下位はその後横方向のハケ調整を部分的に施す。脚部内面は右下のハケ調整を施し、それより下は横方向の指輪による強いナデ調整を施す。	脚部外縁は2次焼成で紅く発色。外縁全体が剥ける。
193	S T 7	打製 石砲丁	全長 9.1 全幅 6.0 全厚 0.7 重量 45g	片刃を有する。	刃の部分は磨く。両端部を打ち欠く。	個人品
Fig 40 194		漆壺 蓋	— 2.5 — 14.6	平坦な底盤から僅かに棱をもって下降し斜基部に至る。口唇部は丸くおさめる。	内・外面共横ナデ調整を施す。頭部外縁はヘラ削りを施す。	

第21表 遺物観察表

掲図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 脚径 底径	形態・文様	手法	備考
Fig 40 195		須恵器 杯	12.0 (2.6) — —	内湾気味に立ちあがり、受端部は丸くおさめる。立ちあがりは外反気味に内傾し、端部は丸くおさめる。	内・外面共横ナゲ調整を施す。		
196	S T 7	土師器 甕	19.3 (19.6) — —	内湾して立ちあがり、口縁部は外反する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部は内・外面共横ナゲ調整を施す。腹部内面は右下りのへき削りを施す。腹部外側は不定方向のハケ調整の痕ナゲ調整を施す。制部に粘土接合帯を認める。	腹部外側は2次焼成で紅く発色し、焼ける。	
197		。甕	— (6.0) — 10.0	平底から内湾気味に立ちあがる。	外腹は丁寧なナゲ調整を施す。内面は不定方向のハケ調整の痕ナゲ調整を施す。		
198		。甕	34.6 (7.5) — —	内湾気味に立ちあがり、口縁部は屈曲して外反する。口唇部は丸くおさめる。	内・外面共横ナゲ調整を施す。内・外面共指頭圧痕を認める。		
199		須恵器 甕	14.2 (3.4) — —	須部から腰やかに下降して端部に至る。口唇部は丸くおさめる。	内・外面共横ナゲ調整を施す。		
200		。甕	13.8 (3.3) — —	頂部から腰やかに下降し段をなしで外方に開がる。口唇部は丸くおさめる。	*		
201		。杯	11.9 (1.9) — —	立ちあがりは薄く内傾して端部は丸くおさめる。	内面は横ナゲ調整を施す。	外面は自然輪がかかる。内面は赤褐色に発色する。	
202	S T 10	。甕	10.7 4.5 — 4.0	丸底気味の底部から内湾気味に立ちあがり、受端部は丸くおさめる。立ちあがりは薄く内傾して端部は丸くおさめる。	底部外側はヘラ削りを施す。底部内面は指頭による強い放射状のナゲ調整を施す。		
203		。甕	— (2.5) — 7.3	平底から内湾して立ちあがる。	内面はロクロ目調査。底部外側は圓輪へき削り。		
204		弦生土器 瓶	— (6.7) — 3.0	平底から内湾して立ちあがる。底部に焼成前に穿った2孔を認める。	底部外側は不定方向の叩き調整を施す。底部内面は右下りのハケ調整を施す。		
205	土師器 甕	14.0 (10.5) — —	口縁部は屈曲して外反する。口唇部は丸くおさめる。	底部外側は横方向の丁寧なハケ調整を施す。制部内面は強い横ナゲ調整を施す。底部外側に指頭痕を認める。			
206		。甕	15.6 (9.7) — —	内湾して立ちあがり、口縁部は「く」の字形に屈曲して外反する。口唇部は丸くおさめる。底部内面に接する所を有する。	底部外側は磁力方向のナゲ調整。内面は下から上方へのヘラ削りを施す。口縁部は内・外面共横ナゲ調整を施す。		
207		弦生土器 甕	29.8 (6.7) — —	口縁部は「く」の字形に屈曲して外反し、底部は把耳として肩部は直角をなす。肩部に突起を有し木口で制目を施す。	口縁部は内・外面共ハケ調整を施す。制部上端外側は横方向のハケ調整を施す。		
208	S K 14	須恵器 高杯	(2.4) — 9.9	内湾して立ちあがり、口縁部は僅かに肥厚する。	内・外面共横ナゲ調整を施す。		
209	S D 4	棒状 印石	全長(8.1) 全幅(5.7) 全厚 3.5 裏厚21.8g	断面橢円形を呈す。端部に打撃痕を認める。			
210	P 1803	須恵器 甕	— (5.6) — 10.2	外腹中央が凹む底部から内湾気味に立ちあがる。	内・外面共丁寧な横ナゲ調整を施す。底部外側へき削り。		

第22表 遺物観察表

標図番号	遺物番号	器種	法量 (cm) 口徑 高 度 底 径	形態・文様	手法	備考	
	Fig 46 211	黒色土器 椀	14.5 5.7 — 7.0	外方に隆張る附付輪高台から内側して立ちあがり口縁部に至る。口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部外面は横ナデ調整。体部内面は体部上半まで3条の横方向のヘラ巻き、他は単位がわからないほど丁寧なヘラ巻きを施す。底部外面はヘラ切りの後ナデ調整を施す。	Aタイプ	
	212	+	14.0 5.6 — 7.2	内溝気球の附付輪高台から内側して立ちあがり口縁部に至る。口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部外面は横方向のヘラ巻き、内面は単位がわからないほど丁寧なヘラ巻きを施す。口縁部内面は丸い形のヘラ巻きを施す。	*	
	213	+	14.6 (4.9) — (7.1)	輪高台欠損。内溝して立ちあがり口縁部に至る。口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部外面は横方向のヘラ巻き、内面は単位がわからないほど丁寧なヘラ巻きを施す。口縁部内面は丸い形のヘラ巻きを施す。	*	
	214	+	14.1 (5.1) — (6.2)	輪高台欠損。内溝して立ちあがり口縁部に至る。口縁部斜面上部に直線的に立ちあがり口唇部は丸くおさめる。	口縁部内面は横ナデ調整を施すが、他は単位がわからないほど丁寧なヘラ巻きを施す。体部外面はクロクロ目調子。底部外面頭軸ヘラ切り後丁寧なナデ調整を施す。	*	
	215	+	14.2 5.7 — 6.4	外方に隆張る貼付輪高台を有する。縁部は丸くおさめる。内側して立ちあがり口縁部に至る。口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部外面下端にクロクロ目調子を有し、外面部に摩耗し継続不可能である。	*	
	216	S E I I層上	+	14.9 6.4 — 7.0	外方に隆張る附付輪高台を有する。縁部は丸くおさめる。内側して立ちあがり口縁部に至る。口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部外面は横ナデ調整。体部外面は横方向のヘラ巻き、内面は単位がわからないほど丁寧なヘラ巻きを施す。	*
	217		+	13.9 (4.9) — (7.3)	輪高台欠損。内溝して立ちあがり口縁部に至る。口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	底部外面は頭軸ヘラ切り。他は巻物が著しく観察不可能である。	Aタイプ 体部外面は錆び、 2次焼成を受けて 黒化。
	218		+	14.7 6.1 — 7.2	外方に隆張る附付輪高台を有する。縁部は直線的に外方に立ちあがり、口縁部は直線的に外方に立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	体部外面はクロクロ目調子。内面は出位の少ないほど丁寧なヘラ巻きを施す。底部外面はヘラ切りの後ナデ調整を施す。	Aタイプ
	219		+	14.8 (5.6) — (7.1)	輪高台欠損。内溝して立ちあがり口縁部に至る。口唇部は丸くおさめる。	口縁部内面は1条のヘラ巻きを施す。体部外面はクロクロ目調子。内面丁寧なヘラ巻きの後放射状の暗文を施す。	*
	220		+	15.2 5.9 — 7.2	外方に隆張る附付輪高台を有する。縁部は直線的な。内側して立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	口縁部外面は横ナデ調整の後、底部内面まで単位がわからないほど丁寧なヘラ巻きを施す。複方向の暗文を施す。体部外面は横方向のヘラ巻きを施す。底部外面はヘラ切りの後丁寧なナデ調整を施す。	*
	221		+	14.7 (5.5) — (7.5)	輪高台欠損。内溝して立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。	口縁部外面から体部上端内面にかけて3条の横方向のヘラ巻きの後放射状に暗文を施す。底部外面はヘラ切り。	Aタイプ 外面部全体が黒ける。
	222		+	15.1 6.2 — 7.2	外方に隆張る附付輪高台を有する。縁部は直線的な。内溝して立ちあがり、口縁部は直線的に斜上方に立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	口縁部外面は2条の横方向のヘラ巻きを施す。体部内面は丁寧なヘラ巻きを施した後上半は波状、下半は放射状の暗文を施す。	Aタイプ
	223		+	14.3 (5.3) — (7.5)	輪高台欠損。内溝して立ちあがり口縁部に至る。口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部内面は3条の横方向のヘラ巻きを施す。体部内面は丁寧なヘラ巻きを施した後放射状の暗文を施す。体部外面は波状が著しく観察不可能である。	Aタイプ 体部外面は焦げる。
	224		+	15.2 6.3 — 6.8	外方に隆張る附付輪高台を有する。縁部は直線的な。内側して立ちあがり口縁部に至る。口縁部は直線的に斜上方に立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	口縁部内面は横ナデ調整の後横方向のヘラ巻き、体部内面は丁寧なヘラ巻きの後複方向の暗文を配す。	Aタイプ
	225		+	— (4.1) — 7.2	縦い附付輪高台から内側して立ちあがる。	体部外面は横方向のヘラ巻きを施す。体部内面はヘラ巻きの後放射状の暗文を配す。	*

第23表 遺物観察表

種別番号	遺物番号	器種	法量 (cm)	口径 高径 横径 底径 底深	形態・文様	手 法	備考
Fig 46 226		黑色土器 椀	15.1 6.9 — 7.3	重圓気味の細い輪高台を有す。端部は面をなす。内溝して立ちあがり口縁部に凹る。口縁部は斜上外方に直線的に立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	口縁部と体部内面の境に横方向の「ハ」字形のへら削りが施され、その後横方向の「フ」字形を施す。体部は「ハ」字形の後放射状の縮文を施す。底部と体部との境に粘土接合痕を認める。	Aタイプ	
	227	* 梗	15.2 6.3 — 7.2	低い輪高台を有す。端部は面をなす。内溝して立ちあがり、口縁部に凹る。口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	口縫部内面はナデ調整。体部上端は横方向の「ハ」字形を施す。丁寧な「フ」字形の後放射状の縮文を施す。	*	
	228	* 梗	(4.5) — (6.7)	輪高台欠損。内溝して立ちあがる。口縁部は丸くおさめる。	体部外表面は横方向の「ハ」字形を施す。体部内面は丁寧な「フ」字形の後放射状の縮文を施す。底部外表面は円軌へら切り。	*	
	229	* 梗	17.3 (5.6) —	輪高台欠損。内溝して立ちあがり、口縁部に凹る。口縁部は丸くおさめる。	口縫部内面は横方向の「フ」字形を施す。他は単位がわからぬいほど丁寧な「ハ」字形を施す。体部外表面はナデ調整の後横方向の「ハ」字形を施す。	*	
	230	* 梗	17.0 (6.9) — (7.1)	輪高台欠損。内溝して立ちあがり、口縁部に凹る。口縁部は僅かに外反する。口縫部内面は軽い沈継が通る。	体部外表面は横方向の「ハ」字形を施す。体部内面は横方向の「ハ」字形が2条並んで、その後放射状及び輪状の縮文を施す。	*	
	231	* 梗	14.4 5.5 — 6.8	外方に張り出す輪高台から内溝して立ちあがり口縁部は丸くおさめる。	体部外表面は横方向の「ハ」字形を施す。内面は口縁部から体部中位まで3条の横方向の「ハ」字形を施し他は涼な磨きを施す。	*	
	232	土師器 蓋	14.0 3.1 — 5.6	圓状の溝みを有す。平底な底部から屈曲して下垂し端部に至る。底部は丸くおさめる。	内面はロクロ目調子。外表面は横方向の「ハ」字形を施す。圓状の側面に粘土接合痕を認める。		
上層	233	* 台付皿	— (4.5) — 8.6	平底の外周の内側に足高の「ハ」の字形に大きく開く脚を有する。端部は肥厚して丸くおさめる。	底部と体部との境に強い横ナデ調整で僅かに凹む。内・外表面横方向の「ハ」字形を施す。底部外表面は「フ」字形。		
	234	* 台付皿	— (3.3) — 5.8	平底の外周の内側に足高の「ハ」の字形に大きく開く脚を有する。端部は面をなす。体部は斜上外方に外反気味に立ちあがり口縁部は丸くおさめる。口縫部内面は軽い凹溝を巡らす。	内・外表面共横ナデ調整を施す。底部外表面は回転ヘラ切り。		
	235	* 台付皿	9.2 3.6 — 6.0	底部外周の内側に足高の「ハ」の字形に大きく開く脚を有する。端部は面をなす。底部は平底から外反気味に立ちあがり口縁部は丸くおさめる。口縫部内面は軽い凹溝を巡らす。	内・外表面共横ナデ調整を施す。底部外表面は回転ヘラ切り。	ほほ完形	
	236	* 台付皿	(3.5) — 5.6	底部外周の内側に足高の「ハ」の字形に大きく開く脚を有する。端部は面をなす。底部は平底から外反気味に立ちあがる。	内・外表面共横ナデ調整を施す。底部外表面は回転ヘラ切り。		
	237	* 脚付皿	14.7 (2.4) —	平底から斜上外方に直線的に立ちあがり、口縁部は僅かに外反する。口縁部は丸くおさめる。底部と体部との境の3脚は欠損。	内・外表面共横ナデ調整を施す。底部外表面は回転ヘラ切りの後荒いナデ調整を施す。		
Fig 47 238		* 盆	9.4 1.4 — 6.4	平底から外反して立ちあがる。口縁部は丸くおさめる。	体部内・外表面共ロクロ目調子。底部外表面は回転ヘラ切り、及び板目調子を認める。	ほほ完形	
	239	* 盆	9.3 1.9 — 6.7	平底から外反して立ちあがり。口縁部は丸くおさめる。	内・外表面共ロクロ目調子。底部外表面は回転ヘラ切り。		
	240	* 盆	9.9 1.4 — 6.5	中央が僅かに凹む平底から外反して立ちあがる。口縁部は僅かに内溝して口縁部は丸くおさめる。	内・外表面共ロクロ目調子。底部外表面は回転ヘラ切り。	*	
	241	* 盆	9.4 1.35 — 5.9	平底から斜上外方に立ちあがり。口縁部は丸くおさめる。	口縫部は横で横ナデ調整。他横ナデ調整を施す。底部外表面は回転ヘラ切り。	完形	
	242	* 盆	11.2 1.6 — 10.0	平底から外反して立ちあがり。口縁部は丸くおさめる。	内・外表面共横ナデ調整を施す。		

第24表 遺物観察表

排番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口径 器高 底径	形態・文様	手 法	備 考
Fig 47 243	S E I I 層 上	土器部 皿	9.6 1.4 — 5.9	中央が僅かに凹む平底から内反気味に立ちあがり、口縁部は外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部外周は回転ヘラ切り。	完形 内面半分が残る。
244			10.3 2.2 — 7.6	平底気味の平底から外反して立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共クロロ目調査。 底部外周は回転ヘラ切り及び板目痕調査。	
245		△ 杯	10.3 3.1 — 6.6	平底から僅かに段をもって内反気味に立ちあがる。口縁部内面に軽い凹縫を認める。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部外周は回転ヘラ切りの後ナデ調整を施す。	
246		△ 杯	10.0 2.6 — 6.8	平底から僅かに段をもって内反気味に立ちあがり、口縁部内面に軽い凹縫を認める。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部外周はクロロ目調査。 底部外周は回転ヘラ切りの後完いナデ調整を施す。	
247		△ 杯	10.1 3.4 — 5.3	平底から僅かに段をもって僅かに外反して立ちあがり、口縁部は肥厚する。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共クロロ目調査。 底部外周は回転ヘラ切り。	完形
248		△ 杯	10.0 3.2 — 6.9	平底から僅かに段をもって斜上外方に直線的に立ちあがり、体部中段が僅かに凹む。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共クロロ目調査。 底部外周は回転ヘラ切りの後完いナデ調整のナゲ調整を施す。 又板目痕を認める。	
249		△ 杯	10.0 3.1 — 6.7	中央部に凹出気味の平底から僅に段をもって外反気味に立ちあがり、口唇部は肥厚して口縁部に至る。口唇部は丸くおさめる。	底部外周はクロロ目調査。内面は横ナデ調整を施す。底部外周は回転ヘラ切り及び板目痕を認める。	完形
250		△ 杯	11.0 2.9 — 7.7	平底から僅かに段をもって斜上外方に直線的に立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共クロロ目調査。 底部外周はヘラ切り。	
251		△ 杯	9.7 3.3 — 5.9	平底から僅かに段をもって外反気味に立ちあがり、口縁部は斜上外方に直線的に立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共クロロ目調査。 底部外周は斜上外方に直線的に立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	外面部色に対して内面にはぶい黄褐色を呈し一部焼ける。
252		△ 杯	10.2 3.3 — 7.0	平底から僅かに段をもって外反気味に立ちあがり。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共クロロ目を認め。底部外周は回転ヘラ切りの後ナデ調整を施す。又板目痕を認める。	全体内・外面共保ける。
253		△ 杯	10.0 3.2 — 6.6	平底から僅かに段をもって外反気味に立ちあがり。口唇部は丸くおさめる。口縁部内面に凹縫を認める。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部外周は回転ヘラ切り。	
254		△ 杯	10.0 3.5 — 6.4	平底気味の底部から斜上外方に直線的に立ちあがり、口唇部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部外周は回転ヘラ切りの後ナデ調整を施し、板目痕を認める。	体部内・外面共に残る。
255		△ 杯	9.5 2.7 — 6.4	平底から外反して立ちあがり。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部外周は回転ヘラ切りの後ナデ調整を施し、板目痕を認める。	
256		△ 杯	9.3 2.9 — 6.1	平底気味の底部から外反気味に立ちあがり。口縁部は肥厚して僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部外周は回転ヘラ切りの後ナデ調整を施す。	体部内・外面共保ける。
257		△ 杯	10.2 3.2 — 6.9	平底気味の底部から斜上外方に直線的に立ちあがり。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部外周は回転ヘラ切り及び板目痕を認める。	
258		△ 杯	10.1 3.2 — 6.4	平底から斜上外方に直線的に立ちあがり。口縁部内面に凹縫を認める。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部外周は回転ヘラ切りの後ナデ調整を施す。	
259		△ 杯	9.6 3.0 — 6.4	平底気味の底部から斜上外方に直線的に立ちあがり。口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部外周にクロロ目を認める。底部外周は横ナデ調整を施す。底部外周は回転ヘラ切り及び板目痕を認める。	完形

第25表 遺物観察表

辨認番号	遺機番号	器種	法度 (cm) 口徑 器高 柄径 底径	形態・文様	手法	備考
Fig 47 260	S E I I層 上	土縫器 杯	9.7 3.1 — 6.2	平底から僅かに外反気味に立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	体部外面及び底部内面はロクロ目調査。底部内面は横ナガ調整を施す。底部外表面はヘラ切り。底部外表面中央に指顎圧痕を認める。	
261		* 杯	10.5 3.4 — 6.9	中央が突出気味の平底から外反気味に立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外共横ナガ調整を施す。底部外表面は回転ヘラ切り後残りナガ調整を施す。	
Fig 48 252	S E I I層 上・中	* 杯	11.2 4.0 — 6.8	平底から内湾気味に立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。	体部内・外共横ナガ調整を施す。底部外表面は部分的ヘラ切り。	
263		* 杯	10.0 3.0 — 7.0	平底から外反気味に立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。	体部内・外共横ナガ調整を施す。底部外表面は回転ヘラ切りの後残りナガ調整を施す。	
264	S E I I層 上・中・下	* 杯	9.8 3.1 — 6.3	平底気味の底盤から斜外方に直線的に立ちあがり、口縫部は巻曲して外反する。	体部内・外共横ナガ調整を施す。底部外表面は回転ヘラ切りの後ナガ調整を施す。底部と体部の接合外表面は部分的ヘラ切りを施す。	
265	S E I I層 上・中	* 杯	12.2 5.2 — 6.4	平底から内湾気味に立ちあがり、口縫部は僅かに外反する。	体部内・外共共横ナガ調整を施す。底部外表面は回転ヘラ切りの後ナガ調整を施し、板目調査を認める。	
266	* 杯		13.5 4.1 — 7.4	平底から僅かに段をもって外反気味に立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。口縫部内面に輕い底盤を認める。	体部内・外共横ナガ調整を施す。底部外表面は回転ヘラ切りの後ナガ調整を施す。	完形
267		* 杯	11.4 4.6 — 5.6	平底から僅かに段をもって内湾気味に立ちあがり、口縫部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外共横ナガ調整を施す。底部外表面はヘラ切りの後ナガ調整を施す。	
268	* 瓶		12.3 4.7 — 6.5	ベタ高台から内湾気味に立ちあがり、口縫部は丸くおさめる。底部内面は凹む。	体部外表面はロクロ目調査。体部内面横ナガ調整を施す。底部外表面は回転ヘラ切り。	
269		* 瓶	11.7 4.5 — 6.7	ベタ高台から内湾気味に立ちあがり、口縫部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外共横ナガ調整を施す。底部内面はロクロ目調査。底部外表面は回転ヘラ切り及び板目調査を認める。	
270	S E I I層 上	* 瓶	13.7 4.7 — 7.5	外曲中央が僅かに凹むベタ高台から内湾気味に立ちあがり、口縫部は丸くおさめる。口縫部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外共横ナガ調整を施す。底部外表面は回転ヘラ切りの後ナガ調整を施す。	
271		* 瓶	11.7 4.6 — 6.0	ベタ高台から内湾気味に立ちあがり、口縫部に凹む。口縫部は丸くおさめる。底部内面は凹む。	体部内・外共横ナガ調整を施す。底部外表面は回転系切り。	
272	* 瓶		11.6 5.5 — 6.6	ベタ高台から内湾気味に立ちあがり、口縫部に斜上外方に直線的に立ちあがる。口縫部は丸くおさめる。底部内面は凹む。	体部内・外共横ナガ調整を施す。底部外表面は回転系切り。	
273		* 瓶	13.6 5.3 — 6.6	ベタ高台から内湾気味に立ちあがり、口縫部に斜上外方に直線的に立ちあがる。口縫部は丸くおさめる。底部内面は僅かに凹む。	体部内・外共横ナガ調整を施す。底部外表面は回転系切り。	
274	瓶		16.0 5.8 — 7.4	ベタ高台から内湾気味に立ちあがり、口縫部は僅かに外反する。口縫部は丸くおさめる。底部内面は凹む。	体部内・外共横ナガ調整を施す。底部外表面は回転系切り。体部内・外共に火摩を認める。	体部外表面は搽ける。
275	* 瓶		15.1 6.3 — 6.4	ベタ高台から内湾気味に立ちあがり、口縫部は僅かに外反する。口縫部は丸くおさめる。底部内面は凹む。	体部外表面はロクロ目調査。体部内面横ナガ調整を施す。底部外表面は回転系切り。	施成不良
276		* 瓶	15.2 5.9 — 6.8	ベタ高台から内湾して立ちあがり、口縫部は外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部外表面はロクロ目調査。底部内面は垂糸が垂らしく観察不可能。底部外表面は回転系切り。	*
277	* 瓶		15.6 5.7 — 7.7	ベタ高台から内湾して立ちあがり、口縫部は外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外共ロクロ目調査。底部外表面は回転系切り。	

第26表 遺物観察表

博物番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口徑 器高 制径 底径	形態・文様	手法	備考
Fig 48 278	S E 1	頭蓋器 柄	15.6 5.8 — 7.4	ベタ高台から内溝して立ちあがり。 口縫部は内面に僅かに肥厚し、外反する。 口唇部は丸くおさめる。 底面内面は凹む。	体部内・外面部共横ナガ調整を施す。 体部上面中位下に粘着合着を認める。 底部外側は回転糸切り。 内・外面共に「+」の字の火摩を認める。	—
279	I 層 上	主副器 柄	15.4 5.4 — 7.0	ベタ高台から斜に外方に直線的に立ちあがり、体部上半で内溝し口縫部は僅かに外反する。 口唇部は丸くおさめる。 底部内面は凹む。	体部外側はロクロ口を認める。	—
280	S E 1 I 層 上・下	頭蓋器 柄	13.6 6.3 — 6.7	ベタ高台から内溝気味に立ちあがり。 口縫部は丸くおさめる。 底部内面は凹む。	体部外側はロクロ口を認める。 体部外側に一定方向のナガ調整を施す。 体部内面横ナガ調整を施す。 底面内面は回転糸切り。	—
281	S E 1 + 柄	14.2 6.2 — 6.8	ベタ高台から内溝して立ちあがり。 口縫部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。 底部内面は凹む。	体部内・外面部共横ナガ調整を施す。 底面外側は回転糸切り。	—	
282	I 層 上・中	+ 柄	17.3 6.2 — 7.2	ベタ高台から内溝して立ちあがり。 口縫部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部外側は上端から口縫部にかけて横方向のヘラ削きを認める。 底部外側は回転糸切り。 内・外面共に火摩を認める。	体部外側は僅かに火摩を認める。
Fig 49 283		土器器 柄	24.4 — 4.6	外方に踏張る貼付輪高台から内溝して立ちあがる。	摩耗が著しく観察不可能	—
284	S E 1 + 柄	13.8 5.1 — 7.0	外方に踏張る貼付輪高台から内溝気味に立ちあがり。口縫部は僅かに外反する。 口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面部共ロクロ口認める。 底部外側はヘラ切りの後ナゲ溝を施す。	—	
285	I 層 上	+ 柄	13.9 6.1 — 6.6	外方に踏張る薄い貼付輪高台を有し、内溝して立ちあがり口縫部内面に1条の縦い沈擦を認める。	体部外側ロクロ口認める。体部内面に堅模痕を認める。	—
286	頭蓋器 柄	16.4 6.8 — 7.5	外方に踏張る貼付輪高台から内溝して立ちあがり。口縫部は外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部外側はロクロ口を認める。内面は丁寧なナガ調整を施す。底部外側はヘラ切りの後ナゲ溝を施す。	—	
287	+ 柄	17.9 8.6 — 7.7	外方に踏張る貼付輪高台から内溝して立ちあがり。口縫部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。 口縫部内面に1条の沈擦を認める。	体部外側はロクロ口を認める。内面は丁寧なナガ調整を施す。 体部内面は横方向のヘラ削きを施す。 底部外側はロクロ口ナゲ調整を施す。 内・外面共に火摩を認める。	—	
288	+ 片口鉢	24.0 12.4 — 12.1	平底から内溝して立ちあがり。口縫部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめし1条の凹溝が認める。口縫部に指領を有する。	体部内面で粘土を接着し、頭頂部で押付する。その後内・外面共ナゲ調整を施す。	—	
289	S E 1 I 層 上・下	上部器 裏	32.6 (23.3) 23.5	内溝して立ちあがり頭部中央から直線状に立ちあがる。口縫部は屈曲して外反する。口縫部は上方に僅かに肥厚し、口唇部は圓なし僅かに凹む。頭部半位に最大径を有す。	口縫部は下半内・外面部共横方向のナゲ調整を施す。頭部上端は縱方向のハケ溝調整の後横方向のハケ調整を施す。以下は左下の押付と丁寧なナゲ調整。丸底気味の底部は不定方向の凹き調整を施す。頭部内面に指領は残す。	外面は全体的に僅かに火摩を認める。
Fig 50 290	S E 1 I 層 上	+ 裏	29.8 (20.5) 24.8 —	内溝して立ちあがり頭部中央直線状に立ちあがる。口縫部は屈曲して外反する。口縫部は上方に僅かに肥厚し、口唇部は圓なし僅かに凹む。	口縫部は下半内・外面部共横方向のハケ溝調整を施す。「大」と記された割れを有す。頭部上端は縱方向のハケ溝調整の後横方向のハケ溝調整を施す。以下は左下の押付と丁寧なナゲ調整。頭部内面は横方向のハケ溝調整を施す。頭部上端より下はナゲ調節を施す。頭部内・外面共に指領は残す。	外面は全体的に僅かに火摩を認める。
291	S E 1 I 層 上	+ 割書き器	35.0 (25.6) 29.4	内溝して立ちあがり頭部中央直線状に立ちあがる。口縫部は屈曲して外反する。口縫部は上方に僅かに肥厚して口唇部は圓なし僅かに凹む。	口縫部内面は横方向のハケ溝調整を施す。「大」と記された割れを有す。頭部上端は縱方向のハケ溝調整の後横方向のハケ溝調整を施す。以下は左下の押付と丁寧なナゲ調整。頭部内面は横方向のハケ溝調整を施す。頭部内・外面共に指領は残す。	外面は全体的に僅かに火摩を認める。
292		+ 羽釜	19.8 (6.8)	大きく彫り出す鉢を有す。内溝気味に立ちあがり口縫部は内側に僅かに肥厚し、口唇部は圓をなす。	頭部内面で強く横ナゲを施す。頭部背部に指領を有する。頭部上端から横方向のハケ溝調整を施す。内面共にナゲ調節を施す。	—

第27表 遺物観察表

埠図番号	遺構番号	器種	注意 (cm)	口徑 深高 側厚 底径	形態・文様	手法	備考
Fig 51 293	土器 羽釜		24.0 (10.6) —	断面台形の器を有する。鈎端部は僅に凹む。脚下部及び脚部下位に粘土接合帯を認める。底部は外反気味に立ちあがり。口部部は丸くおさめる。	脚部上位は内・外共横方向のハケ調整を施す。口縁部内面は横ナダ調整を施す。	脚部外面は僅ける。	
		*	25.2 (6.2) —	器の底盤は丸くおさめる。内側して立ちあがり。口縁部は僅に移をもって内傾する。口部部は丸くおさめる。	口縁部及び器は織んで強いナダ調整を施す。脚部上端は横方向のハケ調整を施す。脚部の接合部に強い羽根状底を認める。	外表面は2次施成で紅く発色する。	
		*	27.6 (4.9) —	断面長方形の器を有す。器の底盤に粘土接合帯を認める。直線的に立ちあがり。口縁部は僅に内傾する。口部部は直角です。	外表面は横方向のハケ調整を施す。器の接合部及び内面に指痕状底を認める。	外表面は2次施成で紅く発色する。内面は煮焦を認める。	
	S E 1 I層上	*	28.8 (9.0) —	口縁部より5.7cm下に断面三角形状の小さな溝を有す。直線的に立ちあがり。口縁部は外反して口部部は外傾して面をなす。	脚部上端部外側は横方向のハケ調整及びナダ調整を施す。脚部上端から上は横方向、下は縦方向の指痕による強いナダ調整を施す。	内面は煮焦を認める。	
		*	21.0 (9.8) —	断面三角形の器をし底部に寄す。直線的に立ちあがり。口縁部は丸くおさめる。口縁部は僅に内傾して、口部部は丸くおさめる。	脚部外側横方向のハケ調整を施す。部分的に横方向のハケ調整を施す。脚部下端から口縫部内面にかけて指痕(生痕)を認める。		
		*	24.0 5.5 — 20.2	直線的に立ちあがり。口縁部は「く」の字次に外反して端部は上方に僅かに内傾する。口部部は直角です。	内面横方向のハケ調整を施す。他の剥離のため観察不可能。	全体が2次施成を受け紅く発色する。	
		*	— — — 45.6	平底な端部から僅かに内湾気味に立ちあがる。	脚部外側は丸いハケ原体で縱方向のハケ調整を施す。横方向のハケ調整を削除して強化する。脚部下端部は指痕で強く下方にナダ。内面は丸いハケ原体で横方向のハケ調整を施す。その上を指痕による強いナダ調整を施す。	内面は僅ける。全体に難なつくりである。	
Fig 52 300	移動式壺		30.4 (8.5) —	背は脚部に縱方向に延び脚部上端で屈曲して、中央で僅に下方に張りやかなカーブを描いて延びる。器の外側に粘土接合帯を認める。	全体横方向に丁寧なナダ調整を施す。	器は僅ける。	
		*	— (10.4) 36.6	脚部は直線的に立ちあがり、脚部上端から内傾する。脚部外側に断面三角形の跡が認められる。脚の上には直状の把手が付く。	脚部外側は丸い縦方向のハケ調整の後、横方向のハケ調整を削除して強化する。脚部下端部は指痕で強く下方にナダ。内面は丸いハケ原体で横方向のハケ調整を施す。	全体に難なつくりである。300と脚部及び調整も同じであり同一個体と考えられる。	
	移動式壺	*	— (13.5) 32.6	器上外方に直線的に立ちあがる。下端部は平底な面をなす。底部は内・外側共に粘土接合帯を認める。	脚部外側は丸い縦方向のハケ調整の後横方向のハケ調整を施す。脚部内面は横方向のナダ調整を施す。	全体に難なつくりである。300と脚部及び調整も同じであり同一個体と考えられる。	
		*	— (7.4) —	裏の上端部片と思われる。三文字を認めるが中央は「木」と思われるが墨は不明。	内・外側共横方向のハケ調整を施す。		
Fig 50 303	鉢土器		— —	—	—	—	—
			長径 31.6 短径 9.0 重量 5000g	—	—	砂岩である。	
Fig 49 305	石製筋縫車	全長 2.9 上底 2.1 下底 3.3 重量 50g	—	裏面は台形状を呈す。	下底面はよく磨く。	滑紋岩である。	
		全長 4.1 金幅 2.8 孔径 0.8 重量 24g	—	筋縫形を呈す。	—	—	
	土鍬	全長 5.9 金幅 4.3 孔径 1.1 重量 85g	—	—	—	—	
306	土鍬	10.2 1.9 —	—	—	—	—	
		6.5	—	—	—	—	
Fig 47 308	S E 1 I層中	土鍬器 II	—	手底から外反して立ちあがり。口部部は丸くおさめる。	内・外側共横ナダ調整を施す。底部外側面ハラ切り及び板状供を認める。	—	

第28表 遺物觀察表

辨認番号	遺構番号	器種	口径 基部 高径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
Fig 47 309	S E 1	土師盃 杯	10.0 3.3 — 6.7	底部外側中央が僅かに突出する平底気味の底部から外反して立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。	体部内・外裏共クロ口を認め る。底部外側は回転ヘラ切り。	
			10.1 2.9 — 6.1	平底から外反して立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。	体部上端及び底面内面にロクロ口を認め。体部内・外裏面に横ナデ調整を施す。底部外側は回転ヘラ切り荒いナデ調整を施す。	
			10.2 3.2 — 7.0	平底から僅かに段をもって外反して立ちあがり、口唇部は僅かに肥厚して口唇部は丸くおさめる。	体部内・外裏共横ナデ調整を施す。底部外裏は回転ヘラ切り。	
311	I 様 中	※ 杯	10.2 2.8 — 6.8	平底から斜上外方に直線的に立ちあがり。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外裏共ロクロ口を認め る。底部外裏は回転ヘラ切り及 び板目模を認める。	
312			10.2 2.8 — 6.8	平底から斜上外方に直線的に立ちあがり。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外裏共ロクロ口を認め る。底部外裏は回転ヘラ切り及 び板目模を認める。	
Fig 48 313			10.8 3.9 — 5.8	ベタ高台気味の底部から内湾気味に立ちあがり。口唇部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部外側にロクロ口顕著。内面は横ナデ調整を施す。底部外側はヘラ切りの荒いナデ調整を施す。瓶口側を認める。	
314			14.6 5.6 — 7.2	中央が僅かに凹むベタ高台から内 湾気味に立ちあがり。口唇部は僅 かに外反する。口唇部は丸くおさ める。底部内面は僅かに凹む。	体部下半外側にロクロ口顕著。 体部内・外裏共横ナデ調整を施す。 底部外裏は回転糸切り。	
Fig 46 315	S E 1	※ 碗	— (3.9) — 7.0	足部斜削高台を有す。高台は「ノ」の字状に張り出。底部は僅 かに肥厚して平面をなす。底部から内湾して立ちあがる。	体部は内・外裏共ロクロ口顕著。	
Fig 47 316			9.9 1.2 — 7.1	平底から外反気味に立ちあがり。 口唇部は僅かに内折し、口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外裏共にロクロ口顕著。底部外裏は回転ヘラ切り。	完形
317			10.0 1.8 — 5.1	ベタ高台気味の瓶底から斜上外方に直線気味に立ちあがり。口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外裏共にロクロ口顕著。底部外裏は回転糸切り。	
318		※ 杯	9.5 2.7 — 6.8	平底から僅かに段をもって外反気 味に立ちあがる。口唇部は内側に僅 かに肥厚する。口唇部は丸くおさ める。	体部は内・外裏共にロクロ口顕著。底部外裏は不定方向のナデ 調整を施す。	
319			9.3 2.6 — 6.9	平底気味の瓶底から外反気味に立 ちあがり。口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外裏共に横ナデ調整を 施す。底部外裏は回転ヘラ切り 後荒いナデ調整を施す。	体部は内・外裏共に横ナデ調整を 施す。
320			9.2 2.9 — 6.0	平底から僅かに段をもって外反気 味に立ちあがり。口唇部は僅かに外 反する。口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外裏共にロクロ口顕著。 底部外裏はロクロ口の後荒いナデ 調整を施す。	体部は内・外裏共に横ナデ調整を 施す。
Fig 49 321		須恵器 碗	12.4 5.2 — 5.4	ベタ高台から内湾気味に立ちあが り。口唇部は僅かに外反する。口 唇部は丸くおさめる。	体部は内・外裏共ロクロ口を認め る。底部外裏は回転糸切り。	
322			15.6 4.9 — 7.0	ベタ高台から内湾気味に立ちあが り。口唇部は僅かに段をもって肥 厚して外反する。口唇部は丸くお さめる。	底部及び体部内面ロクロ口顕著。 底部外裏は回転糸切り。内・外 裏共に「十」字の火拂を認める。	
323			15.8 (4.5) — —	内湾気味に立ちあがり。口唇部は僅 かに外反して。口唇部は丸くお さめる。	体部外裏はロクロ口顕著。体部 内面はナデ調整を施す。	
324	上部器 碗	— — —	14.9 5.2 — 6.2	中央が僅かに凹むベタ高台から内 湾気味に立ちあがり。口唇部は僅 かに外反する。	体部外裏はロクロ口顕著。底部 外裏は回転糸切り。	
325			(1.9) — — 6.4	ベタ高台から内湾気味に立ちあが る。	体部は内・外裏共横ナデ調整を 施す。底部外裏は回転糸切り。	
326			(2.8) — — 7.9	外方に開削した新月形の瓶高台を 有す。底部から内湾して立ちあが る。	体部は内・外裏共横ナデ調整を 施す。	底部内面に丹が残す。

第29表 遺物観察表

検査番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 側径 底径	形態・文様	手法	備考
Fig 51 327	S E 1 I層下	土器器 利基	19.8 (7.3) — —	大きめの口を出す調子を有し、腹部は僅かに凹みをなす。内溝気味に立ちあがり、胴部上端から肥厚して口部部に至る。口唇部は面をなす。	胴部内面は横ナゲ調整。外面部のハケ調整を施す。胴部内・外面部指痕位置を認める。	内・外面部共に、外面部は2次焼成で紅く発色する。	
328		◦ 壺	19.0 (5.8) — —	内傾して直線的に立ちあがり、口縁部は「L」の字状に屈曲して口縁部と外方に肥厚する。口唇部は僅かに凹んで面をなす。	口部は内・外面部に横ナゲ調整を施す。胴部内・外面部指痕位置を認める。	外面部全体が黒ける。	
Fig 50 329		◦ 壺	29.0 23.0 25.2 — —	丸底気味の底部から内傾して立ちあがり、胴部上端部から僅かに外反する。口縁部は「L」の字状に外反する。口縁部は上方に肥厚して、口唇部は面をなす。腹部と口部部との間に2条の沈溝が並ぶ。	外面部は、胴部上端から下は内・外面部に横ナゲ調整を施すが、下は下り方向の引き調整を施し、底部は不定方向のハケ調整を施す。内面は、不定方向のハケ調整の後丁寧にナゲ溝を施す。胴部内面に指痕位置を認める。	胴部内面は窯ける。底部内面に無げ付さを認める。	
330		鉄製品	全長 5.9 全幅 2.1 重量 13.5g	箱円形の腹から4.3cm延び屈曲する。			馬具と思われる。
Fig 49 331	S E 1 I層下 目録	土器器 柄	17.0 6.6 — 9.8	「ハ」の字状に外方に膨らむ貼付輪高台を有す。体部は平底から後もって斜上外方に直線的に立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。	体部外面部は横ナゲ調整を施す。体部内面は摩耗が著しく観察不可能。		
Fig 47 332	S E 1 N層	* 盆	10.4 1.2 — 6.4	中央が僅かに凹んだ平底から外反気味に立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面部共に横ナゲ調整を施す。底部外側はハラ切り。		
Fig 49 333	S E 1 床面盤上	須恵器 柄	15.0 5.7 — 6.0	ベタ高台から内溝気味に立ちあがり、口唇部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面部共にクロロ目調査。体部外面部は部分的の不定方向のナゲ調整を施す。底部外側はハラ切り、内面に火拂を認める。		
Fig 52 334	S D 1	土器器 柄	— (2.0) — 5.2	ベタ高台気味の平底から内傾して立ちあがる。	体部は内・外面部共に横ナゲ調整を施す。底部外側はハラ切り。		
335	S D II	須恵器 柄	— (2.0) — 7.6	底部外側部に複数の貼付輪高台を有す。底部は面をなす。	磨耗が甚しく観察不可能。		
336		土器器 柄	13.9 4.6 — 8.0	平底から内溝気味に斜上外方に立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面部共に横ナゲ調整を施す。底部外側不定方向のハラ削りを丁寧に施す。底部内面ナゲ調整を施す。		
337	F 586	◦ 盆	12.6 (1.7) — —	平底から斜上外方に直線的に立ちあがり、口唇部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部外側クロロ目調査。内面は剥離が著しく観察不可能。		
338	F 583	◦ 盆	12.8 (1.8) — 8.8	平底状の底部から僅かに外反して立ちあがり口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面部共に横ナゲ調整を施す。底部外側はハラ切り。		
339	F 1649	◦ 桶	15.6 3.1 — 6.4	平底から内溝気味に立ちあがり口唇部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部外側クロロ目調査。内面は横ナゲ調整。底部外側はハラ切り。		
340	F 588	◦ 桶	(1.4) — 7.0	平底から斜上外方に直線的に立ちあがる。	体部は内・外面部共に横ナゲ調整を施す。底部外側はハラ切り。		
341	F 591	黑色土器 杯	— (1.4) — 8.6	断面近三角形の貼付輪高台を有す。平底から内傾して立ちあがる。	磨耗のため観察不可能。	Aタイプ	
342	F 500	須恵器 柄	14.2 5.8 — 6.8	ベタ高台から内溝気味に立ちあがり、口唇部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部外側クロロ目調査。内面は横ナゲ調整を施す。底部外側はハラ削り。	体部外側下半及び底部外側は窯ける。	
343	P 116	鉄製品 釘針	全長 2.1 全厚 0.6 重量 2g	扁平な棒錐からひねりをもって鉄部を作り先端部に及ぶ。		針先のかえりはない。	

第30表 遺物観察表

博物番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口徑 器高 縦 底径	形態・文様	手法	備考
Fig 61 344	S B 9 - P 11	土師器皿	12.0 2.1 —	内汚気味に立ちあがり。口縁部は僅かに外反し。口唇部は丸くおさめる。底部外面下端に朱の沈模が認められる。	体部は内・外面共横ナゲ調整を施す。底部外面は指頭圧痕を認める。		
345	S B 11 - P 14	々 盆	12.0 (2.5) —	内汚気味に立ちあがり。口縁部は直立気味に立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共横ナゲ調整を施す。体部は内・外面共に指頭圧痕を認める。		
349	S K 15	土師器皿	7.7 2.0 — 3.1	平底から外反して立ちあがり。口縁部は僅かに内済して口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共横ナゲ調整を施す。底部外面は回転余切り。		
350		々 杯	7.8 2.0 — 2.8	平底から外反して立ちあがり。口縁部は僅かに内済して、口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共横ナゲ調整を施す。底部外面は回転余切り。		
351		々 杯	7.7 2.2 — 3.3	平底から外反して立ちあがり。口縁部は僅かに内済して、口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共横ナゲ調整を施す。底部外面は回転余切り。		
352		々 杯	10.2 3.7 — 3.6	平底から外反して立ちあがり。口縁部は僅かに内済して、口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共横ナゲ調整を施す。底部外面は回転余切り及び根元痕を認める。		
353		々 杯	8.9 3.3 — 3.4	平底から外反して立ちあがり。口縁部は僅かに内済して、口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共横ナゲ調整を施す。底部外面は回転余切り。		
354		々 盆	12.0 (1.5) —	内汚気味に立ちあがり。口唇部は丸くおさめる。	内面は横ナゲ調整を施す。外側指頭圧痕者。		
355		須惠器杯	— (1.7) — 11.1	断面扇形の貼付輪高台を有す。平底から立ちあがる。	内・外面共ナゲ調整を施す。		
357	S K 36	土師器皿	12.3 3.8 — 5.4	平底から外反して立ちあがり。口縁部は僅かに内済する。口唇部は丸くおさめる。	内面はクロ口頭蓋。外面は横ナゲ調整を施す。底部外面は回転余切り。		
358		々 杯	11.6 4.0 — 5.0	平底から外反して立ちあがり。口唇部は丸くおさめる。	内面はクロ口頭蓋。外面は横ナゲ調整を施す。底部外面は回転余切り及び板目痕を残す。		
361	S D 10-A	々 杯	10.0 4.5 — 4.2	平底から外反して立ちあがり。口縁部は僅かに内済して、口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共横ナゲ調整を施す。底部外面は回転余切り。		
362	S D 17	々 杯	— (1.4) — 6.0	平底から外反して立ちあがる。	体部外面は横ナゲ調整を施す。内面は剥離して鏡面不可能。底部外面は回転余切り。		
363	S D 18	瓦質土器鍋	21.2 (11.8) —	内済して立ちあがり。口縁部近くに突出部を有す。口縁部は内面に肥厚して、口唇部は曲をなす。	口縁部は揃んで横ナゲ調整を施す。底部内面は石ドリのナゲ調整。底部外面は指頭圧痕者。外側は全面剥ける。		
364	S D 19	々 杯	4.7 1.7 — 3.9	中央部は僅かに囁んだ平底から直線的に外反し。口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共横ナゲ調整を施す。		
365		々 盆	16.7 4.4 — 11.0	平底から内汚気味に立ちあがり。口縁部は外反し。縁部は上方に肥厚する。口唇部は外張して曲をなす。	内面は横方向へのラミネーション。外側は回転ヘラ剥離を施す。口縁部は揃んで横ナゲ調整を施す。		
366		丸質土器鍋	25.1 (6.5) —	内済して立ちあがり。口縁部は僅かに内済して口唇部は直角をなす。断面三形形の貼付輪を有す。	内・外面共指頭圧痕者		口縁外面は2次焼成を受けて丸く発色する。
367	P 163	土師器皿	9.8 1.9 —	内汚気味に立ちあがり。口縁部は丸くおさめる。	口縁部内面は強いナゲ調整で内折する。外側は指頭圧痕者。		

第31表 遺物観察表

拂因番号	遺構番号	器種	口径 器高 法量 (cm) 側面 調査 底径	形態・文様	手法	備考
Fig 61 368	P 105	土器蓋 皿	11.4 1.8 —	中央部が凹んだ底部から内溝気味に立ちあがり、口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部は揃んで強い横ナデ調整を施す。内・外面共指顎圧痕調査。	
370	P 746	* 羽釜	28.0 (4.5) —	内溝して立ちあがり、口唇部より3.1cm下に断面三角形の鋸を付ける。口縁部は僅かに凹んで面をなす。	口縁部は内側して、浦部は内側して、羽釜外縁は叩き調整。笠は内・外面共横ナデ調整を施す。	
371	P 778	* 杯	— (2.4) 5.2	平底から斜上外方に窪から内溝気味に立ちあがる。	体部は内・外面共ロクロ目調査。底部外面同様折切り。	
372	P 1135	* 皿	10.6 1.9 —	中央部が凹んだ平底から内溝気味に立ちあがり、口縁部は直上外方に直線的に立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	口縁部は揃んで横ナデ調整を施す。体部内・外面共ナデ調整を施す。全頂に指顎压痕を認める。	
373	P 1494	* 皿	12.0 (2.3) —	内溝気味に立ちあがり、口縁部外縁は鋸を有す。口唇部は丸くおさめる。	口縁部は揃んで強い横ナデ調整を施す。内・外面共指顎圧痕調査。	
374	P 1544	* 皿	11.4 1.8 — 6.0	平底気味の底部から内溝して立ちあがり、口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部は揃んで強い横ナデ調整を施す。内・外面共横ナデ調整を施す。外縁に指顎圧痕。	
375		* 皿	15.0 (3.0) —	内溝気味に立ちあがり、口縁部は直立気味に立ちあがる。口縁部は内側して、口唇部は丸くおさめる。	口縁部は揃んで横ナデ調整を施す。内・外面共に指顎圧痕が認める。	
377	P 1802	瓦質土器 盤鉢	29.0 (9.0) —	斜上外方に直線的に立ちあがり口唇部は外傾して面をなす。	口縁部は揃んで横ナデ調整を施す。	
378	P 1804	* 小杯	4.4 1.8 — 4.8	平底から斜上外方に段をもって立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。	体部外縁は強い横ナデ、内面は不定方向のナデ調整を施す。底部外縁は赤切り及び板目風を残す。	全体的に形が歪む。

第32表 土鍤・釘・砥石計測表

拂因番号	遺構番号	器種	全長 cm 法量 重量 g 孔径 cm	備考	拂因番号	遺構番号	器種	全長 cm 法量 重量 g 孔径 cm	備考
Fig 62 345	N B 9 — P 4	鉄製器 釘	4.2 0.4 3.1	断面方形を呈す。	Fig 62 359	S D 5	鉄製器 釘	4.5 0.6 3.0	断面方形を呈す。
Fig 61 347	S K 4	土鍤	(3.1) (2.1) 7.8 (0.6)		360	S D 10	砥石	11.6 (6.2) 1130	半分程破損する。 三面使用。表面は特に滑かな面を有す。
Fig 62 348		鉄製器 釘	5.0 0.6 4.5	断面方形を呈す。	369	P 409	鉄製器 釘	3.5 0.4 6.1	断面方形を呈す。
356	S B 9 — P 4	* 釘	6.7 0.8 13.9 —	断面方形を呈す。	Fig 61 376	P 1711	土鍤	(3.9) 1.1 4.3 0.5	
					Fig 62 379	P 1135	明鏡 洪武通宝		表は「洪武通宝」、裏は「錢」の文字を認める。

**ひびのきサウジ遺跡発掘調査
火山灰分析結果報告書**

1990年1月19日

*** Grouping Data Sheet ***

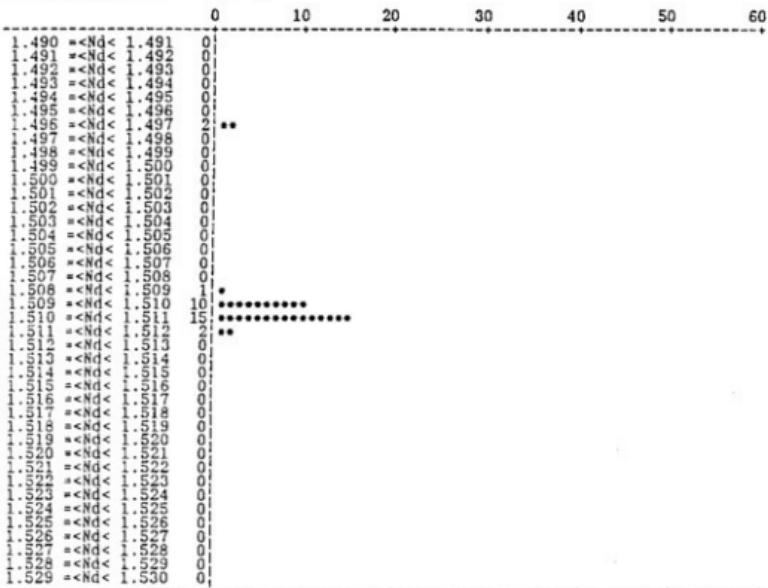
90/01/17
16:27:28

Series Name : 1977 年 7 月
Sample Name : 1977 年 7 月 III
Analist : Yamashita
Material : gl.
Immersion Oil: No.3.8 (Nd=1.51907-0.000393·t)

(Ascent+Descent)/2

Group.	1	1.4965
Group.	2	1.5087
	1.5091	1.5092
	1.5095	1.5096
	1.5097	1.5097
	1.5098	1.5098
	1.5099	1.5100
	1.5101	1.5101
	1.5101	1.5101
	1.5103	1.5103
	1.5104	1.5104
	1.5104	1.5105
	1.5105	1.5107
	1.5107	1.5107
	1.5108	1.5108
	1.5111	1.5111
Total :	30	1.4960 1.5118 0.0158 1.5092 0.0036 -3.1330

*** Histogram *** * * 1



**** Original Data Sheet ****

90/01/17
15:54:38

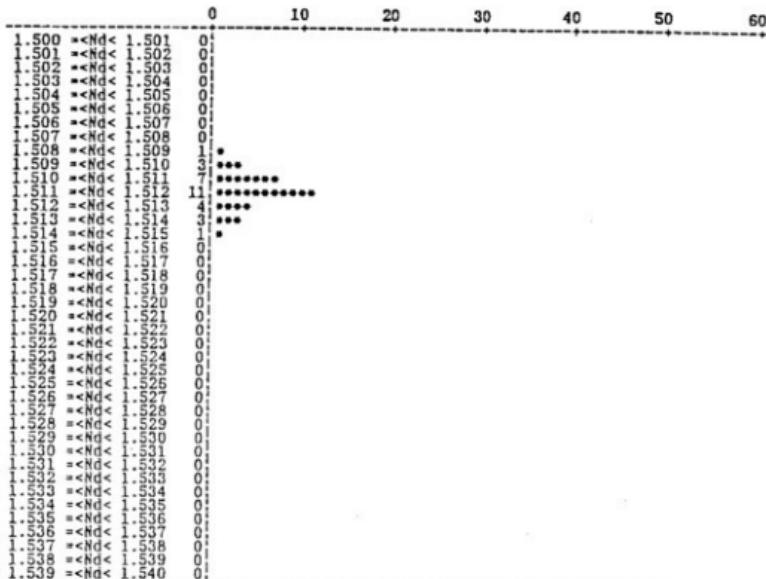
Series Name : ハマシタ タク
 Sample Name : tt' / # 777
 Analyst : Yamashita
 Material : gl.
 Immersion Oil: No.3.8 (Nd=1.51907-0.000393-t)

(Ascent+Descent)/2

1.5082	1.5096	1.5104	1.5109	1.5116	1.5121	1.5111	1.5113	1.5115	1.5118
1.5149	1.5093	1.5105	1.5109	1.5114	1.5122	1.5135	1.5099	1.5102	1.5108
1.5111	1.5118	1.5125	1.5133	1.5108	1.5112	1.5117	1.5125	1.5134	1.5122

Total : count min max range mean st.dev. skew.
 30 1.5082 1.5149 0.0067 1.5114 0.0014 0.2340

*** Histogram *** * = 1



試料名	火山Gr含有率	含有重鉱物	火 山 ガ ラ ス の 特 徴
ひびのき サウジ 音地	80 %	斜方輝石 Opx 单斜輝石 Cpx 磁鐵鉱 Mt	火山ガラスの含有率が高く、1種類のガラスで構成される。特徴的な濃い色付ガラスを含み、高い屈折率值をもつ。
ひびのき サウジ直層	5~10%	同 上	2種類のガラスから構成される。

資料

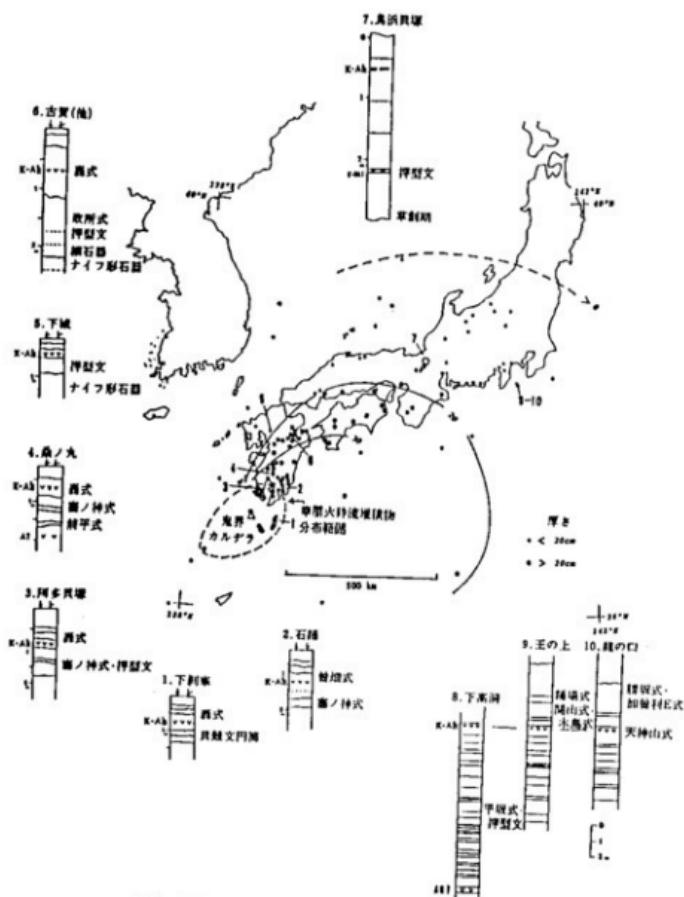


図1 鬼界アカヤ火山灰 (K-Ah) の等厚線図および考古遺物との
層位関係を示す柱状図
各柱状図は各遺跡発掘報告書に基づいて作成

町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重雄 (1984) : テフラと日本考古学 — 考古学研究と関係するテフラのカタログ — . 古文化財の自然科学的研究, 869-928.

資料

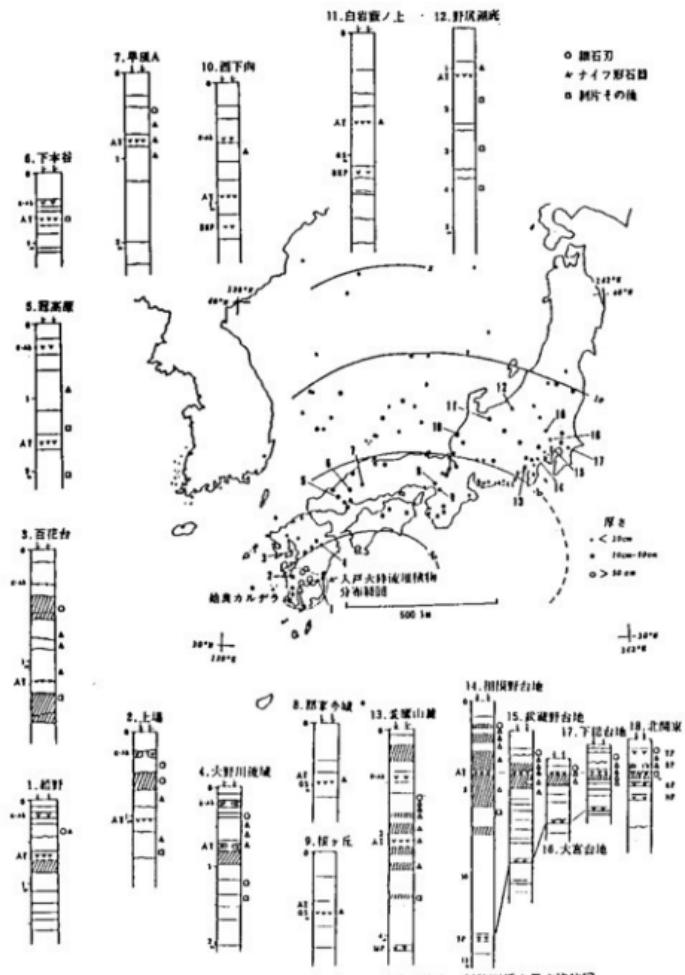


図2 始良Tn火山（AT）の等分標緻および考古遺物との層位関係を示す柱状図
各柱状図は各遺跡発掘報告に基いて作成

町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重謙（1984）：テフラと日本考古学—考古学研究と関連するテフラのカタログ—、古文化財の自然科学的研究、869-928。

図版



A区 完掘状態(北から)

B区 宅地状態(北から)

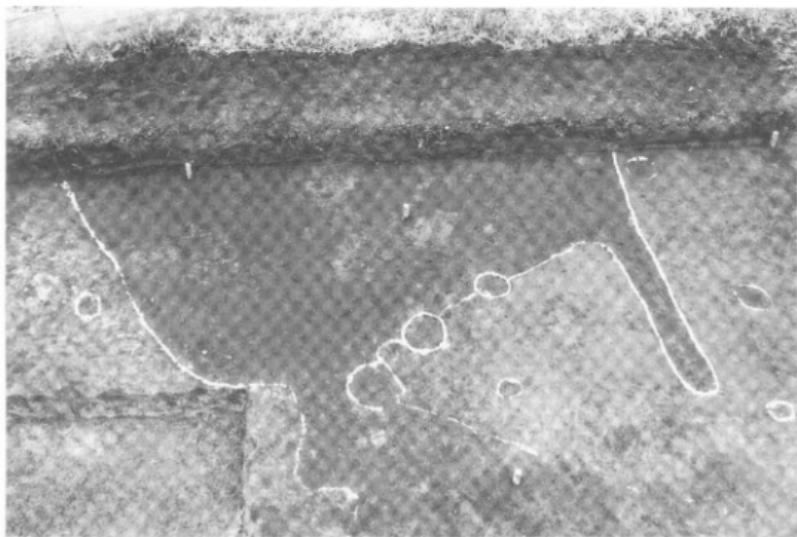




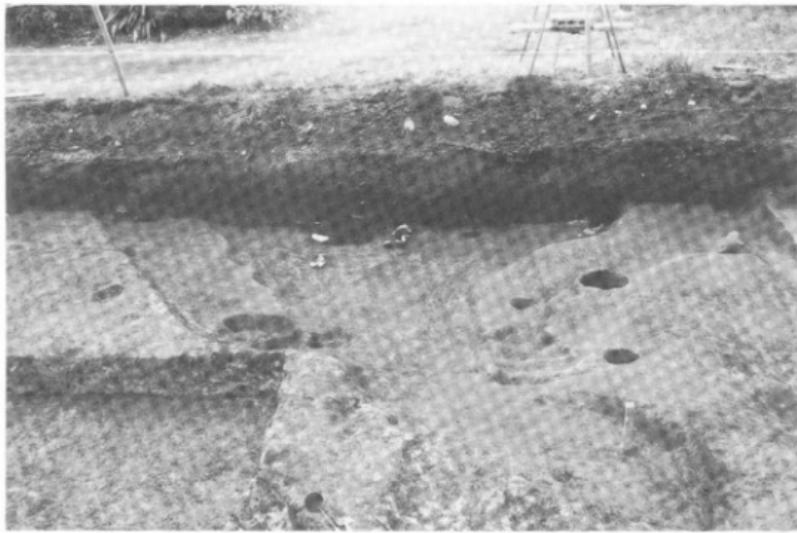
調査前全景(東から)



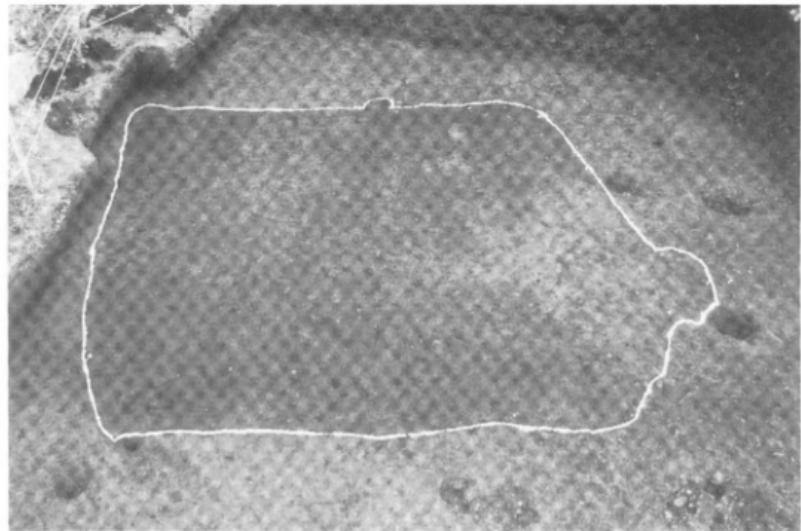
調査前全景(南から)



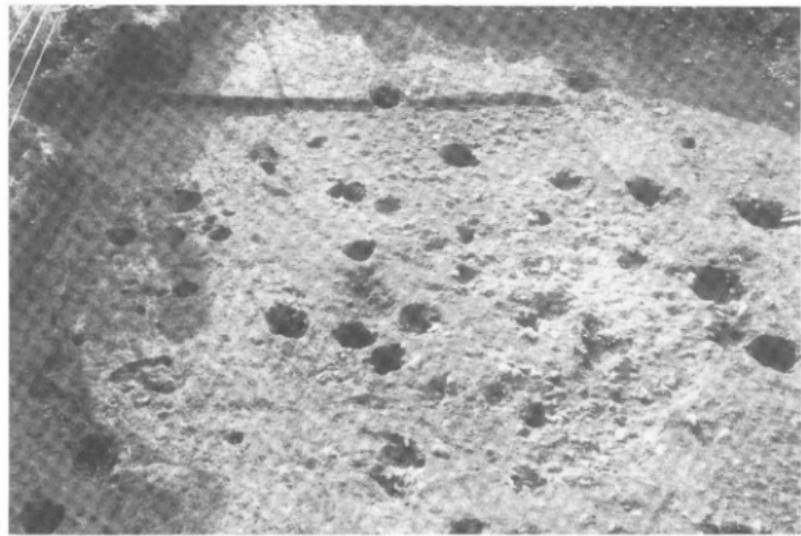
ST 1 検出状態(東から)



ST 1 完掘状態(東から)



ST 2 検出状態(東から)



ST 2 完掘状態(東から)